

令和5年度



WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業 研究報告書・最終年度

令和6年3月



巻頭言

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業4年目を終えて

中村学園女子高等学校

校長 石丸篤志

WWLカリキュラム開発拠点校に認定されてから4年、事業採択されてから3年となりました。コロナ禍とともに歩んだ本事業ではありましたが、コロナ禍によって教育業界も急速にデジタル化が進んだことが、逆にオンラインを利用してコミュニケーションや学びの可能性を広げることに繋がりました。生徒たちは「with コロナ・デジタル化」という新しいあり方を柔軟に受け入れ、試行錯誤や創意工夫を繰り返しながら多くの取り組みを成し遂げました。まさに予測不能な時代を生きる力を身につけるということを体現してくれたと思います。

各学年の取り組みとしましては、1年生全員対象のグローバル・キャンパスを、立命館アジア太平洋大学の国際学生を招いて学校で対面実施しました。今年は、1日目の午後に交流を深め、2日目にディスカッションなどの活動を実施することで、昨年以上に有意義な体験となりました。また、1年GIクラスは2・3学期にアントレプレナーシップ教育の一環として、グループに分かれてのピッチコンテストを行い、身近な課題を見つけ解決する企画力や創造力、調和力等を身につけました。3学期には25名の留学希望生徒たちがカナダへ2か月間の中期留学を行っています。ホームステイをしながら現地校に通っていますが、帰国は4月になります。英語力はもちろん、異文化理解や多様性受容力、主体的に行動する力を高めることを期待しています。

2年GIクラスは海外フィールドワークをマレーシア・シンガポールにて実施しました。フィールドワークを通して各自の探究活動も深みを増したと思います。またフィールドワークでの知見を活かして12月に開催した国際会議「食のサミット」では、司会進行をはじめとする運営を2年GIクラスの生徒が中心となって行いました。連携校である国内外の高校生と意見を交換しながらよりよい会議になるよう主体的に活動する姿が印象的でした。

3年GIクラスでは、昨年度の「食のサミット」での経験を踏まえた探究活動の集大成となる論文作成に取り組みました。この論文は、テーマ設定からリサーチやアンケート、そして分析と、それぞれが自分の興味関心のあるテーマに沿って作成しています。生徒一人ひとりが、自分自身の探究活動として自ら積極的に取り組んだ過程を成果物としてまとめることができました。

最後に、WWL運営指導委員の皆さまをはじめ、生徒の取材を快く引き受けて下さった皆さま、また、ご自身の経験を生徒たちに分かりやすく伝えて下さった皆さま、多くの方々に支えられて、WWL事業を無事終了することが出来ました。ご協力いただき皆さまに深く感謝申し上げます。委託事業の期間は終了いたしますが、次年度以降も各活動や行事の内容を精査しながら、これからの社会を生きていく生徒たちに必要な資質・能力の育成に学校全体で邁進してまいります。今後ともご指導・ご支援を賜ることができましたら幸いに存じます。

報告書 目次

I 令和5年事業完了報告書	p. 4
II 令和5年度事業実施計画書	
1. 事業実施計画書	p. 22
2. WWL コンソーシアム構築支援事業の構想概要	p. 28
III 管理機関の取り組み	
1. 職員研修「総合的な探究の指導に関する研修会」	p. 29
2. 中村学会の開催	p. 31
3. 海外交流アドバイザーの配置	p. 32
4. 情報共有体制の整備	p. 33
5. 教員チームによるコーチング	p. 35
6. GI 留学プログラム参加支援	p. 36
7. SDGs の取り組み（コンポストの実施）	p. 37
IV AL ネットワークとの取り組み	
1. 全国高校生フォーラム参加	p. 39
2. 九州大学 世界にはばたく高校生の成果発表会への参加	p. 41
3. 京都先端科学大学付属高校 GSG および成果発表会への参加	p. 43
4. 高知県立高知国際中学校・高等学校での探究成果発表会への参加	p. 46
5. WWL 報告会	p. 47
6. GI フィールドワーク Basic（グローバル・キャンパス）の開発と実施	p. 50
7. GI フィールドワーク Advance（海外FW）の開発と実施	p. 54
8. GI スキルアップセミナー開発・実践	p. 61
9. 中村学園大学・短期大学部の科目等履修生制度（AP）の活用	p. 64
10. 中村学園大学・短期大学部の学部・学科説明会	p. 65
11. 立命館アジア太平洋大学（APU）学校説明会	p. 65
12. ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ（KCC）学校説明会	p. 65
V カリキュラム開発	
(i) 探究的な学び	
1. 「グローバル探究」の開発と実施	p. 66
2. GI 探究の開発・実践（2年）	p. 71
3. GI 探究の開発・実践（3年）	p. 74
4. 英語探究の活動（1年）	p. 76
5. 英語探究の活動（2年）	p. 77

6.	英語探究の活動（3年）	p. 78
7.	GI スタートアップセミナーの開催	p. 80
8.	GI プレゼンテーション（論文発表会）の実施	p. 82
9.	第1回GI講演（グローバル講演）	p. 86
（ii） 国際的な学び		
1.	GI 留学プログラムの開発・実施	p. 88
2.	留学生の受け入れ	p. 90
3.	夏期海外研修合同説明会	p. 94
（iii） 国際会議の開催		
1.	「食のサミット」の開催	p. 95

VI 事業全体の検証

1.	検証委員会	p. 104
2.	第1回運営指導委員会	p. 106
3.	第2回運営指導委員会	p. 108
4.	カリキュラム検討委員会	p. 110
5.	指導指標の測定	p. 111

VII 関係資料

関係資料1	令和5年度WWL関連年間行事一覧	p. 113
関係資料2	令和5年度WWL事業効果検証生徒アンケート結果	p. 115
関係資料3	広報紙（Nakajo-Times Global）	p. 117

I 令和5年度事業完了報告書

令和6年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1
管理機関名 学校法人中村学園
代表者名 理事長 中村 紘右

令和5年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和5年4月1日～令和6年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 中村学園女子高等学校
学校長名 石丸 篤志

3 構想名 「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

4 構想の概要

これまでのSGH事業の成果をさらに発展・充実させながら、地球規模の課題「食」に関わる探究活動による課題解決を通じてSociety 5.0をたくましく創造的に生きる人材を育成する。ここで扱う「食」の課題は、食に関わる4領域（社会文化・環境・経済・栄養）及びSDGsのターゲットである。この教育的基盤となるALコンソーシアムを組織し、拡大と発展を図りながら、広く生徒たちに高度な学びの機会を提供し、より多くのイノベティブなグローバル人材を育成する。育成過程において、文理融合型のカリキュラムやイノベーションスキルの育成法・評価法、生徒の多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓、留学生との協働を最適化する実践プログラム、大学教育の先取り履修による高度な学びの提供方法等の開発へ特に注力することで、「食」を切り口として新しい価値を創造し、グローバル・イノベーターを育成するための教育プログラムのスタンダードモデルを創りあげる。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和5年4月1日～令和6年3月31日）												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
運営指導委員会開催	委員 依頼			連絡・調整 ←→		8日 開催					連絡・調整 ←→		8日 開催
AL ネットワーク 連絡会開催										連絡・調整 ←→		15日 開催	
検証委員会開催											28日 開催		
留学プログラム 参加支援			説明会 エントリー	一次 選考		二次選考 結果通知							
事業評価の実施			生徒ア ンケー ト実施							生徒・教 員・学校 アンケート実施			
財政支援								GI 留学 支援金 支給					

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況について記載すること。特に、連携校において、国の他事業を実施している場合、複数の取組を実施するための体制を整備したことや調整したこと、工夫したこと等について。

本事業では、次の表に示すAL ネットワーク組織を整備し、研究開発と実践を進めた。

区分	機関名・学校名	コンソーシアムにおける主な役割
管理機関	学校法人中村学園	<ul style="list-style-type: none"> ▶事業全体の統括 ▶業務執行体制の管理と整備 ▶必要経費の管理と執行 ▶運営指導委員会の開催・調整 ▶検証委員会の開催 ▶AL ネットワーク連絡会の開催・調整 ▶事務局からの情報の発信・収集
事業拠点校	中村学園女子高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 探究」「グローバル探究」の開発と実践 ▶文理融合型選択制を導入したカリキュラム開発 ▶カリキュラム検討委員会の開催・調整 ▶国際会議「食のサミット」の開催・調整 ▶成果報告としての「WWL 報告会」の開催・調整 ▶事業連携校と相互に参加する行事の調整・実施 ▶事業協働機関との企画・連携調整・実施 ▶学校ホームページ、広報誌の発行
事業連携校	中村学園三陽高等学校 京都先端科学大学附属高等学校 高知県立高知国際高等学校 SMK Sultan Ibrahim Girls School (マレーシア)	<ul style="list-style-type: none"> ▶探究授業・成果報告会・国際会議への相互参加 ▶研究開発に関する情報交換 ▶AL ネットワーク連絡会への参加

	84 th School (モンゴル) Academic of Lyceum Westminster International University in Tashkent (ウズベキスタン) 信男教育学園高等学校 (中国) Kanarat Bamrung Pathum Thani school (タイ)	※タイの新規連携校は R6 年度より協働事業を開始
事業協働機関	立命館アジア太平洋大学 九州大学共創学部 中村学園大学・中村学園大学 短期大学部 中村調理製菓専門学校 中村国際ホテル専門学校 ハワイ大学 KCC ウエストミンスター大学 マーセッド大学 マレーシア工科大学 SG インキュベート株式会社 株式会社リンガーハット 株式会社久原本家グループ 国連 WFP 協会	<ul style="list-style-type: none"> ▶研修スタッフとしての学生の斡旋・協力 ▶研究発表イベントの参加奨励と指導・助言 ▶アドバンスト・プレイズメントの実施・整備 ▶高度な教科指導への協力・指導・助言 ▶探究活動・アントレプレナーシップ講座への講師派遣 ▶論文作成の指導・助言 ▶学校説明会の開催と進学準備の相談対応 ▶国際会議「食」のサミットへの参加 ▶AL ネットワーク連絡会への参加
カリキュラム アドバイザー	タイガーマーブ株式会社 取締役副社長 中村 寛大 氏 九州大学基幹教育院 准教授 小島 健太郎 氏	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 探究」「グローバル探究」等カリキュラム全般に関する指導・助言 ▶カリキュラム検討委員会への参加
海外交流 アドバイザー	学校法人中村学園経営企画室 伊東 正子 氏	<ul style="list-style-type: none"> ▶留学希望者への支援、管理機関内の調整 ▶海外研修プログラムの企画・調整 ▶留学生受入れに関する外部機関との連携・調整

b. 本事業が円滑および適切になされるよう、管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況について。

本事業が円滑および適切になされるよう、管理機関と事業拠点校の担当者間で会議を定期的開催し、進捗管理やカリキュラム内容の協議を行うとともに、令和 4 年度より導入した Microsoft 社の Teams を利用し連絡共有体制を整え、迅速かつ正確な情報共有を可能にした。AL ネットワーク内においては、国内外の連携校および各種委員との連携調整を主にメールを使用し適宜に行い意思疎通を図った。

地域などへの対外的には、拠点校の WWL 事業に関する取り組み内容をホームページでタイムリーに掲載したり、定期刊行物を年 2 回発行し情報公開を継続して行った。

c. 構想内容の水準を維持し、必要な改善を図るために、管理機関の長、拠点校等の校長が果たした役割について。

構想内容の水準を維持し必要な改善を図るために、管理機関は外部機関との連携を図りながら積極的な情報収集と適切な指示を事業拠点校へ向けて発出した。また、事業拠点校は管理機関からの指示を受け、カリキュラム開発を計画的・組織的に実施・改善を行なった。

管理機関の長である学校法人中村学園理事長は、事業責任者として AL ネットワーク組織を適切に管理し、事務局へ指導・助言を行いながら事業構想の深化へ向けて必要な改善を図った。事務

局は管理機関長の指示を受けて、運営指導委員会や検証委員会を招集し、AL ネットワーク組織のより強固な協力体制の構築を図った。また、事業拠点校への適切な指示により、事業の進行全体を調整した。

事業拠点校の校長は、拠点校内および連携校との諸活動が円滑に進むよう、連携校の校長とも連絡を取りながら事業の管理を行った。また、校内の執行部にあたる教育開発部への指導・助言および業務の遂行について監督を行った。

d. 本事業の実施に際し、専門的見地から指導・助言に当たる運営指導委員会の開催実績や事業の実施状況を検証するための組織（検証組織）等が検証するために収集した資料等の状況について。

・運営指導委員会の構成※敬称略

区分	構成員氏名	所属	役職
委員長	岩本 仁	学校法人福岡成蹊学園	理事長
委員	小野 博	グローバル人材育成教育学会	名誉会長
	高橋 信命	福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局	参事補佐
	藤 真臣	NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡	専務理事
オブザーバー	今長谷 大助	SG インキュベート株式会社	代表取締役社長
	河邊 哲司	株式会社久原本家グループ本社	代表取締役社長
	副島 雄児	国立大学法人九州大学	名誉教授
	米濱 和英	株式会社リンガーハット	名誉会長

・開催実績

回	日時	内容
1	令和5年9月8日（金） 15:00～17:00	令和5年度事業目標・運営方針、GI クラス探究活動見学、次年度以降の自走化に向けた課題について共有および検討
2	令和6年3月8日（金） 15:20～16:30	WWL 事業総括および次年度以降の自走化について共有および検討

e. 管理機関が、拠点校等の卒業生の卒業後の進路とイノベティブなグローバル人材としての成長の過程を追跡把握する仕組みを構築し、必要な情報を収集する状況について。

事業拠点校のWWL 事業（旧 SGH 事業を含む）の対象となる SG クラスおよび GI クラス生徒の進路については、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定時（平成 27 年度）に入学した生徒より、追跡を実施している。基本的には、卒業時の担任による進路先の記録と更新を随時行うものである。現在、同窓会組織と連携して卒業後のキャリア等のデータの取り扱いを行っていくことを検討中である。

f. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる留学生等の日本での学習や生活を支援する体制について。（該当する場合）

2018 年度～2022 年度に実施された文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」では、5 年間で計 15 カ国 40 名の留学生を事業拠点校にて受入れ、協働学習や行事への参加を通じて異文化理解・交流を深めた。本事業の後継事業として、今年度より「アジア高校生架け橋プロジェクト+（プラス）」が開始し、11 月～3 月にかけて 1 期生として 4 カ国 4 名（韓国、スリランカ、ネパール、モンゴル）を受け入れた。これまでのノウハウを生かし、公益財団法人 AFS 日本協会の担当者と連携を図りながら留学生の生活面におけるサポートを行うとともに、事業拠点

校での協働学習、日本語レッスン、特別プログラムおよび行事参加を通じて生徒・留学生双方の異文化理解への深化を図った。

g. 事業拠点校での取組について、本事業による取組が学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況について。

・授業改善

事業拠点校では、毎学期末にすべての常勤教員を対象とした指導指標の自己評価の測定を行っている。この指導指標は、これから生きる生徒たちにとって必要とされる 21 世紀型スキル等の能力を習得するにあたり、教師が指導上改善すべき項目を事業拠点校で独自の基準を設け指標化したものである。令和元年度から令和 5 年度までの測定結果(いずれも年度ごとの平均達成率(%))は次の表の通りである。

大項目 ※ () 内は指標項目数	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
A 授業の基本姿勢 (5)	69.2	66.3	78.4	74.7	82.1
B 生徒の「深い学び」を促す授業への取り組み (4)	45.9	38.6	52.4	51.9	55.7
C 「生徒が学びの主人公」となる授業づくり (2)	38.4	70.1	84.5	90.8	93.7
全項目平均 (%)	53.7	56.0	67.7	69.3	74.6

令和 3 年度まではコロナ禍でオンライン授業を行った期間があったが、令和 4・5 年度はほぼすべて対面授業を行った。表中の A、B、C の項目の達成率が 5 年間で向上していることが分かる。対面授業の再開に伴い、事業拠点校の教員の授業改善に対する意識の高まりや 21 世紀型スキルをはじめとする「生徒に身につけさせたい力」の共通理解が浸透した結果と予測できる。WWL 事業を通じて、教員全体が探究活動に関わる機会が多くなり、指導をする姿勢に大きな変化が見られた証左である。

・生徒の意識

本事業により事業拠点校の生徒の意識の変化がどのように見られたかについては、年 2 回 (令和 5 年度は 4 月・1 月実施) の効果検証アンケートによって調査している。4 月と 1 月の結果を比較すると、「コミュニケーション力」「グローバルキャリア形成」の 2 項目は全体としては肯定的評価が増加している。「GI フィールドワーク Basic (グローバルキャンパス)」や「食のサミット」等の行事を通じて、国際的な諸問題への関心の強まりや、外国人との交流や留学について関心を深めているのではないかと考えられる。一方で「突破力・忍耐力・レジリエンス」「高度課題解決力」の 2 つの項目は肯定的評価が低下している。高校 1 年生、2 年生ともにグローバル探究では、自分の興味・関心を起点に自由なテーマ設定で調査を行っている。テーマ設定、問いの立て方、調査・分析と探究のサイクルをまわす難しさを感じているため評価が低下したと考えられる。数値としては下降しているが、主体的に探究に取り組んでいるが故の結果ととらえることもできる。探究活動の結果よりも過程そのものに学習の価値を置くことを強調していきたい。

h. 国が実施しているアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を受け入れた場合、国名や人数等について。

- ▶ 受け入れ国：韓国、スリランカ、ネパール、モンゴル 計 4 か国
- ▶ 受け入れ人数：各国 1 名 計 4 名

【財政等支援】

a. 管理機関が、本事業の運営にかかる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として、計画段階よりさらに計上したものについて。

令和 3 年度より開始した GI 留学プログラムの実施に伴い、学園の支援金制度を設置している。

本制度は、留学に対する強い意志をもち意欲のある参加希望者の経済的負担を軽減し、留学成果をあげることを目的として開始した。選考においては、1次選考（書類）を内部選考委員（校長・教頭・事務長・大学学生部長）で実施し、2次選考（プレゼンテーション）を学園審査として行う。本制度は、WWL 連携校であり本学園併設校の中村学園三陽高等学校と合同で実施し、学園内の留学促進に努めている。今年度は、希望者 21 名のうち、選考を通過した 4 名に総額 220 万円の渡航費用を GI 留学支援金として支給した。

b. 管理機関が、事業の実施に必要な取組に対し、人的又は財政的な支援や教職員を育成するための研修やセミナー等を実施した状況について。

・教職員研修

探究活動への理解、指導方法を学ぶことを目的に、九州大学・共創学部の三木 洋一郎教授による研修を行った。大学での PBL や TBL の実践を例示しながら、学生が議論し、教員がファシリテーションを行う教育活動が紹介された。生徒が主体的に探究活動に取り組むために、教員が持つべきスタンスはどうあるべきか考えさせられる機会となった。

c. 管理機関が、国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したことについて。

委託期間終了後、連携校・事業協働機関との継続的なパートナーシップを築いていくために、自走化に向けて既存のプログラムの充実を図る。また新たな連携先の開拓等を行う。例年実施している主要行事の「GI フィールドワーク basic（グローバルキャンパス）」は、拠点校全ての生徒がこれまで以上に国際理解や高次の課題解決力、協働力を身に付けられるように内容の見直しを行った上で継続していく。また新たに「探究成果発表会」を企画し、探究学習の成果を発表・共有する場を設け、全校生徒が参加できるプログラムを実施していく。積極的に AL ネットワークを活用し、連携校の探究活動も参考にしながら、GI クラス以外の生徒の探究活動の充実も図っていく。

本年度はタイの高校（Kanarat Bamrung Pathum Thani school）と新規の連携を結んだ。来年度以降協働学習の機会を増やしていく予定である。またニュージーランドの高校（Tauranga Girls' College）とも現在、連携交渉中である。

【ALネットワークの形成】

a. 構想目的・年度計画の策定、事業の運営、達成状況の評価・見直しのため、管理機関の長と拠点校等における本事業の運営責任者、主要な協働機関の関係者等をメンバーとするALネットワーク運営組織の実績について。

本事業の構想目的・計画・達成状況及び今後の課題や方向性を確認するために、管理機関や事業拠点校の代表者、連携校・事業協働機関の代表者を招集して AL ネットワーク連絡会を開催している。令和 5 年度の開催実績は次の通りである。

・AL ネットワーク連絡会(オンライン実施)：(国内)令和 6 年 3 月 11 日（金）16:00～16:30
(海外)令和 6 年 3 月 13 日（水）14:00～14:30

内容：今年度の事業総括、事業達成状況・検証結果、次年度の課題と計画、質疑応答等

b. AL ネットワーク運営組織により、本事業が円滑及び適切になされるよう、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、新たな協働事業の開発、有効な事業実施を実現したことについて。

AL ネットワーク内の連絡は、主として管理機関の事務局及び事業拠点校の教育開発部が、連携校や事業協働機関とメールや電話、郵送等の手段で情報の共有を行っている。また、連携校や事業協働機関を訪問し、情報共有や事業の取り組みにおける相談等を行った。事業拠点校の諸行事の運営における企画～実施の一連の流れにおいては、管理機関の事務局と事

業拠点校の教育開発部の担当者が連携を図り内部での情報共有を行った。

c. ALネットワーク運営組織が、国内外の大学、産業界、その他国際機関等との連携・交流を通じて、当該プログラムの修了生の、国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学等の促進に寄与したことについて。

今年度も事業拠点校では、国内外の事業協働機関による学校説明会を開催し、国際的な分野を学ぶことへの進学意欲を喚起する試みを継続して行った。実施したのものとしては下記の通りである。

説明対象校	開催日時	対象	内容
立命館アジア太平洋大学	令和5年8月2日(水) 15:30~16:30	事業拠点校の希望する生徒・保護者	学部・学科紹介、学費、学生生活、個別相談
ハワイ大学 KCC	令和5年6月16日(金) 16:20~17:00		学校紹介、入試のシステム、学費、渡航までのスケジュール、インターンシップ制度

d. ALネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況とともに、本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況について。

事務局の設置及びカリキュラム開発に関わる人材配置は次の表の通りである。

区分	機関・担当者等	カリキュラム開発に関わる主な業務項目
事務局	学校法人中村学園理事長 学校法人中村学園経営企画室長	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 事業計画の作成・進捗管理 ▶ AL ネットワーク内の連絡・調整 ▶ AL ネットワーク全般の情報の収集・発信 ▶ 事業評価の実施 ▶ 事業経費の管理・運用指導
カリキュラムアドバイザー	タイガーモブ株式会社 取締役副社長 中村 寛大 氏 九州大学基幹教育院 准教授 小島 健太郎 氏	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 事業拠点校のカリキュラム開発全般に関する指導・助言 ▶ カリキュラム検討委員会への参加
海外交流アドバイザー	学校法人中村学園 経営企画室 伊東正子 氏	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 事業拠点校の留学プログラムや海外研修の企画・実施、留学生の受入等国际交流全般に関する指導・助言・外部機関との連携調整 ▶ 教育開発部会への参加
事業拠点校	教育開発部員 11 名 (外国人講師 2 名を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 本事業に関わる教育実践を円滑に進めるための企画・運営全般 ▶ 事務局への報告 ▶ 教育開発部会への参加
	探究授業担当者チーム	<ul style="list-style-type: none"> ▶ GI クラスの探究授業の計画・実践・評価 ▶ 教育開発部への報告

e. ALネットワーク運営組織において、国内外の大学、企業、国際機関等と協働し、国内外の高等学校等との連携によるテーマと関連した高校生国際会議等の開催準備状況について。

高校生国際会議については、事業拠点校が主催する「食のサミット」を平成29年度より開始し、今回が7回目の開催(令和5年12月14・15日開催)となった。今回は前年度に続き、海外校はオンライン参加とした。

今回のテーマは「Addressing today's food and health challenges through the lifespan

(生涯を通じて現代における食と健康の課題に取り組む)」とし、事業拠点校及び国内連携校から4チーム15名、海外連携校から2チーム6名の生徒が参加して模擬国連形式で議論を交わした。また、これとは別に事業拠点校内で同テーマのディスカッションを行い、事業拠点校のGIクラスだけではなく全生徒が食の課題について理解を深めた。このサミットでまとめた提言書を国連WFP協会へ提出した。

f. 事業成果の社会普及のため、社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施（あるいは計画）について。

事業拠点校では、探究成果の報告として年1回のWWL報告会を開催している。令和5年度は令和6年3月8日に開催した。講堂ステージにおいて、GIクラス生徒及びアジア高校生架け橋プロジェクト留学生による発表、国内連携校3校の代表者がオンラインで成果発表を行った。来賓5名が来校し、オンラインによりカリキュラム検討委員2名、検証委員1名が参観した。

また昨年度から、事業拠点校の高校3年GIクラスが「GIプレゼンテーション」と称する論文発表会を開催している。GIクラスは3年間の集大成として論文制作を3年次に行うが、論文完成前の最終指導として7月28日に論文の中間発表を行った。運営指導員を中心とした7名の論文指導員から指導を受けた。

g. ALネットワーク運営組織が、構想目的の達成に資する取組を計画し、その効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供を行ったことについて。

下表に今年度の実績についてまとめた。いずれも管理機関および事業拠点校の担当者間で連携を図り実施した。

項目	関連機関	内容
広報紙の発行・配布	AL ネットワーク内外の機関	広報媒体を通して、本事業での実践（主に特別授業や行事）に関するタイムリーな情報を年2回発信
連携校への訪問	京都先端科学大学附属高等学校 高知県立高知国際高等学校	事業の説明、運営に際しての情報交換、学校設定教科の運用に関する質疑応答
事業協働機関への訪問	国連WFP協会 SG インキュベート株式会社	行事への協力依頼
AL ネットワーク内の諸連絡・調整	AL ネットワーク内の全機関（特に国内連携校）	主に行事の相互参加に関する連絡・調整等
その他 先進校視察	立命館宇治高等学校 帝塚山高等学校 清教学園高等学校	国際教育や探究活動の視察

h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等について。
該当無し

教育研修実施								14日 職員研修				
事業効果検証アンケート	実施 データ 分析									実施 データ 分析		

(2) 実績の説明

【研究開発・実践】

a. 設定したテーマ (SDGs、経済、政治、教育、芸術等) について。

本事業では『「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成』をテーマとして掲げている。SDGs においては「社会」「環境」「経済」という3つの側面で開発目標をバランスよく統合した形で設定しているが、私たちはこれらに食生活の改善や飽食・貧困の問題に関わる「栄養」の側面を加えるとともに、食の文化的側面を「社会文化」として含む形で解決すべき社会課題を捉えている。すなわち、本事業では、テーマとして設定する「食」について、「食と社会文化」「食と環境」「食と経済」「食と栄養」の4領域からなるものとしている。生徒たちがこれらの4領域を探究的かつ問題解決的に取り組むことで、世界の食問題について必要な知識をバランスよく習得でき、諸活動における探究の過程においてイノベティブなグローバル人材として必要な基礎力が養われると考えている。

b. イノベティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を、国内外の大学、企業、国際機関等との協働により行ったことについて。

▶ 「GI スキルアップセミナー」におけるアントレプレナーシップの醸成

早期の段階で社会の課題発見や解決策について触れることを目的とし、昨年度から「GI スキルアップセミナー」は、1年次に実施している。事業協働機関であるSG インキュベート株式会社のご協力のもと、講師を派遣頂き下記のセミナーを開催した。

実施日	講師	テーマ
令和5年12月7日(木)	株式会社 F Ventures 代表取締役 両角 将太 氏	「起業、ベンチャーキャピタルについて」 「身近な課題について」
令和6年1月25日(木)	株式会社 F Ventures 代表取締役 両角 将太 氏	「中村版 Toryumon」 (模擬ピッチコンテスト)

▶ 2年次「GI 探究」における産学連携(企業コラボ)

商品の考案から販売までの一連のプロセスを実践的に学ぶ中で、創造力や課題解決力、協働力を養うことを目的とする。産学連携の一環で地元企業と協働して商品開発を行った。今年度は新商品の考案・企業との打ち合わせを行い、オリジナル商品の作成、文化祭での販売を行った。

c. 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況について、記載すること。また、その実施にあたって外国人講師等を活用した実績について。

事業拠点校のGIクラスでは、英語の中で「英語探究」の科目を設け、英語を用いて文理融合的な内容について探究活動を実践している。1年次は課外授業扱いで1単位相当、2・3年次は正規の授業として各2単位を設定している。この「英語探究」では、「GI 探究」で習得した探究活動のノウハウを活用し、探究活動を英語で学習するものであり、英語によるレポートの作成法・ディ

ベート・発表方法等を扱う。また、オンラインで海外との交流活動も実施しており、今年度は2年GIクラスが海外の研究者との交流を行った。GIクラスでは外国人講師が副担任を務めているため、これらの授業に関わらず日常から英語を用いた指導を行っている。

d. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したことについて。

▶GI 留学プログラムの実施

事業拠点校では、グローバルでイノベティブな人材の素養となる英語運用能力及び異文化・多様性の受容力を高めることを目的として、1年生GIクラス希望者を対象に約2か月間のターム留学を3学期に実施している。本プログラムは令和2年度入学生より開始したが、初年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となり、令和3年度入学生が初めての実施となった。今回は3回目の実施となるが、年々留学希望者が増加しており、令和3年度は41名中13名(30%)であったが、今年度は37名中25名(68%)が2月よりカナダに渡航中である。

▶GI フィールドワーク Advance の実施

事業拠点校のGI2年生のクラスでは、「GI フィールドワーク advance」(全員参加)を9~10月に実施している。日頃の探究活動や英語学習で培ったスキルを海外の研修地で活用し、生徒自身が設定した課題の調査や解決法をさぐることを主な目的とする。令和5年度は、マレーシア・シンガポールでの海外研修を実施した。WWL 事業協働機関のマレーシア工科大学で、SDGsをテーマに学生と交流を図ったり、市内研修では各自設定した課題に対する調査等を行った。

e. 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて。

文系・理系の区分にとらわれず、生徒の興味・関心に応じた科目を選択できるシステムを構築し、選択できる開講講座を令和3年度構想していたが、時間割作成に関する教務部との調整がつかず決定は見送られていた。令和4年度より高校1年生に「グローバル探究」の科目を設定し、「食」をテーマとして調査、分析、発表、探究学習の基礎的な手法を学ぶ授業を展開した。令和5年度は担任がクラスの全生徒の探究活動の指導を行う形態をとったが、令和6年度は生徒のテーマをジャンルごとに大別し、1つのジャンルに1人の担当者を配置する「ゼミ形式」での探究授業とその指導の実現を目指したい。「ゼミ形式」にすることで、文系・理系問わず生徒の知的好奇心に即した学習活動を行う体制づくりを整備している。

f. 学習活動が、構想目的の達成に資するよう工夫したことについて。

より多くのイノベティブなグローバル人材を輩出するために、事業拠点校内だけの閉鎖的な枠組みにとらわれることなく、外部に「開かれた」教育手法を用いて、生徒たちに本物に触れさせ刺激を与え、体験的に視野の広がりや発想力を促すことが必要と考えている。令和3年度よりGIクラスの論文作成の指導に関して、事業拠点校内の教師による指導だけではなく、運営指導委員の一部や外部の有識者(以下、学外指導者と称する)も定期的に指導にあたることで、生徒の活動意欲を高めるとともに論文の質的向上を図ることをねらいとした取り組みを行っている。3年GIクラスは4月に論文の作成の基礎を学び、6月に中間指導を受け、7月に「GIプレゼンテーション」と称する論文発表会を行った。本校教員とは違った専門的な切り口での指導は、論文の質的向上と生徒の探究活動への姿勢の改善に大きく影響があった。今後はGIクラスのみが行っている行事について、他クラスや連携校にも展開していけるよう「開かれた」教育手法の確立をめざしていきたい。

g. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組を実施(または計画)したことにつ

いて。

管理機関である学校法人中村学園では、事業協働機関である中村学園大学・中村学園短期大学の学生以外で講座を履修する者を「科目等履修生」と称し、特定の授業科目を履修することで単位を取得した生徒が中村学園大学または同短期大学部に進学した場合は、習得単位として認定される仕組みとなっている。事業拠点校及び事業連携校の高校2年生の希望者を対象として行っており、令和5年度は授業の受講およびレポート、課題の提出等を対面とオンライン、オンデマンドの3形式により実施した。

h. より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境を整備したことについて。

▶ 海外連携校との数学コンテスト

連携校であるウズベキスタンのライシーアム高校とモンゴルの84thとともに数学のコンテストをオンラインで開催した。生徒が各校10名の計30名、教員は数学の教員を含め各校5名程度参加した。内容は日本の教育課程で数学IA・IIBレベルの問題を7題その場で出題し、1題約10分で解答する。5名で1チームを結成し、数学の問題を協力しながら取り組んだ。初めての試みであったが、協働性を培う良い機会となった。今後は連携校の生徒同士がより活発に交流できる活動にしていきたい。

▶ 英語 CEFR B1 B2 突破講座

CEFR B1以上の4skillsの実力養成を目指すことを目的に、令和5年9月29日～令和6年2月26日の期間で計14回、90分の講座を開講した。講師は事業拠点校の教員が務め、「Cambridge B2 First」、「Cambridge B1 Preliminary」、「実用英語検定準1級講座」の3種類の講座を用意して実施し、3つの講座で計67名の生徒が参加した。

i. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、日本人高校生と留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制を整備したことについて。

事業拠点校では、2018年度から5か年計画で開始した文科省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」に於いて、2022年度までの5年間でのべ15カ国40名の留学生を受け入れた。本事業の後継事業として、今年度より「アジア高校生架け橋プロジェクト+（プラス）」が開始し、11月～3月にかけて1期生として4カ国4名（韓国、スリランカ、ネパール、モンゴル）を受け入れている。留学生はクラスに所属し本校生徒と同様の授業・行事等に参加し、探究授業ではグループワーク・ディスカッション等で協働学習を行い異文化理解・交流を図った。また、教育開発部の国際担当者や海外交流アドバイザーが連携し、有資格者による日本語レッスン（週1回実施）や特別プログラム（華道・茶道・書道・浴衣制作）等を組織的に行い留学生の異文化理解の深化に努めた。生活面では、平時は事業拠点校の寮で過ごし、冬休み期間中は校内でホストファミリーを募りホームステイを経験し、集団生活や日本の生活・慣習を体験する機会を提供した。

j. その他特筆すべき点について。

▶ 夏期海外研修業者説明会の開催

事業拠点校では、海外研修を通してグローバルな視野を広げる機会をGIクラスだけではなく、一般クラスへも展開していくことを目的とし、令和2年度より夏季海外研修合同説明会を開催している。今年度は4月末に開催し、旅行会社2社が研修プランのプレゼンテーションを行った。研修プランは、予め事業拠点校の教育開発部や海外交流アドバイザーが打ち合わせを重ねて企画を行い、主に課題解決型の探究学習要素を中心としたプランと、英語運用能力向上のための研修プランを用意した。実施においては、最終催行人数に満たずにやむを得ず実施中止となったプログラムもあり、最終的には3名がハワイでの探究型研修に参加した。

次年度以降も継続予定であるが、生徒案内や企画内容、運営方法についての見直しを行い、多数の生徒が研修に参加できるよう整備をしていきたい。

▶ Blue Earth 塾の開催

NPO 法人 Blue Earth Project が主催する環境イベントに、事業拠点校の GI クラスが参加した。このイベントを通して生徒たちの身近な環境問題解決への意識の向上を図るとともに、課題解決力、表現力、創造力、コミュニケーション力、多様性受容力等の様々な力が養われた。

10～12 月にかけて「水と衣類」をテーマにした活動を行った。校内で古着や端布を回収し、パッチワークを作成した。12 月には事業拠点校にて女子大生と 1・2 年 GI クラスの生徒がエコ活動、起業といったテーマでディスカッションを行った。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況について、を記載すること。記載の際には、資質・能力（コンピテンシー）、心構え・考え方・価値観等（マインドセット）、探究スキル等について、スーパーグローバルハイスクールの成果検証において設定している高校生段階のグローバル人材の資質・能力等について。

事業拠点校では毎年 2 回の事業効果検証アンケート（各回 32 問）を全生徒に実施している。令和 2 年度後期の調査から本事業で育成するイノベーターに必要とされる力に関する設問（前後期で計 20 問）を新たに作成し、調査を実施している。各設問について力が身につけていると肯定的な回答をしている生徒の割合（%）を下の表に示す。

単位 (%)		イノベーターに必要とされる力に関する設問				
学年・クラス	調査時期	①突破力・忍耐力・レジリエンス	②調和力	③マインドセット	④高次の課題解決力	①～④平均
1 年 GI	前期	78.5	84.5	65.6	79.4	77.0
	後期	67.2	89.1	78.1	86.0	80.1
1 年他クラス	前期	84.9	92.2	70.7	88.4	84.0
	後期	65.8	88.6	79.4	74.3	77.0
2 年 GI	前期	85.8	91.7	70.0	85.0	83.1
	後期	75.0	98.4	73.2	83.4	82.5
2 年他クラス	前期	83.5	89.3	75.2	87.9	84.0
	後期	70.5	87.8	79.0	80.0	79.3
3 年 GI	前期	84.4	86.0	84.4	90.7	86.3
	後期	87.5	98.5	92.2	90.6	92.2
3 年他クラス	前期	86.9	91.7	82.9	90.2	87.9
	後期	76.4	90.7	84.5	80.0	82.9

※調査時期：前期 4 月、後期 1 月

事業拠点校では、グローバルリーダーとして必要な力に加え、イノベーターに必要とされる力を次のように定義している。

- ▶ 「突破力」…大きな壁（課題）にぶつかっても、諦めることなく論理的な思考で乗り越える力。
- ▶ 「忍耐力・レジリエンス」…得られた知識を活用しながら様々な手法を試行し、失敗の経験を生かして次の改善につなげ、答えのない問題にも諦めずに取り組む意欲や態度。
- ▶ 「調和力」…国内外の人とのつながり・協働にとどまらず、新しい知識と既存の知識・自己の経験と他者の経験等を結びつけて協働する力。
- ▶ 「マインドセット」…自分の可能性を信じ粘り強く努力することで、自己の能力が発達し、持続可能な社会が実現するという考え方。
- ▶ 「高次の課題解決力」…答えのない課題や予測不能な事態に対して、いち早く的確に状況を察知・観察し、核心

をつく問いかけを何度も行い、それに合う最適な方法でプロジェクトを企画・実行し、状況に応じた最適解を導くために必要な力。

興味深いことに、高1～3のすべての学年のGIクラスで、前期ではイノベーターに必要とされる力に関する設問の平均値がGI以外のクラスよりも低い。GIクラスに特別な資質の生徒が集まっているとは考えられず、母集団の人数の違いが多少影響をしているかもしれない。高1と高2の差が6.1ポイント、高2と高3の差が3.2ポイントと学年が上がるにつれて値が大きくなっている点が、3年間の教育活動が着実にイノベーターに必要な力の養成に繋がっていることだとわかる結果ではないだろうか。

次に後期の結果を見てみると、高1～3のすべての学年のGIクラスでイノベーターに必要とされる力に関する設問の平均値がGI以外のクラスを上回っている。前期後期を比較すると、高1GIクラスは3.1ポイント上昇、高2GIクラスは0.6ポイント下降してしまっているが、高3GIクラスは5.9ポイント上昇している。GIクラス以外のクラスは全学年とも大きく下降しているため、後期ではすべてGIクラスの値が勝る結果となったようだ。

項目別にみると、高1GIクラスは「④高次の課題解決力」、高2GIクラスは「②調和力」、高3GIクラスは「②調和力」・「④高次の課題解決力」に注目したい。高1GIはアントレプレナーシップ講座を通じて、身の回りの課題を調査し、ビジネスアイデアに結び付け、発表したことで他クラスに比べて課題解決力に自信を持ったと考えられる。高2GIクラスは、海外フィールドワークや、食のサミット、連携校をはじめとする外部のイベントに積極的に参加した。どの活動もグループ単位で取り組んだことが、他のクラスの生徒に比べ調和力、協働する力を自認することにつながったと考えられる。高3GIクラスは半年間の論文作成が大きな影響を与えていると考えられる。論文作成は高校生にとって初めての経験であり、根気が必要な作業が続く活動だ。アイデアを出したり、批評をしたり、支え合いながら臨んだことが調和力の数値を上げたのではないだろうか。また課題解決力に関しては、GIクラスの前期と後期を比べると数値こそ下がっているが、GI以外のクラスと比較すると値が大きい。論文作成を通じて育んだ、課題設定をする力、問いを立てる力、論理的に考える力・表現する力等の総合力が起因していると考えられる。

このように効果検証アンケートのイノベーターに必要とされる力に関する設問から、各学年の行事や活動がイノベーター育成につながっていること、さらに学年が上がるにつれてその効果が実を結んでいっていることが分かるのではないだろうか。

・ [英語力測定の結果から]

高い英語力もイノベティブなグローバル人材には必要な能力の一つと考えている。下の表は、令和5年度の英語能力検定試験の受検によるCEFRの各レベル達成者数と達成率を示したものである。これによると、WWL対象生徒であるGIクラス生徒は、3年生までを含むWWL非対象生徒に比べて、B1・B2レベル達成者数の割合が高くなっている。この要因として、3年GIクラスは自身の進路実現のため、2年はGI留学プログラムや海外フィールドワーク等海外渡航による動機づけが考えられる。また1年GIクラスに関しては、過去3年間のGIクラスの活動が拠点校周辺地域に認知されるようになり、英語学習に前向きな生徒が募集段階で集まっていることが考えられる。今後、GIクラスについてはB2・B1等高いレベルのCEFRレベルの達成率の向上を、他のクラスに関してはA2・B1レベル達成者数の底上げが課題である。

	対象人数	CEFR A2	CEFR B1	CEFR B2
WWL 対象生徒 (1～3年GIクラス)	106	12 (11.3%)	22 (20.8%)	5 (4.7%)
WWL 非対象生徒 (1～3年他クラス)	871	113 (13.0%)	87 (10.0%)	7 (0.8%)

b. ALネットワークが果たした役割等について。

区分	主な役割
管理機関	<ul style="list-style-type: none"> ▶事業全体の進捗状況管理・事業拠点校への指導 ▶AL ネットワーク内の連絡・調整及び事業に関わる各種委員会の開催 ▶必要経費の管理・執行
事業拠点校	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 探究」の実践及び本年度より開始した「グローバル探究」の教科内容の開発・指導計画の策定 ▶各種行事の企画・運営 ▶事業連携校の行事への相互参加および情報交換
事業連携校	<ul style="list-style-type: none"> ▶事業拠点校の探究活動・成果報告会・国際会議への相互参加 ▶研究開発に関する情報交換 ▶海外研修時の協力 ▶AL ネットワーク連絡会での事業拠点校の事業の進捗に関する助言
事業協働機関	<ul style="list-style-type: none"> ▶〔全ての機関〕 ・AL ネットワーク連絡会への参加 ▶〔中村学園大学・中村学園大学短期大学部〕 ・事業拠点校及び中村学園三陽高校の2年生を対象とした科目等履修生制度（アドバンスト・プレイスメント）の実施 ・進学説明会の実施 ▶〔立命館アジア太平洋大学〕 ・「GI フィールドワーク Basic」における国際学生（研修スタッフ）派遣 ・進学説明会の実施 ▶〔SG インキュベート株式会社〕 ・「スキルアップセミナー」への講師派遣 ▶〔九州大学共創学部等〕 ・九州大学主催「世界に羽ばたく高校生の成果発表会」参加 ・GI3年生の論文作成における指導 ▶〔ハワイ大学 KCC 等〕 ・進学説明会の開催学校説明会等を開催 ▶〔マレーシア工科大学〕 ・「GI フィールドワーク Advanced」における大学訪問・現地学生との交流 ▶〔国連 WFP 協会〕 ・国際会議「食のサミット」への協力・講評
カリキュラムアドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ▶カリキュラム検討委員会への参加および事業拠点校の主要行事の企画と実施、「GI 探究」の実践、「グローバル探究」の教科内容や指導計画等、カリキュラム全般に関する指導・助言
海外交流アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 留学プログラム」の実施に向けた参加希望者への支援 ▶留学支援金の授与対象者の決定等における管理機関との連絡・調整 ▶夏期海外研修プログラムにおける旅行業者との連携・調整 ▶留学生の受入における外部機関との連携・調整
その他（事業協働機関以外の大学、企業等）	<ul style="list-style-type: none"> ・『元祖ムツゴロウのむっちゃん万十』（有限会社 T. M. K.） ・JA 糸島

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況等について。

次の表に本事業の構想計画書に記載した8項目（①～⑧）について短期・中期・長期の目標をあげ、それぞれの項目の下段に進捗状況を記した。

短期目標 (1～3年以内)	中期目標 (3～5年以内)	長期目標 (5～7年以内)
① 教科横断型教科及び文理融合カリキュラムの設定		
学校設定教科「グローバル探究」の施行・改善、文理融合カリキュラムの実施	学校設定教科「グローバル探究」の英語運用による活動の定常化	共通の学習内容・指導法のもとで「グローバル探究」の全クラス・全学年での実施
〔進捗状況〕 計画していた「グローバル探究」を令和4年度より施行した。教科内容・指導計画に関して、育成したい生徒像・能力を念頭に置いた3年間のプログラムの完成を目指していききたい。「グローバル探究」を生徒の興味・関心に応じたゼミ形式で展開していくことで、文理の区分に縛られない自由な探究活動を実現していく。		
② 留学・海外フィールドワークのカリキュラム化 (オンラインでの実施を含む)		
研修先の開拓・開発 (3カ国、3ヶ所以上)、留学プログラム (期間選択制) の施行・改善	研修先の開拓・開発 (5カ国、5ヶ所以上)、校内他クラスの留学プログラム実施	研修先の開拓・開発 (5カ国、10ヶ所以上)、長期留学プログラム (1年間) の実施
〔進捗状況〕 留学プログラムおよび「GI フィールドワーク advance (海外研修)」については、当初の予定通り執行した。留学プログラムは今年度3回目の実施となった。海外研修はマレーシア・シンガポールへの海外渡航が実現でき、事業協働機関との交流を行った。 研修先の開拓としては、ニュージーランド、タイとのMOU連携・調整行い、新しい留学プランや協働学習の計画をすすめている		
③ 留学生との探究活動 (オンラインでの実施を含む)		
留学生と協働した活動プログラムの完成及び施行・改善	留学生の母国との交流を含めた探究活動の実施	交換留学を通じた双方向の探究プログラムの構築
〔進捗状況〕 今年度「アジア高校生架け橋プロジェクト+」がはじまり、約4か月間の学校生活を拠点校で過ごした。GIクラスに配属し本校生徒と同様の授業を受け、学校行事等にも参加した。探究活動においてはプレゼンテーションやディスカッション等で協働学習を行った。 またタイから、2週間の短期留学の生徒の受け入れも行った。		
④ 国際会議の開催 (オンラインでの実施を含む)		
拠点校で開催する連携校の参加する定例国際会議「食のサミット」の実施	連携校での「食のサミット」または食に関連する国際会議の開催・連携校の参加	海外連携校での「食のサミット」または食に関連する国際会議の開催・連携校の参加
〔進捗状況〕 昨年度に続き「食のサミット」をハイブリッド実施し、海外連携校はオンライン参加、国内連携校は対面・オンラインにて代表チームが参加した。今年度も事業協働機関の国連WFPに参加頂き講評等を依頼した。また、サミットと並行し、一般生徒も同様のテーマに沿ったディスカッションを行い、学校全体として行事を運営することができた。		
⑤ AL ネットワーク連携の質的向上と拡大		
福岡県内のベンチャー企業と連携	国内外で活躍するベンチャー企業と連携	AL ネットワーク内で計30団体以上と連携
〔進捗状況〕 「GI スキルアップセミナー」の開催により、県内のベンチャーキャピタル企業で事業協働機関である「SG インキュベート株式会社」と直接連携し、アントレプレナーシップの養成に必要な講義等を実施できた。次年度もこのセミナーを継続しつつ、県内のベンチャー企業とも連携し、AL ネットワークへの新規参加の要請を検討する。		
⑥ 高大連携及び大学課程の早期履修 (AP プログラム)、大学講座の配信		
併設大学・短期大学部への入試における多面的評価システムの完成、現地参加型 AP プログラムの完成及び施行・改善	AP プログラムの受講可能講座数を事業開始時の3倍以上に増加、ICT を用いたライブ講義や講義動画の提供を開始	連携校への AP プログラム導入に向けた試行・改善

<p>〔進捗状況〕 AP プログラムに関しては、昨年度に続きオンラインでの実施（試験のみ会場にて実施）になったが、実施 6 年目になりプログラム自体は概ね完成したものが整備できている。中期目標にある講座数の増加は、事業協働機関である中村学園大学にて引き続き検討を進めている。</p>		
<p>⑦ 国内外トップ大学への進学・起業家の輩出 ※開発するカリキュラムによる卒業生の輩出後からの期間として</p>		
国内 10 名・海外 5 名以上進学 起業家 1 名以上	国内 15 名・海外 7 名以上進学 起業家 3 名以上	国内 20 名・海外 10 名以上進学、 起業家 5 名以上
<p>〔進捗状況〕 令和 5 年度は GI クラス 2 期生が卒業した。開発カリキュラムで学んだ様々な知識、経験から得られた課題観を専門分野に結び付けた探究活動や大学との連携等を行うことによって、多様な進路決定につなげることができた。 高校卒業後すぐに起業家を輩出することは難しいため、今後は高大接続・連携を進めながら、目標の実現を目指したい。</p>		
<p>⑧ 教員向けの教育研修・セミナーの実施（オンラインでの実施を含む）</p>		
国内外の連携校との合同研修会や情報交換会の実施	地域（県内または九州内）を包括したグローバル・イノベーター教育セミナーの開催	AL ネットワーク全体を包括した国際的な教育セミナーの開催
<p>〔進捗状況〕 連携校との情報交換はオンラインで行うことができたが、今年度は合同研修会を実施することはできなかった。各連携校にとって有意義な研修会にするためには事前に内容の協議と、それを踏まえた準備が必要である。また、連携校が有しているネットワークを、お互いに利用できるような仕組みづくりが整備できればより広域のネットワークの構築が実現できるので検討していきたい。</p>		

9 次年度以降の課題及び改善点

a. 本事業に関する管理機関の課題や改善点について。

コロナ禍を経て、各種行事及び各種委員との連携等をオンライン併用で実施する環境整備は概ね整ったが、教職員の ICT スキルの向上については課題が残る。今後研修等を取り入れながら、スキルアップを図りたい。

また、グローバル教育においては、現在 GI クラスのみで短期留学プログラムや海外研修を実施しているが、他クラスにも類似のプログラムを展開し学校全体として取り組んでいく必要がある。新規開拓した海外校との連携も視野に入れ、新たなプログラムを開発していきたい。

b. AL ネットワークの課題や改善点について。

令和 5 年度は、連携校相互の行事参加をはじめ昨年度同等の交流活動に取り組むことができた。令和 6 年度以降本事業は自走していくが、連携校がそれぞれ自校の行事の関係で、お互いの行事にうまく参加ができないという問題がある。これまで以上に AL ネットワークの連絡を密にとっていく必要がある。

コロナ禍でオンライン授業や ICT の活用が急速に普及した。対面での行事や学習活動の意義はもちろん大きいのだが、デジタル機器の有効な活用方法を見出し続け、協働学習や生徒間の交流の新しい在り方を開発していくことも重要である。

c. 研究開発にかかる課題や改善点について。

令和 3 年度までは新型コロナウイルス感染症拡大のため、多くの学校行事が中止や実施方法の変更を余儀なくされた。令和 4 年度は感染症の拡大やその対応が少しずつ緩やかとなり、令和 5 年度はおおむねコロナ禍以前の生活様式が戻ってきた。国際交流や海外渡航（本校では高校 1 年生対象の「フィールドワーク basic（グローバルキャンパス）」や、高校 2 年生対象の「フィールドワーク advance（海外研修）」）は直接自分の目で見たり、触れてみる体験こそが重要であり、学習効果も大きい。一方で、コロナ禍によって普及したオンラインでの教育・交流については、直接体験

よりはインパクトは小さくなるが、物理的な距離や移動の経費などを縮小することができ、新しい教育の可能性を生み出した。共通の教材を使用すれば同じ授業を離れたことで実施することができる。今後は、とくに海外の連携校と協働学習・授業の実践に努めていきたい。

令和5年度は2学年「グローバル探究」に取り組んでいる。来年度は全学年で取り組むことになる。昨年までの細かな時期に分けたテーマ設定から、自由度の高いテーマ設定で、長い期間をかけた探究に形態を変更した。熱心に取り組む生徒の数は増えたが、一方で「何をしたらよいかわからない」様子の生徒も見られるようになった。自主的、自発的な活動を苦手とする生徒に教員がどう寄り添っていくかを、学校として組織的に対応していかなくてはならない。

また今年度は、アントレプレナーシップ講座でビジネスプランの模擬ピッチコンテストを行った。これまでは起業家の講演者主導の講演形式だったものを、生徒が「主体的に取り組み」「能動的に発信する」活動に変更した。生徒の満足度も高く、学習効果として成功したといえる。今後、主体性や能動性に重点を置く行事や学習活動の整備をしていき、新しい教育の在り方を学校全体として模索していきたい。

d. 今年度が事業最終年度の管理機関は、自走に向けた方向性について。

拠点校の構想では「地球規模の課題「食」に関わる探究活動による課題解決を通じて Society 5.0 をたくましく創造的に生きる人材を育成する。ここで扱う『食』の課題は、食に関わる4領域（社会文化・環境・経済・栄養）及びSDGsのターゲットである。と目標を設定していた。今後もこの方向性を踏襲しながら、生徒の学びへの関心や個性をより尊重する探究活動を発展させていきたい。来年度以降は「探究成果報告会」を開催し、身のまわりの課題から世界の課題、個人的な興味から学術的なテーマまで、学校全体で取り組む機会を設ける。

また、「ALコンソーシアムを組織し、拡大と発展を図りながら、広く生徒たちに高度な学びの機会を提供し、より多くのイノベティブなグローバル人材を育成する。」ことも目標にしている。アントレプレナーシップ講座を3年間実施してきたが、企業（とくにベンチャー企業）の持つ事業に対する使命感や社会の課題に対する向き合い方は、イノベーター育成に大きな影響を与えることがわかった。今後は民間企業や研究機関、NGOなどの団体へインタビューやフィールドワークを行うといったところから活動をひろげ、より「開かれた」教育活動の実現を進めていきたい。

既存のALネットワークについては更なる拡大（関係の構築）を目指していきたい。留学先の追加や、留学生の受け入れの促進、オンラインを活用した交流・協働学習の創出などに積極的に努めていきたい。グローバルな人間にとって、国や民族、文化、歴史、社会慣習等の違いを理解し、受容できる力は肝要である。コロナ禍によって国際交流は一時停滞したが、オンラインでの交流という新しい可能性が生まれた。対面のメリット、オンラインでのメリットの両面をうまく使わねながら、育成を目指すグローバル・イノベーターに必要なプログラムをこれからも計画していく。

【担当者】

担当課	法人本部 経営企画室	TEL	092-831-0981
氏名	松本 公典	FAX	092-831-0985
職名	室長	E-mail	ww1-njh@nakamura-u.ac.jp

Ⅱ 令和5年度事業実施計画書

Ⅱ-1 事業実施計画書

令和5年2月10日

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1
管理機関名 学校法人中村学園
代表者名 理事長 中村 紘右

- 1 事業の実施期間
契約締結日～ 令和6年3月31日
- 2 事業拠点校名
学校名 中村学園女子高等学校
学校長名 石丸 篤志
- 3 構想名 「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

4 構想の概要

これまでのSGH事業の成果をさらに発展・充実させながら、地球規模の課題「食」に関する探究活動による課題解決を通じてSociety 5.0をたくましく創造的に生きる人材を育成する。ここで扱う「食」の課題は、食に関わる4領域（社会文化・環境・経済・栄養）及びSDGsのターゲットである。この教育的基盤となるALコンソーシアムを組織し、拡大と発展を図りながら、広く生徒たちに高度な学びの機会を提供し、より多くのイノベティブなグローバル人材を育成する。育成過程において、文理融合型のカリキュラムやイノベーションスキルの育成法・評価法、生徒の多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓、留学生との協働を最適化する実践プログラム、大学教育の先取り履修による高度な学びの提供方法等の開発へ特に注力することで、「食」を切り口として新しい価値を創造し、グローバル・イノベーターを育成するための教育プログラムのスタンダードモデルを創りあげる。

5 令和5年度の構想計画 本事業における教育課程の特例の活用 無

(1) ALネットワークの形成

a. 運営組織の拡充【管理機関・拠点校】

管理機関と拠点校とが一体となり、様々な連絡手段をフルに活用して組織内の意思疎通を密にしながら、広範囲に渡る事業項目の施行を円滑に進めていくことで引き続きALネットワークの着実な拡充を目指す。

b. 情報共有体制の整備【管理機関・拠点校】

ALネットワーク連絡会に限らず、連携校や事業協働機関と定期的に会議や情報交換を引き続き行う。可能な限り共有事項の発信をホームページやメール等で相互に行う。

c. 国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進【拠点校】

① 教員チームによる生徒のコーチング

課題研究や論文作成、進路指導等にあたる教員チームを作成し、担当する生徒に対して適切なコーチングを行う。論文作成、研究方法については、学園内のネットワークを活用し、事業協働機関である中村学園大学の協力を得る。

②事業協働機関である大学の学校説明会や入試対策講座の開催

事業協働機関である中村学園大学・短期大学部、立命館アジア太平洋大学、ハワイ大学 KCC、マーセッド大学等の学校説明会を開催し、参加を推奨する。また、入試対策講座等も開講する。

③留学プログラム、海外研修、国際シンポジウム等への参加の奨励

GI 留学プログラムに於いては、渡航地域や留学期間等を見直し、プログラム内容の改善を行う。また、管理機関による「留学支援制度」を設け、留学機会の拡大を行う。全校生徒を対象に、海外研修や国際的なイベントへの参加を促す。

d. カリキュラム開発のための人材の雇用と配置【管理機関・拠点校】

カリキュラムアドバイザーとして、高大接続を担当している外部大学教員および民間企業で探究活動での支援実績のある2名を配置し、カリキュラムの進捗状況共有および各行事における内容の点検や、カリキュラム全体の改善における助言を頂く。年4回程度開催予定。

e. テーマと関連した高校生国際会議等の開催と参加

①「食のサミット」の開催【拠点校・連携校】

食に関わる地球規模の課題について、世界各国の中高生がその解決策をチームで考え発表するサミットを毎年開催している。令和5年度は対面開催を予定し、企画および国内外の連携校への連絡・調整を進める。また、ポスターセッション等を取り入れ、拠点校の全生徒が行事に主体的に関われるよう工夫をする。

② 国際会議等への参加【連携校】

連携校である京都先端科学大学附属中学校・高等学校が開催する「グローバルシミュレーションゲーミング」をはじめ、各校・機関が主催する国際会議等へ積極的に参加する。

f. フォーラムや成果報告会の開催と参加

①「WWL 報告会」の開催【拠点校・連携校】

拠点校の生徒が食に関する課題とその解決策について、探究的な取り組み成果のステージ発表を行う。国内外の連携校から代表生徒の参加を予定する。

②探究成果報告会等への参加【連携校・拠点校】

1年間の探究活動の成果発表の場として、連携校が実施する成果発表会や、高校生フォーラム等に参加する。

g. 情報収集・提供等、その他の取組【拠点校】

①広報誌の発行・配布

本事業の取り組み内容と成果を広く発信するために、定期的に広報誌を発行し、連携校や事業協働機関関係者をはじめ、生徒や保護者、近隣の学校等に配布する。

②学校ホームページの充実

拠点校のホームページにグローバル教育等の項目を設け、本事業の取り組み内容と成果をタイムリーに発信する。記事は日英両言語で記載する。

③SNS の利用と動画の紹介

拠点校の本事業に関連する活動について、生徒が主体となり記事や写真をInstagram を用いて定期的に広報する。また、生徒の活動動画を拠点校のホームページやYouTube を活用し紹介する。

(2) 研究開発・実践

a. テーマとして設定するグローバルな社会課題【拠点校】

本事業のテーマは『「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成』である。管理機関が創立以来、継続して研究してきた「食」について、SDGs と結びつけた探究活動に取り組む過程において、生徒たちにイノベティブなグローバル人材として必要な基礎力が養成されると考えている。

b. 関係機関との協働による先進的なカリキュラム開発【拠点校・事業協働機関】

① 「GI 探究」の開発と実践（3年GIクラス）

事業協働機関である中村学園大学・短期大学部をはじめとする大学、各企業等の食に関する高度で専門的な知見を取り入れ、授業方法や教材の開発を引き続き行い、カリキュラムの完成させる。

② 「グローバル探究」への移行と開発・実践（1年・2年全クラス）

令和4年度入学生より学年進行で実施する新しい学校設定教科「グローバル探究」の教科内容や評価法等の開発をはじめた。引き続き実践するとともに、指導する各担任の円滑で効果的な実施を促進するための体制を整備する。

③ 「GI フィールドワーク Basic」の開発と実践（1年全クラス）

事業協働機関である立命館アジア太平洋大学の国際学生との異文化交流を通して、英語運用力・多様性受容力を高める。実施形態は対面実施を予定する。

④ 「GI フィールドワーク Advance」の開発と実践（2年GIクラス）

シンガポール・マレーシアでの研修を予定し、スルタンイブラヒム女子高校(連携校)や、マレーシア工科大学(事業協働機関)の学生との交流・協働学習を行う。

⑤ 「GI 留学プログラム」の開発と実施（1年GIクラス）

GI1年生を対象とした海外ターム留学(希望制)に於いて、渡航地域の拡充や留学期間の見直しをはかる。

⑥ 「GI スキルアップセミナー」の開発と実施（1年GIクラス）

事業協働機関であるSGインキュベート株式会社と連携し、アントレプレナーシップに関するセミナーの企画・運営を行う。イノベーションマインドの醸成を図ることを目的とし、昨年度より対象学年を2年生から1年生へと引き下げ早期の履修を開始した。引き続き1年生で実施する。

⑦ 「GI プレゼンテーション（論文発表会）」の開発と実施（3年GIクラス）

事業協働機関である中村学園大学・短期大学部と連携し、論文作成のメソッドの指導を行うなど、高度な教育実践と高大接続の強化を進める。

c. 新たな教科・科目の設定【拠点校】

① 探究授業の実践と外国人講師・ICTの活用

「GI 探究」や「グローバル探究」は、課題探究活動を通してグローバル・イノベーターを育成するための主軸となる探究教科であり、GIクラスでは外国人講師と複数名の担当教員でチームを組み指導にあたる。ICTを活用した調査活動・発表・国内外との交流等を含む。令和5年度は次の内容で進める。

[1年次] 昨年度より開始した「グローバル探究」について、食の4領域を起点に、生徒の関心に応じた自由な探究学習の実現に向けた運用を行う。

[2年次] 「グローバル探究」について、GIクラスはイノベーターの育成を目的とし、地球規模の課題である「食」に関する課題発見・解決のための調査、解決策の提案・発表等をより発展した活動として進める。GI フィールドワーク Advanceの事前準備や成果発表も学習活動に取り入れる。GIクラス以外については、興味のある学問分野ごとにゼミ形式で探究をすすめ、進路実現に接続する。

[3年次] 「GI 探究」については、2年次での調査研究活動の集大成となる論文作成と発表、外部への発信を行う。GI スキルアップセミナーで習得したイノベーションスキルを生かした独創的・創造的な課題解決法を含む論文となるよう指導する。

d. カリキュラムに位置づけられた短期・長期の留学や海外研修【管理機関・拠点校】

① 「GI 留学プログラム」（1年GIクラス）

3学期に希望者を対象として海外へのターム留学プログラムを実施する。プログラム概要の説明会、参加者対象のオリエンテーション等を計画的に行う。また、参加者の費用を管理機関が支援する候補者の選考を秋に実施する予定である。

②「GI フィールドワーク Advance」(2年GIクラス)

GIクラス全員が参加する海外研修であり、これまでの探究活動で身につけた課題解決力、英語運用能力を活かした研修を行う。

e. バランスよく学ぶカリキュラムの編成【拠点校】

1・2年生全員が「グローバル探究」、3年GIクラスが「GI探究」を履修する。文系・理系の区分に関わらず生徒の興味・関心や進路希望によって選択できる科目の履修等を可能にする文理融合的なカリキュラムの研究開発を引き続き行う。

f. 工夫された学習活動の実施【拠点校】

①ICTの活用(全学年全クラス、主としてGIクラス)

学習の個別化・最適化を図るために、英会話のマンツーマンレッスン等を実施する。コロナ感染症の鎮静化に伴い、オンラインを用いた国内外の連携校や事業協働機関との授業や会議を適宜に行う。

②学校設定科目「英語探究」の活動(GIクラス)

海外のプレゼンテーションスキルを学び、学習した英会話力や表現力を活かし、食の問題やSDGsをはじめとする社会課題・国際的な問題などについて英語で意見を発信できる機会をふやしていく。

③指導指標に基づく教員の指導力向上(全教員)

生徒が21世紀型スキルを習得するために教師が授業に臨む姿勢を示した指標に基づき、目標を達成するための授業改善を繰り返し行い指導力の向上を目指す。

g. 大学教育の先取り履修【拠点校・連携校・事業協働機関】

事業協働機関である中村学園大学・短期大学部において、拠点校及び連携校で希望がある場合、協定を中村学園大学・短期大学部と結ぶことにより、教養科目及び専門科目計18科目を早期に履修し試験に合格したものに対しては所定の単位を与えるものとする。

h. より高度な内容を学習できる環境整備【拠点校】

①「GI講座」の開催(全学年全クラス)

事業協働機関等から講師を招聘し、食やイノベーション等の高度な専門的内容に関する講演・講座を年数回開催する。

②各教科による取り組み(全学年全クラス)

毎年実施している定期的な英検準1級対策講座、CEFR B1・B2 レベル突破講座等、各教科教員による高度な学びの機会を提供する。

i. 留学生の受け入れと学校体制の整備

①「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生の受け入れ【拠点校】

平成30年度より5カ年でのべ15カ国40名を受け入れた。プロジェクト終了に伴い、次年度以降の受け入れ体制を整備する。

②信男教育学園高等学校からの転入生の受け入れ【拠点校・連携校】

連携校である中国の信男教育学園高等学校からは、平成29年度より5カ年でのべ15名を受け入れた。

(3) 財政支援等【管理機関】

a. 自己負担額の支出

事業名	予算(千円)		
	管理機関負担	参加者負担	計
GI フィールドワーク Basic (参加費用)	50	0	50
GI フィールドワーク Advance (参加費用)	0	3,875	3,875
GI 留学プログラム (留学費用)	0	30,000	30,000
食のサミット (招聘・実施費用)	2,995	0	2,995

海外交流アドバイザー等（人件費）	4,128	0	4,128
企業連携費用	300	0	300
WWL 事業実施内容報告（報告費用）	102	0	102
合 計	7,575	33,875	41,450

b. 人的または財政的な支援、研修やセミナー等の実施

(ア) 学園グループとして専門性を有する講師の派遣

管理機関が設置している中村学園大学等及び姉妹法人が設置している中村調理製菓専門学校等の教員による専門性の高い研修等を実施する。

(イ) 海外交流アドバイザーの配置

管理機関の教職員として配置し、海外関連教育活動の企画立案に携わる。

(ウ) 中村学園国際交流基金の活用

管理機関が設定している基金より、WWL 事業にかかる一部の経費を負担する。

c. 国の委託終了後の継続的な実施

3年間の研究・実践のうち、成果が高かった内容をより効率的に継続実施をしていくと共に、企業や研究機関に寄付講座を依頼し、食を通じた広範かつ深い学びの実現を図る。

<添付資料> 令和5年度教育課程表

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
① 運営組織の拡充	学校法人中村学園	経営企画室長 松本公典
②情報共有体制の整備	学校法人中村学園	経営企画室長 松本公典
③教員チームによるコーチング	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行
④学校説明会や入試講座の開催	中村学園女子高等学校	進路指導部 鬼島隆
⑤留学・海外研修等の参加奨励	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行
⑥カリキュラムアドバイザーの配置	学校法人中村学園	校長 石丸篤志
⑦「食のサミット」の開催	中村学園女子高等学校	校長 石丸篤志
⑧連携校行事への参加	京都先端科学大学附属高等学校 高知西(高知国際)高等学校	校長 石丸篤志
⑨「WWL 報告会」の開催	中村学園女子高等学校	校長 石丸篤志
⑩広報紙の発行・配布	中村学園女子高等学校	企画広報部 木林裕盛
⑪学校ホームページの充実	中村学園女子高等学校	企画広報部 木林裕盛
⑫SNS の利用と動画の制作と紹介	中村学園女子高等学校	企画広報部 木林裕盛
⑬「GI 探究」の開発と実践	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行
⑭「グローバル探究」の開発と実践	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行
⑮「GI フィールドワーク Basic」の開発と実践	中村学園女子高等学校	教育開発部 手島翼
⑯「GI フィールドワーク Advance」の開発と実践	中村学園女子高等学校	教育開発部 三浦隆博
⑰「GI 留学プログラム」の開発と実施	中村学園女子高等学校	教育開発部 手島翼
⑱「GI 留学プログラム」参加支援	学校法人中村学園	経営企画室長 松本公典
⑲「GI スキルアップセミナー」の開発と実施	中村学園女子高等学校	教育開発部 手島翼
⑳「GI プレゼンテーション」の開発と実施	中村学園女子高等学校	教育開発部 永松妙子
㉑ICT の活用	中村学園女子高等学校	情報科 手島翼
㉒「英語探究」の活動	中村学園女子高等学校	教育開発部 ハグー・デイル・アンジェス
㉓指導指標の測定	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行
㉔科目履修生制度（AP）の受講	中村学園女子高等学校	進路指導部 鬼島隆
㉕「GI 講座」の開催	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行
㉖各教科での高度な内容への取り組み	中村学園女子高等学校	進路指導部 鬼島隆 校長 石丸篤志
㉗留学生の受け入れ	中村学園女子高等学校	教育開発部 西岡隆行 教育開発部 豊見山寛人

II-2 WWL コンソーシアム構築支援事業の構想概要

WWLコンソーシアム構築支援事業の構想概要

「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

■ 研究開発の概要（オンラインでの実施を含めた開発）

- ① 「食」を切り口とした文理融合型カリキュラム及びそれに位置づけられたイノベーションスキルの育成法・評価法の開発
- ② 「食」に関する多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓と開発
- ③ 「食」に取り組む学校や機関によるALネットワークの拡充と組織化（効率よく成果を最大限に上げる方法）の開発
- ④ 留学生との協働を最適化するプログラムの開発
- ⑤ 多面的評価による入試方式とAP導入による高度な学びの提供方法の開発

■ イノベティブなグローバル人材に必要な資質・能力等（育成する人材像）

まずは日本人としての自覚と素養を備え持つ。これに加え、グローバル・リーダーとして必要な地球規模の課題への関心、多様性受容力、コミュニケーション力を併せ持ち、自主的な学習ができる。さらに、イノベーターとして必要な課題解決力、突破力、創造力、調和力を兼ね備えている。

GI（グローバル・イノベーター）として社会への貢献 ▶ 進路実現：国内外のトップ校を含む大学・起業家



Ⅲ-1	職員研修「総合的な探究の指導に関する研修会」	
2023. 11. 14 (火) 16:20~17:00	拠点校：視聴覚室	

1. 目的

拠点校の職員を対象に、「総合的な探究の時間」のあり方や指導方法、アクティブ・ラーニング等の先進的な指導法について理解を深める。

2. 内容

九州大学基幹教育院人文社会科学部門所属の三木 洋一郎教授をお招きし、講演会をひらいた。講演者は九州大学の歯学部でPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）、TBL（チーム・ベースド・ラーニング）を実践されており、2つの経験から、

- ①大学と高校の勉強の繋がり（高大接続）
- ②PBLの活動内容と生徒への「問い」の与え方
- ③生徒同士の議論をいかにして楽しませるか
- ④教員のファシリテーション
- ⑤コンピテンシーと学習における目的設定
- ⑥九州大学共創学部や教養部の取り組み

について説明を受けた。

3. アンケート結果

Q. 研修会を受けて、探究活動やその意義について理解が深まりましたか？

回答	回答の全体に占める割合 (%)
理解が深まった	50%
どちらかといえば理解が深まった	42%
どちらかといえば理解が深まらなかった	6%
理解が深まらなかった	2%

○コメント

【理解が深まった】

- ・講義形式ではなく学び合うことによって理解度は深まるということを改めて認識しました。授業内で問いを立て、考えさせようとしてもインターネットですぐ出てくる知識に飛びつく傾向があるので「考える」訓練が必要だと感じています。また、その問いの立て方にも工夫が必要だと感じました。
- ・生徒が自分事として感じられるような問題を提起することが重要だとわかりました。普段の授業の中で、問いかけ次第で、生徒が問題意識をもつかどうかが変わってくるということを実感していたので、今回の研修会は大変勉強になりました。
- ・ディスカッションが深まるような声掛けや適切な問いを投げかけられるようにさらに自己研鑽したいと思いました。私自身には得意な分野と不得意な分野がありますので、自分がすべての分野を網羅しようとするのではなく、学内でそれぞれの教員の持ち味を活かした探究活動を行っていくことが大切だと感じました。

【どちらかといえば理解が深まった】

- ・ディスカッションから学生の学びを深めるということがどの様なことかという事がよくわかりました。
- ・現在の指導が、PBL から TBL に移行していることを知ることができました。「何ができるようになって欲しいか？」を意識して今後指導していきたいと思います。
- ・問題、課題設定、教員の立ち位置が重要だと改めて思いました。生徒理解、教育心理を深めていけないといけないなと思いました。課題設定、声掛けを適切に行うことができれば生徒の学びの深度が違ってくるので、やっぱり重要だと感じました。

【どちらかといえば理解が深まらなかった】

- ・今回の研修では私にとってあまり触れることがない大学の授業で PBL や TBL といった形態の授業が積極的に取り入れられている現状を知ることができてよかった。
- ・大学での具体的な授業の場面でどのような授業が展開されているかがわかりました。

【理解が深まらなかった】

- ・コンピテンシーの重要性がわかったが、具体的にどうすれば達成できるのかわからなかった。

4. 考察

PBL や TBL は活動やその手法に目がいきがちだが、大切なことは「(活動やその結果を導くにあたっての) 目的は何か」、「(活動するにあたって) 生徒に適切な問いが与えられるか」の2点であることを学んだ教員が多かった。手段や方法を身につけたり、研鑽したりすることはもちろん大切だが、「生徒にどうなって欲しいか」を念頭に置くことを忘れてはならないことを再確認できた。また生徒同士が議論をしたり発表するにあたって、意見を主張したり他者を批判することを受容できる生徒同士の雰囲気をつくるのが大切だと気付かされた。雰囲気づくりには教員の声掛けが不可欠であり、今後はそうしたファシリテーション能力の向上が必要となってくるであろう。今後、組織的に取り組んでいきたい。

Ⅲ-2	中村学会の開催	
	通年	中村学園大学

中村学園グループ内の併設校である中村学園女子高等学校(WWL 拠点校)および中村学園三陽高等学校(WWL 連携校)の選抜された若手職員で構成し、アクティブラーニングの手法や基礎研修を目的として研修・視察を実施した。今年度実施した研修・講座は下記のとおりである。

[講座]

- 第一回：自分の未来／目標設定講座（4/26）
- 第二回：自発人間講座（5/31）
- 第三回：目標設定／目標立体化講座（6/28）
- 第四回：信頼関係構築方法講座（8/17）
- 第五回：ティーチング・コーチング講座（9/20）
- 第六回：次世代リーダー育成講座①（12/8）
- 第七回：次世代リーダー育成講座②（2/16）
- 第八回：まとめ・振り返り（3/21）

[視察]

11月 立命館宇治高等学校

III-3	海外交流アドバイザーの配置	
	通年	管理機関

令和 5 年度の海外交流アドバイザーは、引き続き管理機関の職員である伊東正子氏が担当した。本年度、留学生の受入や海外研修、留学支援、海外連携校の開拓における外部機関との連携・調整を図るとともに、WWL 事業の各種行事における企画・運営に携わった。

担当した業務に関しては以下のとおりである。

1. 事業拠点校の海外研修・留学

- ・ GI1 年生対象「留学プログラム(参加希望制)」及び GI2 年生対象「GI フィールドワーク advance(海外研修)」における、関係機関との連絡・調整、説明会の開催
- ・ 留学支援金の選考に関する企画・運営、管理機関と事業拠点校間の連絡・調整
- ・ 夏期海外研修(全校生徒希望者対象)における、関係機関との連絡・調整、プランの選定、説明会の開催

2. 事業拠点校の学校行事

- ・ 「GI フィールドワーク basic(グローバル・キャンパス)」における、事業協働機関立命館アジア太平洋大学(APU)での国際学生(研修スタッフ)募集・連絡・調整

3. 教育開発部会

- ・ 教育開発部会への参加
- ・ 決定事項や議案に関する管理機関への連絡・調整

4. その他

- ・ アジア高校生架け橋プロジェクト+(プラス)における、AFS との連携・調整、留学生対応
- ・ 留学生・外国からの転入生の問い合わせ等の対応
- ・ 留学や進学に伴う海外渡航に関する教職員・生徒への相談対応
- ・ 海外連携校開拓に伴う関係機関との連携・調整
- ※タイ、ニュージーランドの高校との MOU 締結に向けて協議
- ・ 長期留学プログラム開発

Ⅲ-4	情報共有体制の整備	
通年	事務局・拠点校	

国内外の連携校とは相互の学校行事への参加に関する連絡を中心にして、メールや電話などで頻繁に行っている。後にあげるような事業の主となる行事や授業関係の連絡および情報交換については、事務局および拠点校の教育開発部が行った。なお、実施した行事については、拠点校および連携校のホームページに掲載し、拠点校の広報誌にも取り上げるなど、外部への情報公開を積極的に行った。なお、管理機関と拠点校間や拠点校内の連携についてはサイボウズ Garoon および Microsoft Teams にて、拠点校と生徒・保護者間については Classi を使用して常時情報を共有している。

【拠点校主催の行事案内・情報交換など】

○連携校に対して

- ・食のサミット（12月14・15日実施）への代表チームの参加募集、事前打ち合わせの連絡など
- ・WWL（3月8日実施）報告会での課題研究の発表参加のための連絡・打ち合わせ

○中村学園大学・中村学園短期大学部

- ・論文指導講師の派遣

○中村調理製菓専門学校、九州大学共創学部

- ・論文指導講師の派遣

○立命館アジア太平洋大学に対して

- ・立命館アジア太平洋大学学校説明会（8月2日実施）の拠点校生徒への参加案内など
- ・グローバル・キャンパス（9月12・13日実施）における指導学生の募集・実施要領説明など

○SG インキュベート株式会社に対して

- ・GI スキルアップセミナーの要領説明および講師紹介依頼など

○ハワイ大学 KCC に対して

- ・進学説明会への参加案内など

○マレーシア工科大学(UTM)に対して

- ・GI フィールドワーク Advance(海外FW)における大学訪問のための連絡・打ち合わせ

○国連 WFP 協会

- ・食のサミット(12月14日・15日)への招待、宣言書の提出

【連携校主催の行事案内・情報交換など】

○京都先端科学大学附属高等学校

- ・AL ネットワーク連絡会への拠点校教員参加のための打ち合わせ
- ・職員研修会での拠点校職員の実践発表に伴う連絡・調整
- ・グローバル・シミュレーション・ゲーミング（1月23日実施）への参加案内
- ・探究成果発表会（1月24日実施）への参加案内、拠点校生徒参加の調整

○高知県立高知国際等学校

- ・探究成果発表会（3月9日実施）への参加案内、拠点校生徒参加の調整

【事業協働機関の行事案内・情報交換など】

- 中村学園大学・中村学園短期大学部
 - ・中村学園大学・短期大学部学校説明会への拠点校生徒への参加案内など
 - ・科目等履修制度（大学講座の先取り履修）の拠点校生徒への説明および募集・実施など
- SG インキュベート株式会社に対して
 - ・SG インキュベート株式会社主催 TORYUMON(スタートアップイベント)への参加

【管理機関との情報交換】

- ・事業全体の進捗管理
- ・運営指導委員会等の会議の開催(年2回)

III-5	教員チームによるコーチング	
	通年	拠点校 GI クラス

昨年度までは高校 3 学年の GI クラスで、探究授業担当者によって組織した教員チームが、クラスの生徒個々の指導を分担して行った。今年度から、高 1・高 2 の探究活動は GI クラスを含め全クラスが行うことになったことで、担任と学年が運用を行うことになった。高校 3 年の GI クラスは論文の作成があるため昨年同様、下表のように国語・数学・地歴公民・理科・家庭科・情報の教科担当者を含む 7～8 名体制で指導にあたった。

一人の教員が 4 名程度の生徒の論文の添削やアドバイスを行った。今年度の論文指導自体は効果的に運用できたが、来年度以降は全生徒が担任の指導のもと 3 年間の探究の成果物を作成することとなる。担任の教科、得意分野に応じて担当生徒を配属させる「ゼミ形式」や、上級生と下級生を交流させることで探究のノウハウを共有するといった工夫を検討している。

表 高 3 探究授業担当者（論文指導員）

学年・クラス 教科	3 年 GI クラス
英語（担任）	三浦
国語	橋本
数学	横山（学年主任）
地歴・公民	朝野・西岡
理科	武宮
家庭科	上野
情報	手島

III-6	GI 留学プログラム参加支援	
	2023. 7～9 月	管理機関・拠点校

令和3年度より開始した「GI 留学プログラム」(GI1 年生対象・2 か月ターム留学(カナダ))の実施に伴い、学園では留学支援金制度を設置している。本制度は留学希望者を対象に学園関係者による選考を行い、選考を通過した者に渡航費用の半額相当の支援金(給付型)を支給する。留学支援の目的は、以下の3点である。

- ・生徒のモチベーション、学習意欲向上に繋げる
- ・留学目的を整理させ、留学の成果を高める
- ・経済的支援により、留学希望者を増やすことで海外進学者の増加が期待できる

選考は、一次選考(書類審査/校内選考)・二次選考(プレゼンテーション審査/学園本部選考)とし、審査基準は学業成績のみならず「思考力」「判断力」「表現力」等時代の変遷に即した評価軸を重視する。各選考委員は、日頃生徒と関わりのない学園関係者で構成し、公平で厳正な審査を行った。今年度の選考スケジュールは以下のとおりである。

[選考スケジュール]

日程	内容
7月1日	説明会(対象:生徒・保護者)
7月2日～7月18日	一次選考(エッセイ)受付 エッセイテーマ:「留学で学びたいこと」等
7月19日～7月26日	選考委員による一次選考審査
7月27日	選考委員による協議
8月初旬	一次選考結果通知発送
9月11日	二次選考(プレゼンテーション) プレゼンテーションテーマ:「なぜ留学をしたいか」
9月中旬	結果通知

[検証]

一次選考では志願者25名中10名が通過し、二次選考では4名が合格した。合格者については、留学中に各自の課題設定に基づいた現地調査等を行うとともに、帰国後に成果発表を課す。

III-7	SDGs の取り組み (コンポストの実施)	
	2023/5/22(月)～	学校敷地内

1. 目的

昨年度の国際会議「食のサミット」において、コンポストの活動を継続していくことをアクションプラン内で提示した。拠点校では、環境問題やSDGs への関心を深めるために以下を目的とし取り組みを行っている。

- (1) カフェテリアで廃棄される生ゴミを有効活用する
- (2) SDGs を考え、自ら実践し、ゴミ問題を自分事として捉える
- (3) 特定の生徒・クラスではなく学校全体で取り組むことでコンポストを多くの人に広めていく
- (4) 生徒が作業の手順やコツを後輩に教えたり先輩に学んだりして、他学年と協力して活動する機会を得る。

2. 実施方法

放課後に係生徒がカフェテリアの生ゴミを回収し、各クラスが担当するコンポストに生ゴミを投入し、その記録をとる。

3. 実施報告

- ・5月8日(月)
高2 1限 コンポスト活動の手順の説明と準備を行う。
- ・5月22日(月)
高2 放課後 コンポスト作り開始。
- ・7月末
高2 コンポストの熟成期間に入る。この間、コンポストへの生ごみの投入は行わず、分解が進むのは待った。
- ・9月25日(月)
高1 放課後 各クラスのコンポスト係に使用する物品の説明・準備を行う。説明は高校2年生のコンポスト係が行い2年生から1年生への引き継ぎが行われた。
同時にコンポストづくりも開始。
- ・10月
高2 プランター作り：バッグ内で熟成させた堆肥に土を混ぜる。
花を植えてコンポストづくり前半終了。
植えた花は水仙の丘に設置された。
- ・12月下旬
高1 コンポストは熟成期間に入る。この間、コンポストへの生ごみの投入は行わず、分解が進むのは待った。

4. コンポストの記録

- ・1日平均約4kgの生ごみを投入した。投入日数は合計で60日であったので、単純計算で約240kgの生ごみを削減することができた。以下の表は、コンポストの記録より抜粋した内容である。

高2

日付	バッグ内の温度	気付いたこと
5/22	20°	土がふわふわ。生ごみのおいが少しした。
5/23	20°	においが強い。
5/24	20°	オレンジのおいが強い。
5/25	22°	パインのおいが強い。
5/30	31°	温度が一気に上がった
6/7	30°	玉ねぎは分解されずに残っている。
6/8	28°	においがする。生ごみのおいだと思う。
6/13	28°	虫が湧いているバッグがあった。
6/16	26°	だんだんと温度が下がってきている。においは少なくなってきた。

6月下旬～7月中旬は期末考査や模試・運動会といった大きな行事が多くありコンポスト活動は下火となった。そのため、コンポストに生ごみを投入したのは数回程度だった。その後、7月下旬には夏休みに突入し、コンポストも熟成期間とした。

高1

日付	バッグ内の温度	気付いたこと
9/26	26°	においが強い。
9/29	26°	野菜くずが多く見える。においもある。
10/1	20°	バッグの温度が下がった。
10/6	20°	気温が下がったこともあって、バッグの温度も下がっている。
10/18	20°	ねぎのおいが強かった。
10/19	22°	今日も野菜が多く見える。
10/30	19°	においがなかった。
11/7	16°～19°	バッグによって温度に差がある。
11/8	19°	外は寒いですがバッグは温かかった。
11/30	9°	バッグの温度も1ケタになった。すごく冷たい。
12/4	12°	少し温度が上がっていた。
12/8	14°	においが強かった。

11月中旬ごろになると生ごみの分解が追い付かず、残った状態が続いたため2週間ほど生ごみの投入をストップした。結果は上記記録の通りである。また、高2実施時には魚などの肉類も投入していたが虫が湧いたり、においが強すぎたりと問題があったため、高1実施時には投入する生ごみを野菜類中心に変更した。効果はややあったようだ。少なくとも虫が湧いた報告はでなかった。

IV-1	全国高校生フォーラム参加
2023. 12. 17(日)10:00~16:00	国立オリンピック記念青少年総合センター

本年度も、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業「全国高校生フォーラム」に参加した。研究テーマは参加生徒3名が話し合って設定し、現代社会におけるスマホ依存の危険性についての研究を行うことに決めた。ここ数年まではコロナ禍への対応として発表動画を提出する方式であったが、今年度は従来通り対面で、ポスターセッションにて発表を行う形式となった。

10月下旬に海外FWを終え、11月上旬には研究の要約提出という時間的制約がある中で、生徒主体で研究活動および発表資料の作成を行うこととなった。本イベントにおける使用言語は英語であり、事前に行われるディスカッションも本番のプレゼンテーションも全て英語で行われる。フォーラム当日は、全国のWWLやSGHの高校生と世界的な課題を英語でディスカッションすることで、本校生徒も他校の生徒の英語力や探究力に刺激を受ける良い機会となった。発表内容の概要については以下の通りである。

1. 発表テーマ

“The Dangers of Smartphone Dependence and How to Break Free”

若者のスマホ依存症とその脱却法

2. 発表の要約

ソーシャルメディアの普及により、近年、スマホ依存症になる学生が増加している。若者にとってその影響がどれほどのものか、スマホ依存症によって起こされる問題を明らかにし、そこからの脱却法として、いくつか提案する。

3. 発表資料 (大判ポスター)

The Dangers of Smartphone Dependence and How to Break Free

W202009 Nakamura Gakuen Girls' Senior High School

Definition of smartphone addiction

A condition in which being absorbed in the Internet or playing games interferes with daily life and health.

Cause

Social media and gaming have become more accessible to people.

- interests and concerns are stimulated
- seek further enjoyment
- unable to limit their own use of smartphones

Research method: survey
A survey was conducted on 400 students from our school

Percentage shows how many students out of 400 people answered 'yes'

Survey questions and Results

- ① time passes without notice while engaged in smartphone activity 92.5%
- ② texting social media, use and email more than talking in real-time 29.3%
- ③ checking Smartphones even if no need 82.5%
- ④ bringing a smartphone into the bathroom while taking a bath 37.3%
- ⑤ sometimes talking to people while looking at the smartphone screen 49.3%
- ⑥ sometimes touch smartphone while doing tasks that require concentration, such as studying 69.3%
- ⑦ can't stand a day without smartphone use 62%
- ⑧ use of smartphone in free time 81.8%

Category	Count	Percentage
Non dependent	41	10.3%
Somewhat dependent	191	47.8%
Dependent	165	41.3%

Negative influence

- negative information, higher rates of stress problems, cases of depressive-like symptoms.
- loss of self-esteem, dissatisfaction with self-image, mental health.
- wakes up the brain and suppresses the secretion of the hormone melatonin, also delays it by 2~3 hours, thereby lowering the quality of sleep.
- phenomenon-Google effect or digital amnesia, adigital dementia may result.

Consideration

Young people.....

- tend to care about the latest trends
- and are motivated to keep up with them through the use of competitive content applications.

Staying home due to the coronavirus outbreak may have also had an impact ... ?

Solutions

- Do light exercise to increase heart rate and reduce stress
- Monitor your smartphone use to check how much time you are wasting.
- Turn off push notifications to prevent distractions

References:
<https://www.clinic.jp/tao/%E3%82%B0%E3%83%9C%E3%83%90%E4%8E%9D%E5%AD%A8/> / <https://webtan.impress.co.jp/n/2022/10/07/43454> The Smartphone Brain Anders Hansen / Author , Yoko Hisayama / Translator
<https://www.emro.who.int/emj-vol-26-2020/volume-26-issue-6/mobile-phone-use-pattern-and-addiction-in-relation-to-depression-and-anxiety.html>

IV-2	九州大学 世界にはばたく高校生の成果発表会への参加
2022. 12. 17 (日) 11:15~16:40	九州大学伊都キャンパス

1. 概要

九州大学主催の「令和5年度 将来の夢を切り拓く“高大連携”世界に羽ばたく高校生の成果発表会」に、2年GIクラスから2チーム（合計9名）が参加した。昨年度まではコロナ禍に配慮し、発表スライドによるプレゼンテーション形式で行われていたが、本年度はポスターセッションによる対面での発表に変わっている。10月下旬に海外FWを終えた後、約2ヶ月間という限られた時間の中でも、生徒達は主体的に研究活動や資料作成を行うことができていた。

2. 発表テーマ

今回、発表を行った2チームの発表テーマは次の通りである。

チーム①「人の惹きつけ方 ～聴き手の心理と話し方の関係性～」

チーム②「国によって異なる若者のSNSでの在り方」

チーム①については講評でオーディエンス賞を受賞している。

3. 発表資料

人の惹きつけ方 ～聴き手の心理と話し方の関係性～

中村学園女子高等学校 村上陽菜・立石夏希・小西柚葉・石津彩羽・石津夢乃

パブリックスピーキング（人前で話すこと）

バーバルコミュニケーション	ノンバーバルコミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> 会話 電話 メール 挨拶 文字 印刷物 	<ul style="list-style-type: none"> 表現 仕草 視線 身振り、手振り 声のトーン 声の大きさ

言語的 **非言語的**

研究1

アンケート内容
分かりやすい授業と分かりにくい授業の特徴

対象者
中村学園女子高等学校2学年全員（約300人）

仮説
○声が大きいき、問いかける、目標
×ほそほそ、一方的に話す、暗い

研究2

アンケート内容
右のように4つにパターン化それぞれの特徴を用いてプレゼンを行い、1番分かりやすい人に1票

対象者
クラス29人

仮説
バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションの比較は1:3が最適

結果

その他の結果

- 39%が「分かりやすい授業」を評価
- 26%が「分かりにくい授業」を評価
- 12%が「両方とも」
- 14%が「どちらでもない」
- 20%が「両方とも」
- 22%が「どちらでもない」

考察
両方とも評価が高い授業は、バーバルのみが得意な人ばかりでなく、ノンバーバルも得意な人が多い

結果

バーバルのみ: 1
ノンバーバルのみ: 11
バーバル:ノンバーバル=3:2: 1
バーバル:ノンバーバル=2:3: 16

考察
ノンバーバルが多いプレゼンが多数ある傾向にある
話すまでバーバルよりもノンバーバルの場、重要性が高い

結論

メラビアンの法則

聴覚 38%
言語 7%
視覚 55%

ポイント①
ノンバーバルコミュニケーションはプラスでもマイナスでも大きな影響を与える。

ポイント②
人を惹きつける話し方には、良いバーバルコミュニケーションと良いノンバーバルコミュニケーションのバランスが大切である。メラビアンの法則によると、そのバランスは「バーバルコミュニケーション1：ノンバーバルコミュニケーション9」とされる。

人を惹きつける話し方は、バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションのバランスを意識し、これら2つの良い部分を取り入れることが必要である。

国によって異なる若者のSNSでの在り方

～日本と海外で異なる若者のSNSでの在り方とそこを考える文化の違いの関係性～

1. 研究方法

今回はSNSのひとつとして世界中で利用されているInstagramに限定して、研究を行った。

- Googleフォームを利用して、日本人の学生、本校の女子学生、留学生（アメリカ・カナダ）・海外フリードワーカー（ロシア・インドネシア）を通じて知り合った海外の学生を対象にアンケート形式で質問した。（回答者 日本：計401名 海外：計48名）
- Instagramで検索した
- 2022年12月17日現在
- Instagramの検索機能を利用して、日本人の学生、本校の女子学生、留学生（アメリカ・カナダ）・海外フリードワーカー（ロシア・インドネシア）を通じて知り合った海外の学生を対象にアンケート形式で質問した。
- 回答者の年齢を調査し、18歳以上の若者を対象とした。
- 回答者の性別を調査し、男女を均等に調査した。
- 回答者の職業を調査し、学生とフリードワーカーを均等に調査した。

2. 自分の顔をInstagramに投稿したことがあるか

ある	ない	その他
49.9%	51.1%	100%

加工した投稿: 25.7% 加工なし投稿: 92.9%

3. Instagramに自分の写真を投稿したことがあるか

投稿あり	投稿なし
75.3%	23.7%

4. 自分の写真を投稿している人かどう考えるか

投稿あり	投稿なし
26.7%	73.3%

考察・まとめ

日本人と海外の人とは考え方が大きく異なるということがわかった
それぞれの文化によるものと推測

日本	海外
<ul style="list-style-type: none"> 他者との関係に強く依存し合う 相互協調的文化に生きるため、周囲からの評価に敏感であるかつ、他者の投稿にも関心が高い 	<ul style="list-style-type: none"> 他者と自己は互いに独立している 相互独立的文化に生きるため、周囲からの評価や、他者の投稿にあまり関心がない

自身を取り巻く文化、環境から築かれる価値観が、このような自己発信の場でも顕著にあらわれていることを発見することができた。

3. 担当者考察

両チームとも生徒が主体的に研究を行い、事前準備をこなすことができていた。チーム①は集客に優れ、プレゼンテーションの手法が評価されており、みごと「オーディエンス賞」を受賞している。

チーム②は受賞こそ逃したものの、アンケート調査やデータの収集力について優れた成果を見せ、好評を得ていた。

WWL、SSH 指定の高校を多数含む九州各地から出場した高校生の意欲や質の高い研究から大いに学び刺激を受けた様子であった。また、今回オーディエンス賞を受賞したチーム①は、本校開催の WWL 報告会においてプレゼンテーションを行い、全校生徒と研究内容を共有することができた。今回、研究テーマを考え、調査研究を行い、資料作成とプレゼンテーションを行うまでの一連活動をすべて生徒達が自主的に行うことができており、GI クラスの生徒として約 1 年半の成長が窺える良い機会であった。

IV-3	京都先端科学大学附属高校 GSG・成果発表会参加	
2024. 1. 23 (火) ～ 2024. 1. 24 (水)	京都先端科学大学附属高校	

1. GSG (グローバル・シュミレーション・ゲーミング)

[開催日] 2024年1月23日(火)

[場 所] 京都先端科学大学附属高校

本年度、WWL 国内連携校である京都先端科学大学附属高校が主催する GSG (グローバル・シュミレーション・ゲーミング) に参加した。GSG とは、東京大学と立命館大学国際関係学部で開発されたシミュレーション・ゲーミングであり、2014年に立命館大学で行われた Global Simulation Gaming のために作成されたガイドラインを、京都先端科学大学附属高校での実施により適した形式にアレンジしたものであり、国際関係バーチャルリアリティーゲーミングである。

GSG では、参加者全員がそれぞれのアクター (国際関係における主体) になりきって、国際政治や国際経済の動きの中で、課題設定、政策立案、交渉、条約締結、政策行使という一連のプロセスを擬似的に体験する。模擬国連に似た要素も多いが、特筆すべきはメディア・アクターが含まれており、政治とメディアの関係も含めて、よりリアルに国際関係を学ぶことである。GSG の主な到達目標の一部は下記のとおりである。

- (1) 多角的な視点から見た国際情勢への知識・理解力を養い、それを通して行動力を身につける。
- (2) 課題設定・政策立案・外交交渉を行うことで、現実の国際社会についての理解を深める。
- (3) 生徒同士で協働しながら学ぶ (ピアラーニング) を踏まえて、今の学習目標を作り発展させる。

本年度の GSG のテーマは「気候変動に対する具体的な取り組み」で、エネルギー資源やカーボンニュートラルなどがキーワードとして取り上げられた。

今回は、GI クラス 2 年生 4 名が 1 チームとして参加し、アクターはフランスを担当した。「英語力を伸ばしたい」「環境問題に興味がある」という生徒ばかりであるが、模擬国連への参加を経験している者は 1 人も居なかった。よって、模擬国連そのものについての事前学習をどのように行うかが、今回のイベント参加のポイントであり、国際情勢や各国の状況のリサーチはもちろん、交渉やディスカッション手法についても事前に訓練を行うこととなった。

イベントの本番では、各アクターに拠点となる教室が割り当てられ、各国が拠点を渡り歩き、条約の締結に向けて交渉を行っていく。全ての活動は英語で行われるため、英語力は勿論、ディスカッションをはじめとするコミュニケーション能力を磨くことのできる有意義なイベントであった。今後本校でも、生徒参加型のより実践的な活動を検討する際には、大変参考となるイベントであると考えられる。



各拠点における交渉の様子 (左・中) と G7 での話し合いの様子 (右)

2. 課題研究成果発表会

[開催日] 2024年1月23日(火)

[場 所] 京都先端科学大学附属高校

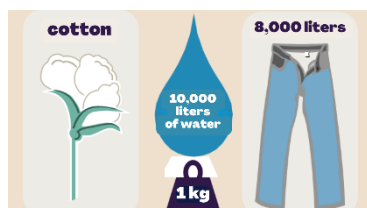
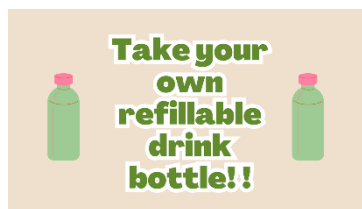
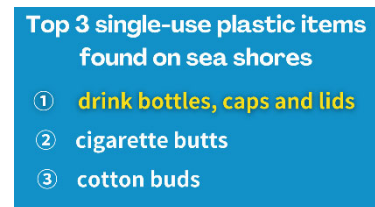
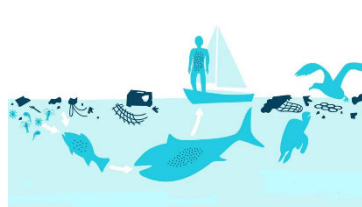
WWL 連携校である京都先端科学大学附属高校（以下 KUAS）のもう1つのイベント「課題研究成果発表会」に GSG と同じメンバーが参加し、本校の探究活動について発表を行った。本イベントは GSG が開催された翌日に行われており、前日から連泊する形での参加となった。

本校生徒の発表では、GI クラス3期生が主に参加した Blue Earth Project の活動を基に、「水に関する環境問題」への解決策として、生徒達が行った活動を報告した。



会への参加（左）と 発表・講評の様子（中・右）

■ 発表資料





本イベントも主な使用言語は英語であり、全てのプレゼンテーションは英語で行われている。本発表会を参観して、KUAS の国際科の生徒の発表の英語力や研究内容について、見習わなければならない点が多くあると感じた。英語力やリサーチスキルを高めるだけでなく、コミュニケーション能力や海外情勢への関心を高めることも、我々にとって大きな課題である。

IV-4	高知県立高知国際中学校・高等学校での探究成果発表会への参加	
	2024. 3. 9 (土)	高知県立高知国際中学校・高等学校

連携校である高知県立高知国際中学校・高等学校が主催する探究成果発表会に拠点校の1年GIクラスの生徒3名と教員1名が参加した。午前の部では、探究活動を分野別にわけ、それらを3つの会場に分配し、代表者による発表・質疑応答が約15分間で行われた。約1時間半の発表会が終わったあと、同様に3つの会場に分かれて、学外イベントで学校代表を務めた生徒の発表が行われた。その中の発表の一つとして拠点校生徒が拠点校の探究活動の振り返りを発表した。発表会后、関西学院大学の時任隼平准教授が講評を行った。午後の部では、各教室にて様々な分野のゼミによる探究成果のポスターセッションが行われた。本校生徒も、連携校の生徒や来賓とともに各教室を周り、各自が関心を持ったブースで成果発表を聴いた。良いポスター発表にはシールを貼り、評価を行った。約1時間半のポスターセッションが終わった後、大会場にて九州大学花井渉准教授が講評を行った。

会に参加した拠点校の生徒は、他校の探究活動をはじめて知ったことで大きな刺激を受けていた。拠点校の他の生徒に情報共有をはかることで、探究活動の更なる進歩につながっていければよいと考える。また、この会全体を通じて、探究活動が一部の生徒や教員だけの行事でなく全校をあげた活動としてうまく運用されており、多くの生徒がお互いの探究活動や発表に楽しみながら臨んでいる雰囲気が印象的であった。拠点校でも組織的な発表会の運用、生徒の指導に工夫をしていきたい。



IV-5	WWL 報告会
2024. 3. 8(金)13:30~15:00	拠点校：講堂

1. 目的

本校 GI クラスや連携校の探究活動の発表を拠点校生徒、連携校、協働機関に向けて行うことで、探究活動の情報の共有と質的な向上をはかる。

2. 内容

今年度の探究活動の成果発表会となる WWL 報告会が拠点校で開催された。昨年度は 12 月に開催していたが、今年度は学年の集大成として 3 月に行った。連携校の発表・参加や校外からの参加者（一部の来賓を除く）はすべてオンラインによる視聴とした。

【参加者】

対面での参加：中学生、高校1・2年生、高校3年GIクラス代表、来賓5名（運営指導委員を含む）

オンライン参加：連携校発表者6名と関係者3名、教育関係者3名

【報告会の内容】

(1) オープニング

(2) 学校長挨拶

(3) 生徒発表

①GIクラス1年生探究・活動報告

グローバル・キャンパス、Blue Earth Project、アントレプレナーシップ講座の報告

②高知県立高知国際高校（連携校）代表によるオンライン発表

③GIクラス2年生探究・活動報告

世界に羽ばたく高校生の成果発表会、模擬国連、食のサミットの報告

④京都先端科学大学附属高校（連携校）代表によるオンライン発表

⑤GIクラス3年生探究・活動報告

3年間の活動、進路についての報告

⑥中村学園三陽高校（連携校）代表によるオンライン発表

⑦AFS留学生の発表

日本や本校での学びについての報告

(4) 講評(理事長)

(5) クロージング

3. アンケート結果と考察

1年生(GIクラス以外)	【事前】 肯定的意見	→	【事後】 肯定的意見	【事前】 否定的意見	→	【事後】 否定的意見
現在、日本で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	77.4%(29.8%)	→	92.1%(43.8%)	22.6%(8.7%)	→	8%(1.3%)
現在、世界各国で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	72.6%(27.4%)	→	94.2%(44.2%)	27.3%(8.3%)	→	5.8%(0.8%)
世界の諸問題がどのように日本と（私達と）繋がっているか考えたことがある/考えるきっかけになった	68.2%(19%)	→	96.2%(48.3%)	31.7%(9.1%)	→	3.8%(0%)
フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる	65.9%(13.5%)	→	74.2%(17.5%)	34.1%(8.3%)	→	25.9%(3.8%)
解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う	67.1%(15.1%)	→	84.2%(25%)	32.9%(7.1%)	→	15.9%(1.3%)
現在起きている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある	46%(9.5%)	→	75.4%(22.1%)	54%(15.5%)	→	24.6%(2.5%)
世界に目を向けて行動できる人物になりたいと思う	85.7%(36.5%)	→	92.5%(40.4%)	14.3%(4.4%)	→	7.5%(1.7%)
連携校の生徒と積極的に意見交換をしてみたいと思う	63.1%(14.7%)	→	79.6%(25%)	36.9%(10.7%)	→	20.4%(2.9%)

1年生(GIクラス)	【事前】 肯定的意見	→	【事後】 肯定的意見	【事前】 否定的意見	→	【事後】 否定的意見
現在、日本で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	100%(66.7%)	→	100%(44.4%)	0%(0%)	→	0%(0%)
現在、世界各国で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	100%(44.4%)	→	100%(55.6%)	0%(0%)	→	0%(0%)
世界の諸問題がどのように日本と（私達と）繋がっているか考えたことがある/考えるきっかけになった	77.8%(22.2%)	→	100%(33.3%)	22.2%(0%)	→	0%(0%)
フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる	77.8%(11.1%)	→	100%(33.3%)	22.2%(11.1%)	→	0%(0%)
解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う	77.8%(22.2%)	→	100%(11.1%)	22.2%(0%)	→	0%(0%)
現在起きている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある	44.4%(11.1%)	→	77.8%(22.2%)	55.6%(0%)	→	22.2%(0%)
世界に目を向けて行動できる人物になりたいと思う	100%(55.6%)	→	100%(66.7%)	0%(0%)	→	0%(0%)
連携校の生徒と積極的に意見交換をしてみたいと思う	88.9%(22.2%)	→	88.9%(55.6%)	11.1%(0%)	→	11.1%(0%)

2年生(GIクラス以外)	【事前】 肯定的意見	→	【事後】 肯定的意見	【事前】 否定的意見	→	【事後】 否定的意見
現在、日本で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	75.3%(35.1%)	→	90.8%(46.1%)	24.7%(6.7%)	→	9.1%(3.2%)
現在、世界各国で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	73.2%(34.3%)	→	90.9%(45.7%)	26.7%(7.9%)	→	9.1%(1.8%)
世界の諸問題がどのように日本と（私達と）繋がっているか考えたことがある/考えるきっかけになった	72%(27.2%)	→	95.4%(47.9%)	28.1%(5.9%)	→	4.5%(1.8%)
フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる	72.8%(23.8%)	→	83.1%(30.1%)	27.2%(4.6%)	→	16.9%(4.1%)
解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う	62%(17.2%)	→	83.1%(34.7%)	38.1%(8.4%)	→	16.9%(5%)
現在起きている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある	54.2%(13%)	→	78.1%(28.3%)	45.8%(12.6%)	→	21.9%(2.7%)
世界に目を向けて行動できる人物になりたいと思う	84.1%(32.2%)	→	86.8%(41.1%)	15.9%(4.2%)	→	13.3%(4.6%)
連携校の生徒と積極的に意見交換をしてみたいと思う	56%(14.2%)	→	76.3%(24.2%)	43.9%(11.7%)	→	23.8%(4.6%)

2年生(GIクラス)	【事前】 肯定的意見	→	【事後】 肯定的意見	【事前】 否定的意見	→	【事後】 否定的意見
現在、日本で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	100%(65.4%)	→	88.9%(59.3%)	0%(0%)	→	11.1%(3.7%)
現在、世界各国で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	96.2%(57.7%)	→	100%(66.7%)	3.8%(0%)	→	0%(0%)
世界の諸問題がどのように日本と（私達と）繋がっているか考えたことがある/考えるきっかけになった	92.3%(34.6%)	→	100%(55.6%)	7.7%(0%)	→	0%(0%)
フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる	100%(53.8%)	→	100%(59.3%)	0%(0%)	→	0%(0%)
解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う	65.4%(26.9%)	→	81.4%(44.4%)	34.6%(3.8%)	→	18.5%(7.4%)
現在起きている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある	92.3%(15.4%)	→	92.6%(37%)	7.7%(0%)	→	7.4%(0%)
世界に目を向けて行動できる人物になりたいと思う	92.4%(46.2%)	→	96.3%(63%)	7.6%(3.8%)	→	3.7%(0%)
連携校の生徒と積極的に意見交換をしてみたいと思う	92.3%(38.5%)	→	96.3%(55.6%)	7.7%(0%)	→	3.7%(0%)

【考察】

アンケート回答者は合計で 526 名である。高校 1 年生の GI クラス(9 名)とそれ以外のクラス(252 名)、高校 2 年生の GI クラス(26 名)とそれ以外のクラス(239 名)の 4 つの集団でアンケート結果を集計した。

高校 1 年生全クラス、高校 2 年生 GI 以外のクラスは設問 1~3 の項目(日本、世界の諸問題への関心)については事後肯定的な回答の割合が増えている。この報告会が課題探究への意識づけとして効果があったと考えることができる。しかし、唯一高 2GI クラスだけが割合が低下している。原因を断定することはできないが、今回の発表会で報告の中心になった生徒が多く、「活動・発表への苦勞」からネガティブな回答が増えたのかもしれない。報告会の運営の仕方や発表の仕方を工夫し、生徒が活動に前向きになれるように改善していかなければならない。

設問の 4~6 の項目(具体的な環境問題、課題解決に向けて自主的に行動する意欲)については、高 1・2 年ともに GI クラスの方が他クラスよりも事後肯定的な回答の割合が大きい。協働機関との探究活動や探究活動の成果発表の機会が多い GI クラスの方が、学んだ知識を表現したり活用したりする機会が多いため割合が大きくなったと考えられる。また、設問 8 の項目(連携校との意見交換)についても GI クラスの方が他クラスよりも事後肯定的な回答の割合が大きくなっている。これは本校の「食のサミット」や連携校の国際会議や発表会において GI クラスが中心となって活動していることが理由として考えられる。

GI クラスの方が他クラスに比べて事後肯定的な割合が大きくなるような設問は、すべて協働機関や連携校との関わる頻度に起因している。GI クラスはイノベーターの育成を目指し、WWL 事業の中心として様々な教育リソースを活用してきた。まずは GI クラスの活動を他クラスに広げていくこと、そして本校全クラスの生徒が連携校の生徒と交流したりや協働学習を行ったりする機会を増やしていくことが今後の課題であるといえる。



III-6	GI フィールドワーク Basic (グローバル・キャンパス) の開発と実施
2023. 9. 12 (火) 13:00~15:30・13(水)9:00~15:40	拠点校：講堂

1. 目的

国際学生と英語でコミュニケーションを図りながら、異文化交流・相互理解を深めることを目的とする。

2. 実施内容

9月12日(火)・13日(水)の2日間にわたり、高校1年生の学年行事「グローバルキャンパス」を本校にて開催した。2015年度より始まったプログラムで、昨年度からはWWL事業協働機関である立命館アジア太平洋大学(以下APU)の国際学生を本校に招き実施している。

高校1年生は行事に向けて、4月から週に1コマ、グローバル探究の時間を使って論理的思考や表現法を学び、自己発信できる力を身に付けてきた。また、「SDGs17の目標」から選んだ1つの目標について、グループや各自で調べたことを学生とディスカッションできるように準備を重ねてきた。

今年度、APUからは17か国計32名の学生が来校した。1日目は、全体のオリエンテーション後、グループに分かれて英語で自己紹介や校内見学(学校紹介)を行い、交流を深めた。2日目は、午前中にファシリテーターの学生による「なぜ日本で学ぶのか」というテーマについてのプレゼンテーションや、各グループに分かれての「カルチャーショック体験」、「世界探検(母国の文化・生活)」の紹介等があり、午後からは生徒たちそれぞれが事前に準備した「SDGs17の目標」の中の1つの目標について、学生とディスカッションを行った。英語での発表に緊張をしながらも、一生懸命伝えることができ、お互いの発表を通してSDGsについて再認識したり、新しい発見をしたりして、学びを深めた。

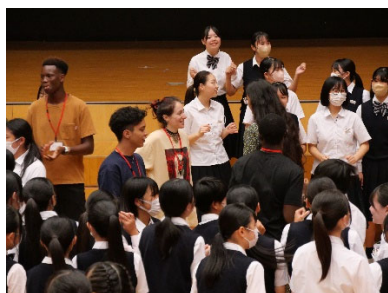
最後は各国の民族衣装の紹介(グローバルファッションショー)が行われた。日ごろ馴染みがない外国の文化も、実際に民族衣装を着ることで親近感が湧き、異文化理解が進んで生徒がみられた。

グローバルキャンパスを通して、英語や異文化多様性に対する理解、SDGsに関する認識を深め、これから将来に向けてのあり方をみつめる貴重な機会となった。

3. タイムスケジュール

★1日目						
時間	プログラム	内容	場所	進行	配時	形態
13:00~13:30	オリエンテーション	プログラムの概要説明 校長挨拶 代表生徒挨拶 APUリーダーの母国の挨拶、出身国(場所)を紹介	講堂		30分	一斉
13:30~13:45	イントロダクション	メンバー紹介 ワークブック配布・ネームタグ作成	講堂		15分	一斉
13:45~14:30	アイスブレイキング活動	アイスブレイキングゲーム	講堂		45分	一斉
14:30~15:00	学校見学	APU留学生と交流しながら学校見学	講堂		30分	クラス・班毎
15:00~15:30	自由交流	APUリーダーと交流を深める	講堂		30分	クラス・班毎

★2日目						
時間	プログラム	内容	場所	進行	配時	形態
9:00～9:30	二日のプログラムの説明 アイスブレイキング活動		講堂		30分	クラス・ 班毎
9:30～10:00	APU リーダー代表による プレゼンテーション	「なぜ日本で学ぶのか-私の夢-」プレゼン テーションの後、質疑応答・意見交換	講堂		30分	クラス・ 班毎
10:00～10:15	休憩・移動				15分	クラス・ 班毎
10:15～10:45	カルチャーショック体験を紹 介	APU リーダーが日本で受けたカルチャー ショック体験	体育館		30分	クラス・ 班毎
10:45～11:00	休憩				15分	クラス・ 班毎
11:00～12:00	世界探検 (文化発表)	APU リーダーが自分の国の文化や生活を 紹介	体育館		60分	クラス・ 班毎
12:00～13:00	昼食				60分	クラス・ 班毎
13:00～14:30	ディスカッション	SDGsをテーマとした、「留学生」とのディス カッション	体育館		90分	クラス・ 班毎
14:30～15:30	グローバルタレントショー	APU リーダ・生徒たちの伝統的なダンス・ 歌・楽器演奏・特技などを披露	講堂		60分	クラス・ 班毎
15:30～15:40	修了式	APU リーダーからのメッセージ 写真のスライドショー	講堂		10分	一斉



4. アンケート結果

		肯定的意見		否定的意見	
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
自分とは異なる文化的背景をもつ人々と、一緒に活動することに違和感を感じない。	事前	49%	32%	16%	2%
	事後	60%	29%	9%	2%
	変化	11%	-3%	-7%	0%
海外で勉強（留学）してみたい。	事前	32%	25%	27%	16%
	事後	35%	32%	24%	9%
	変化	3%	7%	-3%	-7%
生活のいろいろな場面で、他の国との関わりが増えることにより、自分の可能性が広がると思う。	事前	55%	39%	5%	0%
	事後	70%	26%	3%	0%
	変化	15%	-13%	-2%	0%
英語が公用語化されても十分に能力を発揮できる。	事前	7%	16%	53%	24%
	事後	4%	22%	52%	22%
	変化	-3%	6%	-1%	-2%
世界中の人との交流の機会や情報を活かせるようになりたい。	事前	43%	48%	8%	1%
	事後	55%	38%	7%	1%
	変化	12%	-10%	-1%	0%
外国の人々とのコミュニケーションに興味がある。	事前	36%	43%	17%	4%
	事後	51%	36%	11%	2%
	変化	15%	-7%	-6%	-2%
外国の人々と一緒に学びたい。	事前	33%	46%	17%	4%
	事後	44%	42%	13%	1%
	変化	11%	-4%	-4%	-3%
外国のことについて知識や理解を深めることは、自分の可能性を広げることにつながると思う。	事前	56%	42%	2%	1%
	事後	68%	30%	2%	0%
	変化	12%	-12%	0%	-1%
グローバル化が進展することは、自国の発展や豊かさにつながると思う。	事前	58%	40%	2%	0%
	事後	63%	36%	1%	0%
	変化	5%	-4%	-1%	0%
外国について知識を深めることは大切だ。	事前	70%	28%	2%	1%
	事後	76%	22%	1%	0%
	変化	6%	-6%	-1%	-1%
外国に関する知識や理解を深めることと同様に、自国に関する知識や理解を深めることは重要だと思う。	事前	69%	29%	2%	0%
	事後	73%	25%	2%	0%
	変化	4%	-4%	0%	0%
自国や郷里を誇りに思う。	事前	60%	36%	4%	0%
	事後	63%	33%	4%	0%
	変化	3%	-3%	0%	0%
自国の文化や習慣などについて良く知っている。	事前	19%	54%	25%	1%
	事後	19%	58%	21%	2%
	変化	0%	4%	-4%	1%
英語ができなくても自分には全く問題ない。(選択肢注意)	事前	3%	14%	60%	24%
	事後	3%	12%	53%	33%
	変化	0%	-2%	-7%	9%
英語がもっとできるようになりたい。	事前	73%	24%	3%	0%
	事後	75%	23%	1%	0%
	変化	2%	-1%	-2%	0%
英語を母国語とする人のような英語を話せるようになりたい。	事前	57%	33%	10%	1%
	事後	55%	36%	7%	1%
	変化	-2%	3%	-3%	0%
英語の発音は大切だ。	事前	64%	32%	4%	0%
	事後	65%	33%	2%	0%
	変化	1%	1%	-2%	0%
クラスメイトの前で英語を話すのは恥ずかしい(選択肢注意)。	事前	17%	43%	31%	8%
	事後	15%	39%	36%	10%
	変化	-2%	-4%	5%	2%
自分の意見をはっきりと持っている。	事前	15%	45%	36%	4%
	事後	19%	47%	31%	3%
	変化	4%	2%	-5%	-1%
何にでも興味を持つほうだ。	事前	31%	40%	27%	2%
	事後	32%	46%	20%	2%
	変化	1%	6%	-7%	0%
すぐに行動に移さないと気がすまないほうだ。	事前	15%	39%	39%	7%
	事後	22%	35%	34%	9%
	変化	7%	-4%	-5%	2%
この研修(グローバルキャンパス)に意欲的に参加しようと思っている。(事前) 参加することができた(事後)	事前	43%	49%	6%	2%
	事後	55%	38%	6%	0%
	変化	12%	-11%	0%	-2%

グローバルキャンパスを行う事前と事後とでは、異文化を許容する態度や考え方、異文化に対する興味・関心、異文化を受け入れることで広がる自分自身の可能性や外国語学習に対してなど、肯定的に捉える割合が大幅に増えた。それだからこそ、反対に自国について改めて見直そうとする態度や考え方にも繋がったと思われる。

これからのグローバル社会を生き抜いていかなければならない生徒たちにとって、一つのきっかけではあったが、生徒たちの人間形成において大きな影響を与えた取り組みであったことは否めない。

IV-7	GI フィールドワーク Advance (海外FW) の開発と実施
2023. 10. 19 (木)～2023. 10. 24 (火)	拠点校、マレーシア、シンガポール

1. 目的

日頃の授業で培った英語を活用しながら、事業協働機関であるマレーシア工科大学での活動や現地での体験を通して異文化理解・多様性受容力を高める。

2. 内容

GI フィールドワーク Advance (以下海外FW) は、今年度もマレーシア・シンガポールへ4泊6日で実施した。本年度は、渡航先であるシンガポールの交通事情により、昨年度より1ヶ月遅くしての日程となった。実施の概要は以下の通りである。

2年4組 GI 3期生 第2回 GI 海外フィールドワーク 実施要領

1. 目的

- (1) 異国文化について海外でのリサーチやフィールドワークを通して知識や経験を深める。
- (2) 事業協働機関であるマレーシア工科大学 (UTM) でのディスカッション活動を通して、SDGs についての 知見を深めるとともに、国際交流の実践を行う。
- (3) 他民族国家であるマレーシア、シンガポールでの体験を通して国際的な視野を養い、異文化理解力と 多様性受容力を高める。
- (4) グループやクラス全体での活動を通して、GI クラス全体のチームワークを強化する。

2. 期間：令和5年10月19日(木)～10月24日(火) 4泊6日

3. 研修先：マレーシア・シンガポール

4. 主な内容：

(1) マレーシア (3泊)

- ①マレーシア工科大学での活動 (マレーシアのSDGs やUTMの研究についての学習)
- ②イスカンダルエリア・都市計画についての視察
- ③世界遺産マラッカ散策

(2) シンガポール (1泊)

- ①マーライオン公園 散策 (文化的スポット散策)
- ②市内フィールドワーク (グループ毎の研究テーマ)
- ③ユニバーサル・スタジオ・シンガポール (クラス内の親睦)

5. 参加人員：GI クラス 2年4組 30名

6. 引率者：手島 翼、長島 ミシェール、旅行会社添乗員・現地スタッフ

○1日目：10月19日(木)

時刻	スケジュール (場 所)	行程・備考
10:00	出 発 (福岡空港国際線)	福岡空港 出発 (SQ655 便)
15:00	シンガポール着 (チャンギ空港)	到着・降機
16:30	シンガポール出国・マレーシア入国	国境にてシンガポール出国・マレーシア入国
18:30	夕 食 (レストラン)	夕食 (中華料理)

10月19日(木)、2年GIクラス30名が福岡空港国際線に集合した。教頭先生より温かな激励を頂いた後、生徒は期待と不安を胸に、福岡空港を旅立った。福岡空港を出発したのち、約5時間のフライトを経て、シンガポール経由でマレーシアに無事入国。ほとんどの生徒は陸路での国境越えを初めて体験し、異国の地に来ていることを改めて実感している様子であった。生徒は夕食でマレー料理を堪能した後、翌日のマレーシア工科大学での活動に備えた。



福岡空港での出発式



シンガポール入国



マレーシア入国



夕食の様子

○2日目：10月20日(金)

時刻	スケジュール (場 所)	行程・備考
9:00	マレーシア工科大学	マレーシア工科大学 ①オリエンテーション ②アイスブレイク (SDGsクイズ) ③講義 (マレーシアのSDGsについて) ④昼食 (お弁当) ⑤ディスカッション ⑥UTM建築学部のVR研究について体験学習 ⑦キャンパスツアー・交流
15:00	イスカンダルエリア視察	コタ・イスカンダル見学 (州と連邦政府の合同庁舎)
17:30	夕食 (レストラン)	ホテル近くのレストランで夕食 (マレー料理)

海外FW2日目は、WWL事業協働機関であるマレーシア工科大学の訪問と、イスカンダルエリアの視察を実施した。マレーシア工科大学 (UTM) では、到着してすぐに、学生による温かい歓迎を受け、歓迎のセレモニー開催して頂いた。今回の活動テーマは「マレーシアと日本の SDGs についての取り組み」。セレモニーの後、SDGs クイズによる全員参加型のアイスブレイク、マレーシア工科大学の先生方による マレーシアの SDGs の現状についての講義、班に分かれての SDGs の分類に関するディスカッション、SDGs の取り組みについてマレーシアと日本の比較の発表など、多くの活動を全て英語でのコミュニケーションで取り組んだ。また、今回は特別に、建築学部の研究室にて、VR ラボの体験会にも参加させて頂いた。立体視と VR の複合技術など、大学での研究に生で触れることで、生徒たちも大変有意義な時間を過ごすことができた様子であった。

その後 UTM を出発し、マレーシア南端部ジョホール州のイスカンダルエリアを視察。今回は A 地

区（ジョホールバル都市部）とB地区（ヌサジャヤ地区）を中心に見学し、マレーシアの経済やその歴史について学んだ。また、コタ・イスカンダルでは州議事堂や州政府官庁を見学することができた。

ホテルへ戻る道中、現地のスーパーにて、生徒たち全員が個人で飲食物やお土産の購入を行った。品揃えや値段の違いなど、日本のスーパーと比較することで、現地の生活にも目を向ける良い機会となった。



UTM 見学



ディスカッションの様子



VR ラボ体験



コタ・イスカンダル見学

○ 3 日目：10 月 21 日（土）

時刻	スケジュール（場所）	行程・備考
11:15	世界遺産マラッカ散策	<ul style="list-style-type: none"> ・モスク見学 ・オランダ広場 ・中国寺院 ・セントポールの丘（セントポール教会） ・サンチャゴ砦 ・ジョンガストリート散策
19:30	夕食（フードコート）	ホテル近くのフードコートで夕食（各自で購入）

海外FW 3 日目は、マレーシアにある世界遺産の街マラッカを散策した。現在宿泊しているジョホールバルから北西に位置するマラッカは、マレー文化や中国文化に加え、長く統治の続いたポルトガル、オランダ、イギリスなどのヨーロッパ文化が合わさった独自の街並みが特徴の街である。2008 年には街全体が世界遺産に登録されており、モスクをはじめ、歴史的な建築物や文化的なスポットを多数見学することができた。今回の行程では、モスクの外観を見学した後、オランダ広場、中国寺院、セントポールの丘とセントポール教会、サンチャゴ砦などを視察しました。緑と建築物が両立したマレーシアらしい街並みを実感しながら、マレーシアの歴史的な背景を学ぶことができた。また、視察の最後に、ジョンカーストリートを各々で散策し、歴史的建築物をそのまま流用した店舗を見学しながら現地でのショッピングを体験した。ここでも、多数の文化が当然のように同居する、マレーシア独自の文化についても学ぶことができた。

夕食はホテル近くのフードコートで各自購入する形を取った。マラッカの散策が予定より長引いたため、滞在できる時間が非常に短くなってしまい、屋台などの見学を行う時間が殆ど設けられなかったのが残念であった。



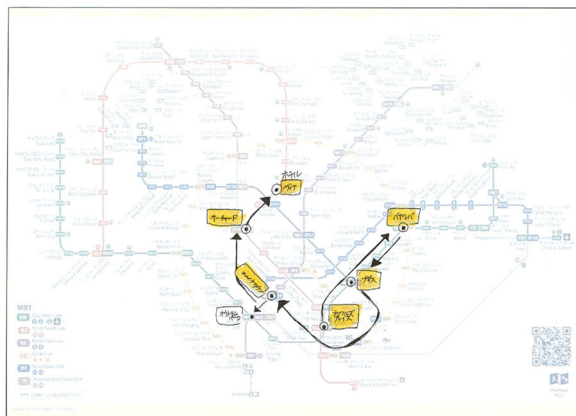
○ 4 日目：10 月 22 日(日)

時刻	スケジュール (場所)	行程・備考
10:00	マーライオン公園 シンガポール市内FW	・マーライオン公園散策 ・シンガポール市内で自作した行動計画に沿って活動 ▶ SDGs ▶ 文化的スポット ▶ インフラ ▶ 商業施設
20:00	夕食 (ホテル)	ホテルのレストランで夕食 (マレー料理)

海外FW 4 日目は、マレーシアを出国し、陸路で再びシンガポールに入国した。今回のフィールドワークで 2 度目の国境越えということもあり、事前の説明もほぼ必要なく、パスポートの審査や指紋認証などもスムーズに自力で対応することができていた。シンガポールに再入国後は、6 班に分かれての市内フィールドワークを実施。このフィールドワークは、生徒たち自身が学習目標を定め、シンガポール市内での行動計画を事前に立案し、生徒たちのみで現地を散策する活動である。SDGs や文化的名所のスポットを散策のチェックポイントとし、すべての生徒が現地の地下鉄を利用することをノルマとした。

シンガポール班別活動計画書 (第1回の清書)

期	氏名	班長	副班長	メンバー
1	10:00	マリンバ	マリンバ	マリンバ
2	10:48 ~13:00	ピト	ピト	ピト
3	13:30 ~15:25	ゾース	ゾース	ゾース
4	15:45 ~16:45	キョウタン	キョウタン	キョウタン
5				
6	17:00 ~17:50	ネキート	ネキート	ネキート
7	17:55 ~18:10	ノイタ	ノイタ	ノイタ



シンガポール市内散策の計画例

道中では、地図の見方に苦戦したり道に迷ったりもしたようだが、大きなトラブルもなく、すべての班が予定の時間通りの時間に宿泊ホテルまで帰着することができた。この活動を通して、今回のフィールドワークの目標の一つであるチームワークの向上も果たせたようである。



散策の様子 (生徒撮影)

ホテルのレストランで夕食

○ 5 日目 : 10 月 23 日 (月) ~ 6 日目 : 10 月 24 日 (火)

時刻	スケジュール (場 所)	行 程 ・ 備 考
10:00	USS 到着	ユニバーサル・スタジオ・シンガポール 訪問
19:15	ショー鑑賞(ガーデンバイザベイ)	ガーデンラブソディ (光と音楽のショー) 鑑賞
20:30	空港到着 (チャンギ空港)	チャンギ空港到着
1:20	出 発 (チャンギ空港)	チャンギ空港 出発 (SQ656便)
8:20	到 着 (福岡空港)	福岡空港 到着

海外 FW 5 日目は、生徒たちが待望したユニバーサル・スタジオ・シンガポール (USS) を訪問した。生徒たちは、日本のユニバーサル・スタジオ・ジャパン (USJ) と規模やサービスを比較したり、英語のガイドンスに従って各種アトラクションを楽しんだり、非常に充実した様子であった。

その後、ガーデンバイザベイの幻想的な光と音楽のショーを鑑賞後、帰国に向けてチャンギ空港へと移動した。空港に 5 時間以上滞在し、深夜 2 時前の帰国便に乗るというハードな日程であったが、殆どの生徒が最後まで元気よく自主的に行動することができていた。

10 月 24 日の午前 9 時頃に無事に帰国し、無事、全ての行程を終えた。シンガポールを出国する直前に体調不良者が数名出たが、最終的に誰ひとり脱落すること無く、大変充実した海外フィールドワークを経験することができた。

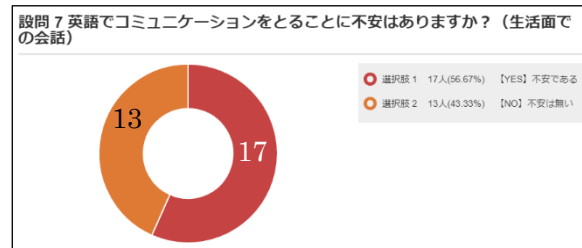
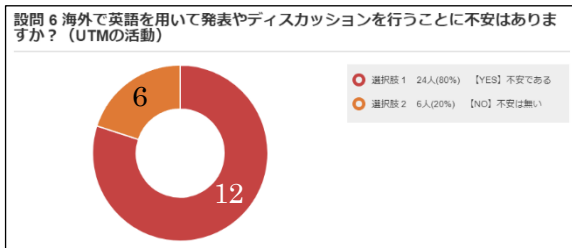
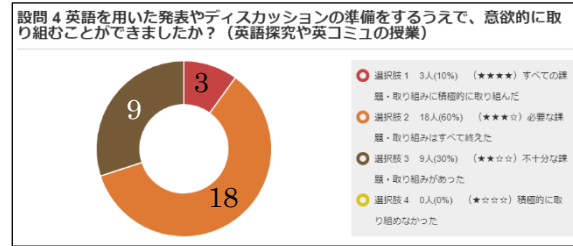
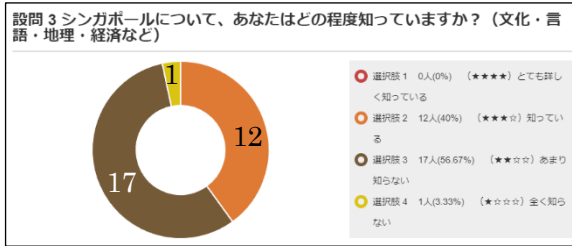
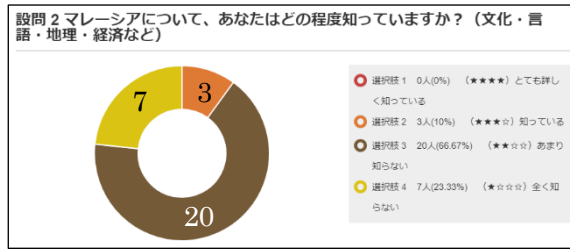
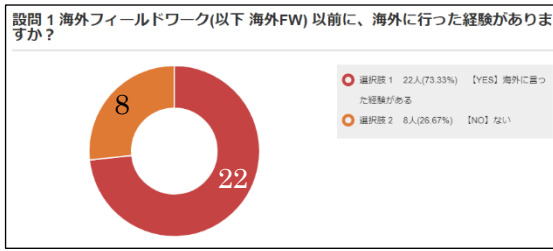
3. アンケート

海外 FW の実施にあたっては、参加生徒の帰国後の探究活動や国際交流、そして進路につながるように、事前に生徒自身が現地での研究活動を決定し、各所の散策やフィールドワークの中で活動を行うようにした。特にシンガポールでの市内 FW では、現地の地下鉄を利用することをノルマとしたため、約 8 時間に及ぶ活動時間を利用して、広範囲な活動を行った班も見られた。

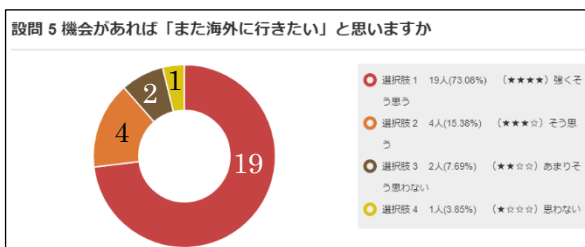
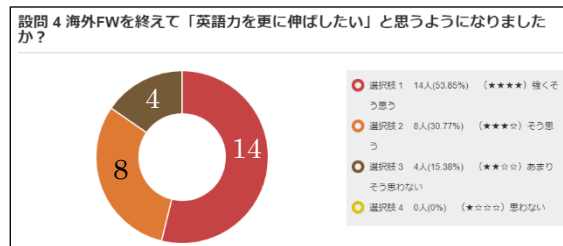
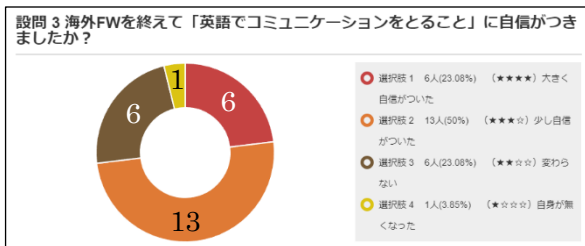
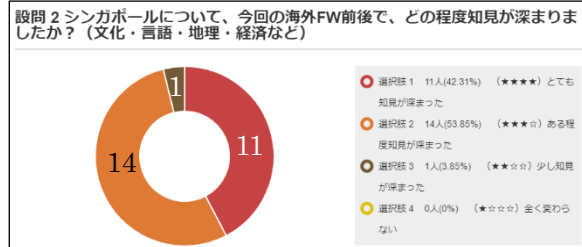
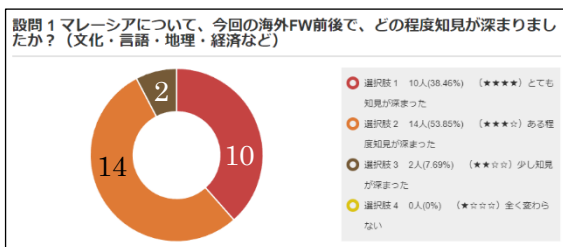
マレーシア工科大学では、事前に学習した SDGs の学びを現地でのディスカッションや発表で生かし、多くの経験を得ることができた。特に今年度は、UTM 建築学部の VR ラボの協力で、大学の研究内容に直に触れ、体験学習を行うことができたのは、海外進学を目指す生徒にとっても大きな刺激となったようである。

今回の海外 FW は、生徒が日本人としての自覚、異文化理解と多様性受容力などを含めた国際的なコミュニケーション能力を伸ばす絶好の機会となった。帰国後も、生徒達が海外の異なる文化に触れ、喜びや苦労を経験することで、大きく成長することを期待したい。

【参考資料① 海外FW 事前アンケート】



【参考資料② 海外FW 事後アンケート】



【参考資料③ 海外FW 生徒の振り返り（一部抜粋）】

- ・マレーシア、シンガポールどちらも多民族国家で様々な言語を話す人が多く、日本人だと分かると日本語を喋ってきたりする人がとても多くいました。色んな民族がいるからこそ多様性にとっても理解ある国だということを理解しました。人がとにかく暖かい人たちでとても居心地が良かったです。
- ・GI 留学（カナダ）した時の感覚が戻ってきて懐かしい気持ちになりました、やっぱり英語は実際に使うことが大切だなと思います。
- ・UTM で、現地の学生とコミュニケーションをすることで、もっと英語力に自信がついた気がします。今回のFW で、現地に行ってからしか分からないことが沢山あることを知れました。今後も、海外のことについても学ぶのであれば、直接現地に行くことができるようになりたいです。
- ・マレーシアの人やシンガポールの方は勝手に少し冷たい人だと思っていたけどとても優しく対応してくれて優しい方達であると感じました。カナダ留学では、留学期間中ホストファミリーの方が注文してくれたことがほとんどだったけれど、今回は自分で全て注文したり買い物したりして英語で買い物をするという敬遠を得ることが出来ました。
- ・英語だけではなくマレー語も少し学べて、現地の人と交流をとれたことでより現地に馴染めた気がします。今回の海外FW では、道が分からなかった時など、積極的に人に聞き頼ることができました。自分たちで調べてもやはり分からないことだらけなので、現地の人に聞くことが一番分かりやすく、交流もすることが出来るのでいい経験になったと思います。

IV-8	GI スキルアップセミナーの開発・実践① (GI アン트レプレナーシップ講座)
2023. 12. 7 (木) / 1. 25 (木) 10:00~12:00	拠点校 : AL ルーム

1. 目的

起業家精神を学び、ワークショップを通してグローバル・イノベーターとして必要な企画力や創造力、調和力等を身につける。

2. 内容

高校 1 年の GI クラスの生徒を対象としてアントレプレナーシップ講座を実施した。今年度は、事業協働機関である西部ガスグループ SG インキュベート株式会社と株式会社 F Ventures のご協力のもと、12 月と 1 月の 2 回実施した。

[講師] SG インキュベート株式会社 代表取締役 今長谷 大助氏
F Ventures 代表パートナー 両角 将太氏 ほか数名

[テーマ] 第 1 回「起業・投資とは何か」
第 2 回「中村学園版 mini TORYUMON」

第 1 回の講座において生徒たちは、起業家ならではの視点から投資と起業についての講義を受けた。また、ワークショップでは、生徒たちが普段の生活の中で気づいた課題を挙げ、グループ内で共有していく活動を通して、身近な生活の中に起業のアイデアがあることを学んだ。活動を通して生徒たちは活発にアイデアや意見を出しあい、議論を行うことで、多くの生徒が起業に対して興味を持つに至った。

第 2 回の講座では中村学園版 mini TORYUMON を行った。生徒たちは第 1 回の講座のワークショップの中で挙げた課題をもとに、課題を解決するためのアイデアをまとめ、ピッチコンテストの形式で発表を行った。ピッチの事前準備では、下の事業アイデア提案書を用いて身近にある課題やターゲットをしばり、どのようなアイデアを提案するかを議論させた。ピッチでは、各グループとも工夫をこらしたアイデアを提案した。生徒たちは、日常の生活の中で様々な疑問を持つことの重要性に気づくことができた。

考えた人：

■アイデアタイトル（一言で表すと）

やさいクル

■そのアイデアの特徴（押しポイント）

- ・農家に感謝を伝えられる。
- ・指定の農家に肥料を寄付できる。
- ・フードロス解決に繋がる。
- ・肥料代節約。（農家は安く肥料を買える）
- ・寄付したお礼としてその農家から規格外野菜を買える。

■ターゲット（だれに届けたいのか）

農家、飲食店、各家庭

■ターゲットがもつ課題（不満・不便・不安等）

- ・余った食材が勿体無い（飲、家）
- ・肥料高い（農）



事業アイデア提案書

3. アンケート

[生徒アンケートの結果（一部抜粋）]

○事前アンケート：「起業」に興味や関心があるか。（回答数 37）

興味関心がある（13.16%）／どちらかといえば興味関心がある（28.95%）／
 どちらかといえば興味関心がない（26.32%）／興味関心がない（28.95%）

○事後アンケート：「起業」に対して関心が湧いたか。（回答数 36）

関心が湧いた（34.1%）／どちらかというに関心が湧いた（55.26%）
 どちらかというに関心が湧かなかった（5.26%）／関心が湧かなかった（5.26%）

○生徒の感想

- ・アントレプレナーシップ活動を通して身近な悩みって意外と多くて、それが気づかないところにいるんな起業家の方が実際に商品やシステムとしてたくさん導入しているということを知ることができました。また、チーム全員で一つのことに向かって活動するのは達成感があると改めて学べました。年齢を重ねてもこういう取り組みに目を向けてより良い社会の実現に向けて考えていきたいです。
- ・日頃の課題や改善点を考えるきっかけになりました。課題について考えていると普段は見えていない観点からも物事を捉えることができ、さまざまな問題を考えることができました。
- ・身近で困っていることや、もっとこうなったらいいなと思うものを考え、調べてみるとすでに既存しているものやアプリがたくさんあったので、世の中はすごいなと改めて思いました。またこれからは、色々なことに疑問を持って生活していこうと思いました。
- ・初めてピッチをしてみて、準備を含めとても楽しかったです。いろいろな角度から物事を見ることで、隠れていた問題点に気づけることを改めて実感しました。将来は起業したいと考えているので、もっと頭を柔らかくして、柔軟な考え方ができるようになりたいです。

- ・「最初は現時点である決まりやルールは変えられない、そもそもそういう考えを持っていなかったのですがこのような機会身近な「なんで？」を追求することで自分はもちろん人の役に立てるようなことが自分でもできるんだということがわかりました。また、アントレプレナーシップ講座を受けたことで会社の経営などに興味を持ち始めたので将来どんな形になったとしてもまず身近なことから考え、初心を忘れないようにしたいと思います。



ピッチの様子①



ピッチの様子②



ピッチの様子③

IV-9	中村学園大学・短期大学部の科目等履修生制度（AP）の活用
2023.9月～2024.1月	中村学園大学、オンライン

今年度で5年目となるAP（アドバンストプレイスメント）を拠点校および中村学園三陽高等学校の高校2年生の希望者を対象に実施した。中村学園では、中村学園大学・短期大学部の学生以外の者が開講される授業を履修する者を「科目等履修生」と称し、在學生と同じ授業科目を受講し、定期試験等によって学期末に成績評価することになっている。また、単位を取得した生徒が中村学園大学または同短期大学部に進学した場合は、習得単位として認定される仕組みとなっている。受講希望者は6月中旬に中村学園大学教務部に出願し、受講が決定すれば10月から開始される後学期の講座を受講することができる。

今年度はオンライン（オンデマンド、ライブ配信）と対面と複数の形式で受講した。受講者は拠点校からは34名で、各自1科目（2単位）を受講した。実際に生徒が受講した科目及び人数は次の通りである。

- ・歴史学1名、リーダーシップ論2名、博多学2名、哲学3名、データサイエンス1名、
- ・世界の教育2名、生物学2名、数理科学1名、心理学6名、食の科学12名、
- ・社会福祉とボランティア1名、芸術の世界1名

昨年度は希望者が5名だったところ、今年度は34名と大幅に増えた。大学側から23の講座を準備してもらい、多様な生徒の興味・関心に対応できるように対応してもらったことが参加者の象につながったと考えられる。高大接続の取り組みとして内容の充実とともに、実施時期の再検討も行っていきたい。

IV-10	中村学園大学・短期大学部の学部・学科説明会	
2023. 5. 19(金)～2023. 10. 21 (土)		拠点校、中村学園大学、オンライン

拠点校の併設校でもあり、WWL 事業の事業協働機関でもある中村学園大学・短期大学部の説明会を拠点校の生徒・保護者を対象として実施した。開催日程および内容は次の通りである。

実施日	対象	内容
5月19日(金)	高校1年生徒	学校見学会
5月20日(土)	高校3年生徒・保護者	入試説明会
10月3日(火)	高校3年生徒・保護者	出願説明会
10月21日(土)	高校1年生徒	模擬講義

IV-11	立命館アジア太平洋大学 (APU) 学校説明会	
2022. 8. 2 (水) 15:30～16:30		オンライン開催

本校と連携協定を締結している立命館アジア太平洋大学の説明会を令和5年8月2日にオンラインで開催した。中学・高校生徒及び保護者を対象として生徒・保護者あわせて29名が参加した。会では個別相談も行った。

IV-12	ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ (KCC) 学校説明会	
2023. 6. 16(金) 16:20～17:00		拠点校：視聴覚室

事業協働機関であるハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ (以下 KCC) の学校説明会を6月16日(金)に拠点校で実施した。生徒・保護者合計16名が参加した。内容としては下記の通り。

- (1) 学校紹介
- (2) 教育プログラム(授業内容、ハワイ大学・中村学園大学への編入等)
- (3) 入試システム
- (4) 学費
- (5) 質疑応答

生徒・保護者からは特に生活費や入試の仕組み、現地の治安や生活の様子などについて細かな情報を求める質問が多かった。拠点校や事業協働機関である中村学園大学との接続教育プログラムや留学の環境としての充実さについて理解を深める機会となった。

V-(i)-1	「グローバル探究」の開発と実施	
	通年	拠点校（教育開発部）

1. 目的

次の5点を目的に実施している。

- (1) 主体的に課題解決に取り組む姿勢を養う。
- (2) 自分の可能性を信じ粘り強く努力することで、自己の能力が発達し、持続可能な社会の実現につながるマインドセットを整える。
- (3) 得られた知識を活用しながら様々な手法を試行し、失敗の経験を生かして次の改善につなげ、答えのない問題にも諦めずに取り組む意欲や態度、忍耐力を育む。
- (4) 多様性受容力やコミュニケーション力を向上させ協働性を育む。
- (5) 一人ひとりが力を発揮する場を作ることで、自己肯定感を育むと同時に、他者を理解し尊重する態度を養う。

2. 実施内容

昨年度より学校設定教科「グローバル探究」が学年の全生徒を対象に開始された。この教科は、令和4年度入学生から学年進行で開設し、GIクラスのみが履修していた「GI探究」に換わり全クラスで実施する教科である。基本的には、「GI探究」の学習内容をベースとしながら、全クラスで実施が可能となるように改良と修正を加えて指導計画と内容を策定している。本年度は実施するにあたり昨年度の反省を生かしてプログラムを変更した。

【昨年度の反省】

- ・学習内容が多い：個人探究だけではなく、行事での課題学習にも時間が割かれた結果、当初予定していた食の4領域、日本や世界の食の課題、課題研究の基礎的な知識や技術を取り扱ったので教員の一方的な教授の機会が多かった
- ・探究の深まり不足：生徒にとって自身の関心や課題を掘り下げる時間が十分であったとは言い難い。細切れの学習に終始してしまった感が否めない。半年から1年間継続するような課題設定が必要である。

今年度は高校1年生も2年生も一年間自分が自由に設定したテーマについて調査・分析を行い、最終的にレポートをまとめるという活動に変更した。

高校1年生は初めての探究ということでこれまでの食のテーマを踏襲し、「○○（自分の好きなこと、興味があること）×『食べる』」というテーマで探究活動を行った。

高校2年生はより生徒の自主性を重んじるために食というテーマに限定しなかった（引き続き食をテーマにした生徒も多数いる）。「○○（自分の好きな、興味があること）が『だれかのためにならないか』」というテーマで課題探究を行った。

以下、高1・2の探究活動の年間のスケジュールと活動概要である。

(1) 高1探究スケジュール

月	探究内容	活動
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・探究とは ・グループワークの進め方 	探究活動の意義や、グループワークの意義を学んだ。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ設定 	書籍やwebサイトを活用し、自分が興味を持っていることをリストアップする。

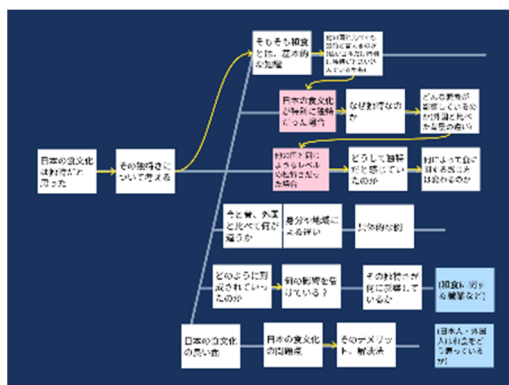
6月	・テーマ設定	自分の興味があるものから探究したいテーマを選ぶ。
7月	※グローバルキャンパスの準備	9月のグローバルキャンパスの班決め等を行った。
8月	※グローバルキャンパスの準備	グローバルキャンパスのディスカッションの課題に取り組んだ
9月	※グローバルキャンパス ・テーマの絞り込み	・グローバルキャンパス実施。 ・探究テーマをクラスで共有した。
10月	・リサーチクエスションを導く	・探究テーマの中から気になる「問い」を立てた。
11月	・調査/実験について	・リサーチクエスションを調べる手段(文献調査やアンケートなど)を考えた。
12月	※「食のサミット」について 事前指導	「食のサミット」で行うディスカッションの準備を行った。
1月	・調査/実験	・調査や実験等を行った。
2月	・調査結果をまとめる	・調査結果を一枚のレポートにまとめた。

【活動概要】

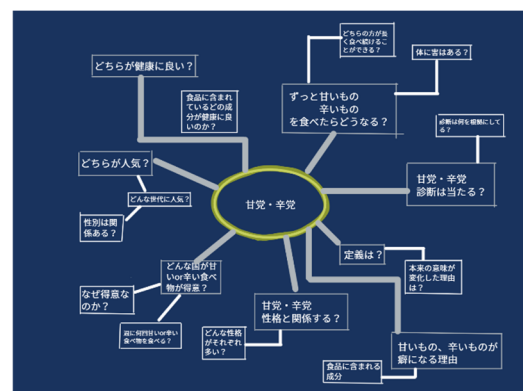
「○○(自分の好きなこと、興味があること) × 『食べる』」をテーマに、主に文献調査に主眼を置いて探究活動を行った。一学期はテーマ決めに時間を割き、9月のグローバルキャンパスの準備・実践を間に挟んだ後、実際に調査を行った。書籍やwebページを調べて、気になったことを適宜メモ(引用)して記録をとり、最終的に今年度の取り組みとしてレポートにまとめた。

探究活動の基本は文献調査であり、引用や参考文献等の記録といった、「探究の下準備」に力を割いた。探究を行う上でテーマ決めが一番時間を要し、一度決めても何度もテーマが変わる生徒がいた。テーマや問いがなかなか見つからないことは当たり前であり、悩むことがある意味では「探究の本質」である。

探究活動の全体の流れや、調査の手段を学んだという点では1年生としての活動は十分である。来年度は調査を続けながら、問いをさらに深め、「自分だけの探究成果」にたどりつけるよう取り組んでもらいたい。



テーマ設定・リサーチクエスションの例①



テーマ設定・リサーチクエスションの例②

1.K popアイドルX食

1年1組7番 名前 大島慧英

2.キーワード
K pop アイドル 思春期 極め スタイル

3.研究しようと思った理由
最近kpopに興味を持ってアイドルはどやって体型を維持しているのか、食習慣からどうじゃないかと思ったから

4.リサーチクエスト
Kpopアイドルはなぜスタイルがいいのか？
所属している事務所から何かの食習慣があるのか？
食べるものによって何か問題が生じるのか？
どのような食事によってアイドルのスタイルが保たれているのか？

5.あなたの研究が誰かの、何かの助けにならないか
自分の体型に敏感な若い世代
実際にアイドルになるべくしているような食事の方法を知り、健康的に理想的な体型を維持するための助けになる

6.収集した研究ピース

7.ピースの収集によって新しくわかったこと、疑問に思ったこと
アイドルのスタイル維持の方法をさぐり、食事のメニュー、食習慣が関係していた。
栄養など考えられていて健康だった。

8.今後の研究でつきまわりたいこと、新しく設定したいテーマや問い
男性アイドルと女性アイドルの食習慣は違うのか
今回調べた食事と一緒に運動してみたいと思った

9.その他記録として残しておきたいこと(読んだり、参考にすべき書籍やwebページなど)
※必要なければ書かなくて結構です。

小レポートの例①

**1.タイトル
「食」がなぜ怖くなったのか**

1年1組16番 名前 中村美純

2.キーワード
摂食障害、極度症、ストレス、周りのケア、健康的な食事

3.研究しようと思った理由
好きなアイドルが摂食障害で活動休止したため。

4.リサーチクエスト
摂食障害の症状とは、原因はストレスだけなのか、後遺症などはあるのか、摂食にならぬようにするにはどうしたらよいか

5.あなたの研究が誰かの、何かの助けにならないか
摂食障害に悩んでいる人、周りに摂食障害の人がいる人に役立つかもしれない

6.収集した研究ピース

7.ピースの収集によって新しくわかったこと、疑問に思ったこと
摂食障害は自分から気づかずに、疑問に思っただけでなく、周囲に気づかれないでいる人がいるのか、摂食症の主な原因であるストレスを避ける方法を知りたいと思った。

8.今後の研究でつきまわりたいこと、新しく設定したいテーマや問い
摂食症にならないで済む方法はないか、健康的に食べられるようになるか、摂食症の主な原因であるストレスを避ける方法を知りたいと思った。

9.その他記録として残しておきたいこと(読んだり、参考にすべき書籍やwebページなど)
※必要なければ書かなくて結構です。

小レポートの例②

(2) 高2 探究スケジュール

日程	探究内容	活動
4月	自分の興味・関心を知る	書籍やwebサイトを活用し、自分が興味を持っていることをリストアップする。
5月	興味・関心を深める	自分の興味があるものから探究したいテーマを選ぶ。
6月	探究テーマの設定・リサーチクエスト	・探究テーマをクラスで共有した。 ・探究テーマの中から気になる「問い」を立てた。
7月	探究計画書の作成	・これまでの活動をまとめ、リサーチクエストを調べる手段(文献調査やアンケートなど)を考えた。
8月	探究計画書の作成	同上
9月	計画書の発表、共有	・クラス内で計画書を発表しあい、共有した。
10月	調査/実験の準備	・調査や実験等を行った。
11月	調査/実験とまとめ	・調査や実験等のまとめを行い、周りの生徒と共有した。
12月	※「食のサミット」について 事前指導	「食のサミット」で行うディスカッションの準備を行った。
1月	探究の成果物の作成	・調査結果を一枚のレポートにまとめた。
2月	探究の成果物の作成	・引き続き、調査結果を一枚のレポートにまとめた。

3. 考察と今後の展望

今年度より生徒の関心や興味に基づいた自由な探究を行ったが、様々な課題が浮き彫りになった。以下いくつかの問題点や改善のアイデアを列挙する。

- ・テーマの設定に時間がかかる。そもそもテーマを挙げるのが困難な生徒もいる。
- ・テーマや問いはどんどん変わっていいと思う。問題は時間がたくさん必要で、スケジューリングが難しくなる点である。
- ・文献の調査を呼び掛けても、webサイトのコピー&ペーストに終始する生徒もいる。
- ・文献の扱い方、引用の仕方等をもっと詳しく、徹底させた方が大学に行っても役に立つのではないかな。
- ・デジタル機器の扱いが苦手な生徒もいるので、機器の操作の時間が必要である。
- ・調査・分析をするのはよいが、もっと発表の機会を増やしていった方が、生徒同士切磋琢磨するのではないかな。
- ・教員が生徒の疑問に対して、答えを教えるのではなく、答えを導く方法を教える（ファシリテーション）の必要性があるのではないかな。

探究活動の手順といったことだけではなく、環境面や目的意識、教員の立ち位置など、いろんな角度の課題が露見した。これも従来の教科指導ではなく、探究活動ならではの課題であろう。探究活動は答えがないうえ、正式な手順やゴール設定も定まっていないため、課題の多くが「生徒—生徒間」「生徒—教員間」「教員—教員間」のコミュニケーション不足に関わっている。教員研修や学年、校務分掌などの組織的な取り組み方で改善する余地はある。拠点校を挙げて取り組んでいきたい。

V-(i)-2	GI 探究の開発・実践(2年)	
通年	拠点校：2年GIクラス	

令和5年度の2年次ではGIクラスに「グローバル探究」としての単位を2単位割り当てており、他クラスで実施されている「グローバル探究」とは別枠の活動として実施した。また、昨年度は放課後の課外枠で実施されていた「英語探究」が、本年度は正課の単位として割り当てられており、本年度のGIクラス2年生では試験的に「グローバル探究」と「英語探究」を連続3コマの授業として取り扱うことで、より集中的な探究活動を行えるよう試みた。

1. 前年度3月の活動の振り返りとGI活動報告会（グローバル探究）[4月～6月]

昨年度の3学期は、本クラスはGI留学としてカナダ留学に参加した生徒と、そうでない生徒で別々の活動を行っている。本年度の最初の探究活動として、それらの昨年度末の活動について、生徒間で情報共有を行うと共に、振り返りの活動を実施した。本年度は「GI活動報告会」と題して、個別ブース形式で成果を発表するイベントを実施し、聴衆としてGIクラスの高校1年生にも参加してもらった。前半に行われた全体会では、GI留学に参加した生徒が、カナダで得た学びについてプレゼンテーションし、現地での探究活動や、異国の文化体験などについて発表した。後半では各活動内容の単位でグループを作り個別ブース形式でのプレゼンテーション会を実施した。GI留学以外にもボランティア活動、文化祭、連携校実施のイベント参加など、GIクラスの一員として個々で取り組んだ活動についての発表を行った。



GI活動報告会の様子
(全体会・個別ブース形式でのプレゼンテーション)

2. ギタンジャリ・ラオ氏による遠隔講演（英語探究）[4月～5月]

英語探究の一環として、世界が注目する若き科学者として有名なギタンジャリ・ラオ氏(当時17歳)による遠隔講演をGIクラスの2年対象に実施して頂いた。ギタンジャリ・ラオ氏は2020年に米タイム誌初の「キッド・オブ・ザ・イヤー（今年の子ども）」に選ばれた当時15歳で選ばれた人物である。11歳の時に発明した水道水から鉛を検出する装置「テティス」をはじめ、いじめに使われる可能性のある単語を送信前に書きかえるように提案するネットいじめ予防アプリ「カインドリー」、鎮痛薬オピオイド依存症の早期診断装置「エピオーネ」などを開発している。今回のイベントでは、それらの身の回りの世界から問題を発見し、問題を解決するためのイノベーションについて、熱心な講演を頂いている。当然ながら英語のみでの講演となったが、質疑応答の時間では、本校生徒も積極的にコミュニケーションを取ることができていた。

3. ヒューマンライブラリ（グローバル探究・英語探究）[6月・7月]

ヒューマンライブラリとは、多様な背景を持つ人々が「人間の本」として自らの経験や知識を、他社と共有する取り組みのことである。本年度のGIクラス2年では本校の教員やその関係者に「人間の本」として参加してもらい、実演を交えることでヒューマンライブラリとはどのようなものかを生徒達に理解させるとともに、将来の人生設計についてグループワークや考察を行わせた。

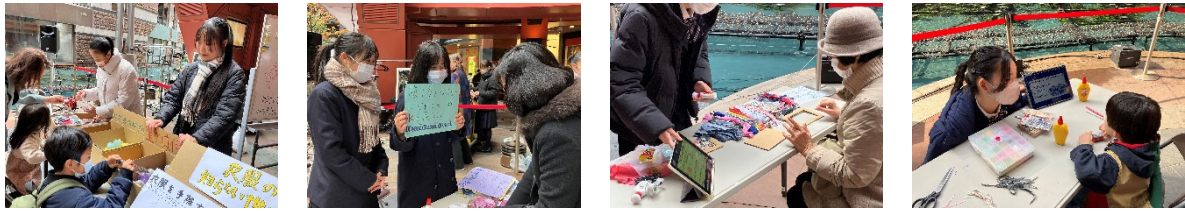
4. 海外FWの事前学習および実施（グローバル探究・英語探究）[5月～10月]

昨年度に引き続き、本年度もマレーシア・シンガポールでの4泊6日の海外フィールドワークを実施している。それに向けての準備活動を、グローバル探究と英語探究の時間を合わせて、約半年間実施した。

5月	・SDGsについての学びと振り返り ・海外におけるSDGsについて
6月	・日本へ来訪する観光客についてのディスカッション (来訪客に向けてやるべきこと、やってはいけないこととは?)
7月	・チームワーク活動(集団活動についてのディベート) ・マレーシア、シンガポールについての学習(地理、歴史、文化)
9月	・海外FWの現地情報についての調査活動(地理やインフラなど) ・マレーシアと日本の諸問題について(SDGs各項目の観点を比較) ・現地フィールドワーク活動の計画・立案活動
10月	・渡航に向けての最終準備 ・海外フィールドワークの振り返り(帰国後)

5. Blue Earth Project (GIクラス1年生・2年生の有志生徒による課外活動)[5月～12月]

Blue Earth Projectは「女子高生が社会を変える!」をキャッチフレーズに、札幌から沖縄までこれまで2千名以上の女子高校生が取り組んできた環境啓発活動である。毎年、NPO法人Blue Earth Projectのサポートの元、環境問題やSDGsに対して生徒自身が身近なアクションを考えてイベント等で発信を行っている。昨年度に引き続き、本年度もGIクラス1年生・2年生の有志生徒でグループを作り、計51名の参加で約半年間の活動を行った。本年度のテーマは「衣服と環境問題」とし、衣服の製造に対して間接的に大量の水が消費されている問題について学ぶ、エコレクチャを月に1回放課後に実施した。本年度はGIクラスの2年生は22名が有志として参加。外部施設での啓発イベントの開催を目標とし、約半年間準備活動を行った。最終的には12月にキャナルシティ博多(福岡市博多区の複合商業施設)にて1日限定のイベントブースを立ち上げ、同施設に来場している子ども達を中心に、水と衣服に関わる環境問題の啓発活動を行った。



キャナルシティ博多でのイベントブースの様子
 (同施設の来場者に対して水と衣服に関わる環境問題の啓発活動を実施)

6. 海外留学生の受け入れ [11月～1月]

本校では文部科学省の「アジア高校生架け橋プロジェクト」を通して毎年、海外留学生の受け入れを行っている。本クラスでは11月から1月末までの約3ヶ月間、スリランカ、モンゴル、ネパール、韓国から来日した4名の生徒を受け入れ、クラスの一員として学校生活を共にした。海外留学生の活動については項目 V-(ii)-2「留学生の受け入れ」を参照。

7. 3年次に向けたグループ探究の活動準備（グローバル探究） [1月～3月]

GIクラス3期生では、卒業までの最終課題として学外で探究活動を行う「グループ探究」の実施を計画している。GIクラス2年次3学期のグローバル探究の時間では、これらの活動を行うための準備活動を開始した。現時点では全5グループに分かれ、それぞれ別々の企業や団体と連携を行い、外部での探究活動を実施する予定である。

1月	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの編成 ・活動内容についての検討（企業や外部の団体との連携を含めた活動を考える）
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで連携する企業や団体への訪問など
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的活動内容の企画・立案（次年度から実際に活動を開始する）

V-(i)-3	GI 探究の開発・実践(3年)	
通年	3年GIクラス (AL ルーム)	

1. 活動の目的

(1) 自律した学習者の育成

論文作成・発表のプロセスを通して、レポートと論文の違いを理解し、社会問題への意識を高め、物事を批判的および多角的に捉える力を身につける。高等教育や社会において自ら課題を解決するための情報収集力や論理的思考、表現力等を身につけ、自立した学習者となる素地をつくる。

(2) 探究力の育成

GI 探究を通して、自分の興味と社会的・学術的課題が重なる分野を模索しながら、自身と向き合う力、社会問題と向き合う力、自分の進路と向き合う力を涵養し、探究力の基礎を身につける。

2. 活動の記録

4月17日(月)	課題論文作成①	論文作成の意義の理解、スケジュールの確認
4月21日(金)	課題論文(講座)	中村学園大学教員による論文作成の講義
4月24日(月)	課題論文作成②	論文テーマ(仮)と概要について
5月1日(月)	課題論文作成③	論文テーマ・概要・研究方法の検討および修正
5月8日(月)	課題論文作成④	論文テーマ・概要・研究方法の検討および修正
5月15日(月)	課題論文作成⑤	論文テーマ・概要・研究方法の検討および修正
5月22日(月)	課題論文作成⑥	論文執筆開始
5月29日(月)	課題論文作成⑦	論文執筆、本校教員による指導
6月5日(月)	課題論文作成⑧	論文執筆、本校教員による指導
6月12日(月)	課題論文作成⑨	論文執筆、本校教員による指導
6月19日(月)	課題論文作成⑩	論文執筆、本校教員による指導
6月28日(水)	課題論文(中間発表)	論文の中間発表および外部指導員による指導
7月28日(金)	課題論文プレゼンテーション	論文の発表および外部指導委員による指導
9月4日(月)	課題論文作成⑪	論文執筆、本校教員による指導
9月11日(月)	課題論文作成⑫	論文執筆、本校教員による指導
9月25日(月)	課題論文作成⑬	論文執筆、本校教員による指導
10月2日(月)	課題論文作成⑭	論文執筆、本校教員による指導
10月16日(月)	課題論文作成⑮	論文執筆、本校教員による指導
10月23日(月)	課題論文作成⑯	論文執筆、本校教員による指導
10月30日(月)	課題論文作成⑰	論文執筆、本校教員による指導
11月6日(月)	課題論文作成⑱	論文入力開始
11月13日(月)	課題論文作成⑲	論文入力・修正
11月27日(月)	課題論文作成⑳	論文入力・修正
12月4日(月)	課題論文作成㉑	論文完成

3. 担当者の考察

3年間の探究活動の集大成として、3年生GIクラス全員が論文作成に取り組んだ。本校の強みである「食」を切り口として、各生徒が自身でオリジナルのテーマを設定した。テーマは食と環境、経営、町おこし、衣服など多岐に渡り、改めて生徒の創造力の豊かさを感じられる機会となった。詳細は別頁の「GIプレゼンテーションの実施」に譲るが、複数の大学からの外部指導員との交流の中でフィードバックをもらい、論文を進めたり改善したりする経験は、大学進学後の卒業論文作成はもちろん、実社会でも研究テーマを持ち探求していく上で役立つ経験になった。

今後に向けて検討すべき点として、「食」というテーマに限定されずに自由に探究を行うことや、3年間を通して探究力や論文作成の基礎力（論理的思考力など）を養い、よりシステムティックなカリキュラムを構築・運用していくことが重要であろう。

V-(i)-4	英語探究の活動（1年）
毎週水曜日 16:20～17:10	拠点校：高校1年GI クラス教室

正課の授業外の活動として、毎週水曜日の放課後に英語探究の活動（課外授業）を実施している。この活動の中で生徒たちは、正課の授業で使用している教科書に登場するトピックを題材にしたプレゼンテーションや、英語での劇を行った。

[活動内容]

- ・ こどもたちにSDGsをわかりやすく伝えることのできる劇
- ・ タイからの留学生に向けた、福岡の紹介プレゼンテーション

V-(i)-5	英語探究の活動 (2年)
通年 (毎週火曜日 5 限目)	拠点校：高校2年GI クラス教室

1年次は放課後の課外枠で実施されていた「英語探究」が、2年次では正課の単位として割り当てられている。本年度のGI クラス2年生では試験的に「グローバル探究」と「英語探究」を連続3コマの授業として取り扱うことで、より集中的な探究活動を行えるように設定している。

英語探究単独で実施した学習活動については次の通り。

- ・「ANIME」をテーマにマインドマップの学習
- ・「ファッション」とSDGsについてグループで調査および発表
- ・「各国の水事情」をテーマにディスカッション

グローバル探究と合わせて教科横断で実施した活動については、前述の「V-(i)-2 GI 探究の開発・実践(2年)」を参照。

V-(i)-6	英語探究の活動 (3年)
通年 (週1回 2時間)	実施場所: AL ルーム

1. はじめに

GI クラス3年生は、高校入学後、台湾、韓国、リトアニアなど各国の高校生とのオンライン交流授業等を経験し、他国の文化や世界で取り組むべき課題などについて学んできた。また、1年次にはカナダ留学、2年次はGI クラス初となるマレーシアおよびシンガポールにおける海外フィールドワークを成功させた。特に、マレーシア工科大学においては、生徒1人1人が関心を持つ社会問題に関して、オリジナルのテーマを設定し、英語で探究のプレゼンテーションを行い、現地の大学の教員および学生にフィードバックをもらうという貴重な経験ができた。

2. 活動の目的

3年次では高校生活で培った英語力と社会問題への課題意識を生かすために、テキストで基礎の復習を行った後に、英語でディベートを行うことを主な活動とした。新学習指導要領において、高校英語は4技能の中で「話す」技能がさらに「やり取り」と「発表」に細分化され、5領域を総合的に扱うようになり、英語を使用してスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどのアウトプットを通して、生徒が社会に出た際に多様なコミュニケーションの場面に対応する能力を育成する必要がある。そして、グローバルイノベーターとしても、多様な背景を持つ人々と世界的な課題の解決に向けて取り組むうえで、英語でディベートを行う技能は必須のものである。そこで、活動の目的を以下のように定めた。

(1) 地球規模の課題に関して、リサーチクエスチョンを導き、仮説を立て、文献調査やアンケート調査を行い、考察を発表する能力を養う。特に、情報を適切に分析・活用する能力を育成する。

(2) 上記を通して学んだ内容を生かして、世界的な課題について英語でディベートを行うことで、世界の課題に対して自身の考えや対策などを英語で論理的に表現する力、協働力、コミュニケーション能力を養う。

3. 活動内容

(1) 4月～6月：英語ディベートのレディネスを整える

高校1・2年次に使用した「やさしい英語でSDGs」(合同出版)の復習を行うと同時に、3年次になって新たに考えることについて英語でリサーチ、プレゼンテーション、ディスカッションを行った。生徒が選んだテーマは、SDGsのNo.2 Zero Hunger(飢餓をゼロに)、SDGs Goal No.5 Gender Equality(ジェンダー平等を実現しよう)、No.12 Responsible Consumption and Production(つくる責任 つかう責任)、SDGs Goal No.13 Climate Action(気候変動に具体的な対策を)などを中心に広範囲にわたった。

(2) 6月～12月：英語ディベートを実践する

①活動の内容・進め方

授業の進め方については、基本的にJTEとALTのチームティーチングのスタイルであった。ディベ

ートのテーマ設定に関しては、学級生徒全員がテーマを考えて投票を行い、多くの生徒が関心を持つテーマについて議論する形を取った。以下は、実際に議論したテーマの一例である。

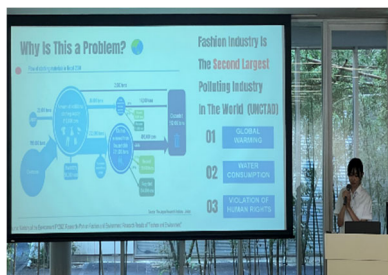
- Technology Debate Topics : Social media has improved human communication.
- Health Debate Topics : Smoking should be banned in all public places.
- Social and Political Issues : Climate change is the greatest threat facing humanity today.
- Education Debate Topics : LGBTQ education should be taught in school.

②活動の進め方

活動の形態については、学級を8チーム（各5名程度）に分けた。授業の2時間のうち、最初の1時間をテーマに関する情報の収集と自分のチーム意見の集約、および相手チームからの反論などの準備に当てた。残りの1時間に関しては、教室内の各エリアで同時に4試合を行う場合や、1つの試合を他の全チームが評価して勝敗をジャッジする場合などバリエーションを持たせた。

4. 担当者の考察

英語でのディベート活動について、12月の最後の授業で3年GIクラスの生徒にアンケートを取ったところ、「楽しかった」（76.3%）、「英語の力がついたと思う」（81.6%）、「社会問題に対する意識が高まった（86.8%）」という結果であった。活動に対して生徒の感想は概ね肯定的であったが、楽しいと思えなかった生徒も約4分の1いることから、3年間を通して英語でディベートをすることを楽しめる英語力を育成することや、英語を使いながら伸ばそうとするマインドセットを涵養すること、より生徒の興味関心や進路に訴求するテーマ設定やリサーチの在り方を検討する必要があるだろう。今後も改善を加えながら本活動を継続し、生徒の英語力の向上はもちろん、自分の意見に対して問いを立てる力を育成していきたい。また、国内外の学生とオンラインやリアルで共通のテーマについて議論する機会を拡充することで、協働力や異文化理解力、多様性受容力も養っていきたいと考える。



リサーチ&プレゼンテーション



ディベートの準備



ディベートの試合

V-(i)-7	GI スタートアップセミナーの開催	
2023. 4. 17(月)・5. 8(月)		拠点校：教室

1. 目的

グローバル・イノベーターに必要な心構えや思考方法をグループワークで考え、コミュニケーションを通してGI クラスの一員としての自覚を促すことを目的とする。昨年度に引き続き、拠点校にて本校職員で実施した。

2. 内容

グローバルリーダーとして必要な素養として、論理的に思考し・表現する能力が必要であるとし、「ロジカルシンキング」を学ぶ場として研修を実施した。3年間の探究科活動のベースとして位置づけ、課題を発見する力や想像力、他者とのコミュニケーション能力につながることを期して実施した。

第1回目は、論理的に筋道を立てて説明できる能力が探究には大切だと説き、「本質」と「具体性」の間を行き来しながら説明する技術を紹介した。抽象的な発言と具体的な発言を比較し、いかに自分のメッセージを相手に受け取りやすく説明できるかの重要性を説明した。論理的な説明の練習として、グループワークで「5W1H(Why, What, Who, When, Where, How)」を意識した話し方や、「PREP 法(Point, Reason, Example, Point)」を用いた説明を行わせた。

第2回目は、自分の考えを論理的にまとめ、表現する能力を育成しようと、思考の「可視化」する技術を紹介した。思考の整理やアウトプットにフレームワークの活用が有効であると説明し、「ロジック・ツリー」「マンダラノート」「ピラミッド・ストラクチャー」「ポジショニングマップ」を挙げた。第1回で学んだ「5W1H」「PREP 法」を踏まえた上で、例として「高校生での目標」についてロジック・ツリーを用いて作成させるグループワークを行った。

3. アンケート結果

[回答例]

- ・今日はPREP 法や5W1H を簡単で短い内容で使ったけど、プレゼンテーションやスピーチではもっと難しく長い内容になると思うので、そういった内容の時でも上手く手法を使えるようになりたいと思いました。
- ・相手に何かを伝える時には勘違いや誤りが生まれないようにするため、5W1H と PREP 法を意識していく事が大切だと学びました
- ・人と話すときは具体的なことを沢山言った方が誤解も生まないいいなと思いました。自分は大人数の前での発表やプレゼンテーションが苦手なので教わった方法を使ってみようと思いました。
- ・可視化することで解決法は何か、何をすべきかが明確になった。自分に合った整理の仕方ではプレゼンが上手くなるよう工夫したい。
- ・今回色々なツールとそれぞれの効果を知ることによってこれからプレゼンテーションでの場やテストの反省など多くの考えをまとめる機会に使う事ができると思いました。
- ・情報を整理したり、一つのことを深掘りしたりするには、多くの方法があると分かりました。これからの探究では、これらの方法を活用していきたいです。

4. 担当者の考察

生徒のアンケート結果からも、ロジカルシンキングの発想やフレームワークの活用を今後活用し、探究活動やプレゼンテーションだけでなく、日常の生活や学習面でも活用したいという意見が多く聞かれた。学校生活全般において、こうした論理的思考力を活かして、課外解決力や創造力を培い、イノベーターとして必要な能力につなげていってほしい。

V-(i)-8	GI プレゼンテーション (論文発表会) の実施
2023. 7. 28 (金)	AL ルーム、講義室 H、講義室 I

GI プレゼンテーションは、GI クラスの生徒が 3 年間の探究活動で培った探究力を発揮して取り組む課題研究の論文発表会である。本年度も、複数の大学から外部指導員を招いて、論文作成の指導を対面やメール、オンライン等を活用して行った。

1. 活動の目的

3 年次では、原則として GI 探究の時間にリサーチおよび論文作成を行ったため、活動の目的は以下の 2 点であり、GI 探究の目標とほぼ同じである。

(1) 自律した学習者の育成

論文作成・発表のプロセスを通して、レポートと論文の違いを理解し、社会問題への意識を高め、物事を批判的および多角的に捉える力を身につける。高等教育や社会において自ら課題を解決するための情報収集力や論理的思考、表現力等を身につけ、自立した学習者となる素地をつくる。

(2) 探究力の育成

論文作成を通して、自分の興味と社会的・学術的課題が重なる分野を模索しながら、自身と向き合う力、社会問題と向き合う力、自分の進路と向き合う力を涵養し、探究力の基礎を身につける。

2. 論文指導の方法・形態

論文指導に当たっては、基本的に GI 探究の授業 (週 1 回、2 時間) を配当し、4 月から 12 月に渡った。基本的には、本校の各教科から 1 名ずつ選ばれた教員 (合計 8 名) が、1 人 5 名程度の担当生徒の指導を受け持った。そして、4 月、6 月、7 月に計 3 回、外部指導委員から論文作成のポイント、作成中や暫定版の論文へのフィードバックをいただいた。

(1) 外部指導委員による指導 (第 1 回) : 4 月 21 日 (金) 6・7 校時 (AL ルーム)

第 1 回の指導では、7 月末に実施の GI 課題論文プレゼンテーションおよび最終的な論文作成に向けて、論文作成の手法について理解することを目的とした。中村学園大学より野口講師を招き、対面での講義や演習、質疑応答などを通して、生徒は論文のイメージが明確になり、具体的な論文作成方法について学ぶことができた。内容は、テーマ設定の仕方、研究背景、研究目的、研究方法、考察、今後の展望などの論文の基本的な枠組みや参考文献の引用の仕方など、実践的に役立つものであった。さらに、指導委員が生徒に質問する場面が多くインタラクティブな雰囲気で行われた点が功を奏し、事後アンケートではクラスの生徒の約 8 割が講義・演習に満足していた。

(2) 外部指導委員による指導 (第 2 回) : 6 月 28 日 (水) 6・7 校時 (AL ルーム、講義室 H・I)

第 2 回の指導では、GI 課題論文プレゼンテーションが 1 カ月後に控えたタイミングで行われ、作成中の論文の質の向上と生徒のつまずきの解消を主な目的とした。日程上の都合により数名の指導委員の方は参加できなかったが、4 名の大学教員が指導委員として参加した。3 年 GI クラスの生徒 38 名を論文のテーマやキーワードをもとに 4 つのグループに分けた。指導委員の配置は可能な限り専門分

野と生徒のテーマが近くなるようにグループを編成した。参加していただいた外部指導委員(敬称略)は次の表の通りである。

No.	指導委員名	所属	役職	専門分野
1	山下 浩之	岡山理科大学	准教授	理科教育
2	中島 義和	広島女学院大学	准教授	英米言語文化
3	寺澤 洋子	中村学園大学短期大学部	元教授	食物栄養
4	重橋 史郎	中村学園大学	准教授	児童教育

指導の手順としては、指導委員の紹介の後に生徒の4グループ(各9人程度、計38名)が4か所に分かれ、作成中の論文について3分程度で指導員とグループのメンバーに報告した後、質疑応答を5分程度行う形式であった。報告後の指導委員と生徒とのやり取りが白熱するケースが多く、生徒たちも興味津々で活動に取り組んでいた。各生徒が指導委員からその場で助言や改善点を指摘していただき、詳細なフィードバックを後日指導記録簿(指導カルテ)としてメールで送っていただいたことで、生徒のモチベーションも上がり、論文の方向性の軌道修正等がスムーズに進行した。また、論文指導にあたる本校教員も指導カルテを参考にして日々の指導を行った。

(3) GI 課題論文プレゼンテーション：7月28日(水)7校時(ALルーム、講義室H・I)

当日は7名の外部指導委員が来校され、3年GIクラスの生徒38名は3グループ・3会場に分かれて発表した。参加された外部指導委員(敬称略)は以下の通りである。

No.	指導者氏名	所属	役職
1	副島 雄児	九州大学	名誉教授
2	寺澤 洋子	中村学園大学短期大学部	元教授
3	山下 浩之	岡山理科大学	准教授
4	中島 義和	広島女学院大学	准教授
5	重橋 史郎	中村学園大学	准教授
6	桧垣 淳子	中村学園大学	准教授
7	野口 太輔	中村学園大学	講師

生徒の論文の発表タイトルは以下の通りである。

会場	AL ルーム
指導委員(敬称略)	副島 雄児、中島 義和、野口 太輔
探究科職員	上野、橋本
発表順・氏名	タイトル
1 池田 紗倉	高校生と集中力
2 甲斐 妃奈乃	「食」に用いられるプラスチックについて
3 永松 麻莉子	ベストな自分であるために

4	中村 衣麻	ハーブティーと高校生の生活
5	西村 まりな	オートミールはなぜ流行したのか
6	馬頭 花稟	モデルから学ぶ健康的な生活
7	平田 伊緒菜	食と経営
8	深町 美心	食感表現の世界比較
9	松永 舞音	食事と虫歯について
10	松村 いずみ	衣と食の関係性 Connection Between Clothes and Food
11	森瀬 积那	食と言語の関連
12	山川 陽菜	食と町おこし
13	龍 正子	海外で人気の日本料理

会場	講義室H
指導委員(敬称略)	寺澤 洋子、重橋 史朗
探究科職員	朝野、武宮
発表順・氏名	タイトル
1 石丸 舞莉	日本食と小学生の成長
2 井上 心結	食中毒の危険性
3 井上 めぐみ	学校給食によるフードロス
4 上山 結生	食と美容に関する若者の意識・行動調査
5 沖 菜々穂	共食・1人食の効果と対人関係
6 佐藤 由美	農業体験学習が高校生にどのような影響を与えたのか
7 田中 小春陽	食べると飲むの心理的“差”
8 花村 芽生	食品添加物の意識調査
9 松永 遥花	週一ベジタリアンの推奨とベジタリアン対応日本食レシピの考案
10 南出 萌衣子	非常食の可能性
11 宮本 美野李	綺麗になりたかったら腸を整えろ！！
12 吉田 朝陽	運動時の水分補給によるパフォーマンスの差
13 龍 佳奈美	冷凍保存と賞味期限

会場	講義室I
指導委員(敬称略)	山下 浩之、桧垣 淳子
探究科職員	横山、手島
発表順・氏名	タイトル
1 天野 さや	お前もマッチョにならないか？
2 池嶋 瑠花	気圧と聴覚が味覚に及ぼす影響
3 浦 陽万里	アニマルウェアと消費者意識
4 小島 菜々子	持続可能な農業へ
5 シュトロートホフ 茜	昆虫食を通じたグローバルな展望

6 鈴木 ことり	What makes meat, meat? なぜ人は肉に惹きつけられる?
7 濱久保 理子	食卓の彩りとイメージ
8 林 果穂	寒色による食欲の効果について ~青色は食欲増進?減退?~
9 古市 りせ	食と色彩について
10 水田 心音	美術館のカフェ
11 宮崎 愛弓	ダイエットで整える精神状態
12 小林 紗奈	もし全人類がヴィーガンになることを強制された世界になったら…
13 龍 佳奈美	冷凍保存と賞味期限

3. 担当者の考察

論文指導の成果として、外部指導員との交流により生徒のモチベーションの向上だけでなく、論文の質の向上のために具体的な助言をいただけたことが挙げられる。特に、第1回の指導の際には、多くの生徒の論文は、研究の目的、現状の問題点、調査・質問方法などが「抽象的」なものが多かった。外部指導委員より対面あるいは指導カルテの形でフィードバックをいただくことで、生徒の思考や表現の曖昧な部分が具体的になり、より論理的かつ興味深い論文へと改善するケースが多かった。

課題としては、論文指導の体系化されたシステム（カリキュラムや指導方法など）を構築することが肝要である。本校の指導担当教員の感想からも、実際の指導に最も苦勞した点はテーマの設定と研究手法、論文の執筆・添削指導の3点がほとんどであった。また、指導する教員自身が卒業論文や修士論文を執筆してから時間が経過していること、そして生徒に論文指導した経験が豊富な教員が少ないこと、教員の多忙な職務の中で論文指導のスキルアップの機会や時間的余裕がないことも大きな課題である。これらの課題を解消し、生徒の知的好奇心や探究心を刺激し、進路実現や社会生活にも寄与する質の高い論文指導ができる方法について、今後も検討していきたいと考える。



V-(i)-9	第1回GI講演（グローバル講演）	
2023. 4. 15（土） 10:40～12:00	拠点校：講堂	

1. 目的

地球規模の課題への関心や、課題解決への意欲・態度等を養うために専門家の講師による公演・講座を行う。

2. 実施内容

令和5年度入学生（高校1年生）を対象に、グローバル探究の授業の導入としてSDGs（持続可能な開発目標）をテーマとした講演会を実施した。講師として、ESD（持続可能な開発のための教育）の推進、コミュニティスクールを核とした持続可能な地域づくり、ユネスコスクール支援等が行われている福岡教育大学の石丸哲史教授をお招きした。

社会の授業等で漠然と「SDGs とは何か」を知っている生徒は多いが、それがどのように自分や身近なところに関わっているのかを理解している生徒はそう多くはない。そのため、実際に活動されている石丸教授の生の話を聞き、自分に何ができるのかを実感し、その後の探究活動に能動的に取り組むことを期待する。

講演は、世界や日本の各都市・地域を例に写真やデータをたくさん使い、分かりやすくご説明いただいたので、生徒たちも自分たちができるSDGsの取り組みについて考えを深めることができた。講演後は活発な質疑が行われ、生徒たちの関心の高さがうかがえた。

日 時： 令和5年4月15日（土） 10:40～12:00（3・4限目、講演・質疑応答を約70分）

会 場： 本校講堂

講 師： 石丸哲史 氏（福岡教育大学 教育学部 社会科教育研究ユニット教授）

内 容： グローバル教育・SDGs とは

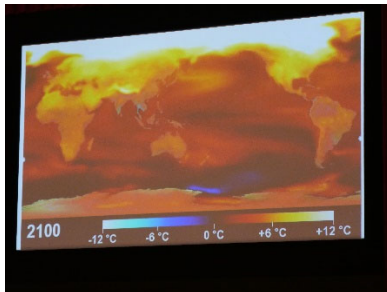
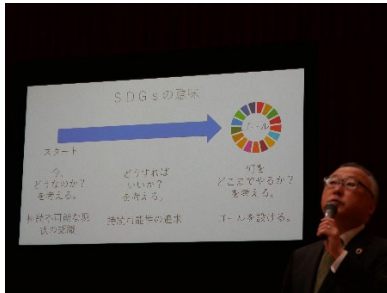
3. アンケート結果

[回答例]

- ・今の時代が昔と大きく変わっていることやこれからも変わっていくことを知って驚きました。グローバル探求の目的である、「変化が激しい時代を生きていく姿勢を身につけること」を達成できるように自分なりの工夫を考えて学習していくようにしたいです。
- ・今回の先生のお話で探究とは問題解決的な学習をし、物事の本質を見極めることだと分かりました。また、知識を活用し探究する「コンピテンシー」という新しい言葉も学ぶことができました。私はこの活動で文化と経済のつながりや日本と海外の様々な違いについて調べたいです。そして、①課題の設定②情報収集③分析④まとめという探究のサイクルを何度も繰り返し自分の興味関心を深めていきたいです。
- ・思考力や判断力、コミュニケーション能力などを向上させることで、コンピテンシー能力を向上させることにつながるということが分かりました。また、グローバル探求の時間では、問題意識や問題を発見する能力を身につけ、成長していきたいと思いました。
- ・自分たちは何気なく暮らしている生活の中にもたくさん問題があつて、その問題は自分たちの力で解決できないと思っていたけれど、自分たちが学んできた知識や技術を活用することで解決への道

筋が見えてくるのだなと思いました。そこで SDGs に関する問題にも自分たちが何をすべきなのかを一人一人が考えて行動すれば、必ずいい方向に向いていくのだなと思いました。

- グローバル探求では、自分が興味関心のあるテーマについて探究のサイクルによって繰り返していくことの大切さがわかりました。グローバル探求がどんなものであるか、この活動によってどんな力を身につけていくか、ということもわかりました。



V-(ii)-1	GI 留学プログラムの開発・実施	
	2024. 2. 1～4. 2	拠点校

本プログラムは、GI1 年生希望者を対象に実施するターム留学である。海外の現地校に通いながらホームステイを体験し、異文化理解や多様性受容力の深化を図るとともに、英語運用能力・コミュニケーション力を高めることを目的とする。今年度は3回目の実施となり、GI1 年生 37 名中 25 名 (68%) がカナダ・トロント近郊へ渡航した。概要は下記のとおりである。

[プログラム名]GI 留学

[対象]GI1 年生希望者 (37 名中 25 名参加)

[留学先]カナダ・トロント近郊

[留学期間]令和 6 年 2 月 1 日～4 月 2 日

[渡航までのスケジュール]

日程	内容
令和 5 年 7 月 1 日 (土)	募集説明会 (保護者・生徒対象)
令和 5 年 8 月 1 日 (火)	保護者説明会① (保護者、留学予定生徒対象)
令和 5 年 10 月 27 日 (金)	事前指導① (留学予定生徒対象/JTB 主催) 「訪問国を知る」
令和 5 年 11 月 27 日 (月)	事前指導② (GI1 年生対象/JTB 主催) 「異文化理解ワークショップ」 「コミュニケーションスキルアップワークショップ」
令和 5 年 12 月 8 日 (金)	・保護者説明会② (保護者、留学予定者対象) ・事前指導③ (留学予定者対象/JTB 主催) 「ホームステイワークショップ」
令和 6 年 1 月 20 日 (土)	保護者説明会③ (最終) (保護者、留学予定者対象)
令和 6 年 2 月 1 日 (木)	・福岡空港発 (14:15 NH256)～羽田空港着 (16:00) ・羽田空港発 (18:55 AC2)～トロント空港着 (2/2 (金) 7:20※日本時間)
令和 6 年 4 月 2 日 (火)	・トロント空港発 (4/2 (火) 2:15 AC1※日本時間)～ 羽田空港着 15:40 ・羽田空港発 (19:00 NH269)～福岡空港着 20:50

[留学プログラム行程表]

日次	月日 (曜)	地名	現地時刻	交通機関	スケジュール	食事
1	2024 年 2 / 0 1 (木)	福岡空港発 羽田空港着 羽田空港発	14:15 15:50 18:50	N H 2 5 6 A C 2	空船にて羽田空港へ移動 到着後、国内線から国際線へ移動 チェックイン後、出国審査へ 国際線でトロントへ	夕：機内
		トロント空港	17:15	専用車	到着後、専用車にて移動 ホストファミリーと合流後、各家庭へ	朝：機内 昼：機内 夕：ホームステイ
2	2024 年 2 / 0 2 (金)	トロント	午前 夕方		終日：ホストファミリーとお過ごしください。	朝：ホームステイ 昼：ホームステイ 夕：ホームステイ
3 ～ 4	2024 年 2 / 0 3 (土) ～ 2 / 0 4 (日)	トロント	終日		終日：ホストファミリーとお過ごしください。	朝：ホームステイ 昼：ホームステイ 夕：ホームステイ
5 ～ 60	2024 年 2 / 0 5 (月) ～ 3 / 3 0 (日)	トロント	終日		午前：教育プログラム 午後：教育プログラム 終了後、ホームステイ先へ帰宅	朝：ホームステイ 昼：ホームステイ 夕：ホームステイ
61	2024 年 4 / 1 (月)	トロント トロント空港 トロント発	09:30 11:00 13:40	ファミリー専用車 A C 1	ホストファミリーによる送迎で集合場所へ集合 専用車でトロント空港へ 到着後、チェックイン・出国手続きへ 空船にて成田へ	朝：ホームステイ
62	2024 年 4 / 2 (火)	羽田空港着 羽田空港発 福岡空港着	15:55 19:00 20:50	N H 2 6 9	羽田空港到着後、国内線へ乗り継ぎ 空船で福岡へ移動 福岡空港到着 お疲れ様でした	機内食 2 回

[検証]

本プログラムは令和2年度入学生より開始したが、初年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となり、令和3年度入学生が初めてのプログラム実施となった。今年度は3回目の実施となるが、留学希望者は年々増加しており、令和3年度41名中13名(30%) ➡令和4年度31名中18名(58%) ➡令和5年度37名中25名(68%)となっている。留学プログラムの設置がGIクラスのひとつの特徴となっており、入学理由に留学を挙げる生徒も多数いる。帰国後、2年生の一学期に開催する「留学成果報告会」ではGI1年生も全員参加をし、留学の様子を直接聞く機会を設けていることも留学促進の一助となっているとみられる。次年度以降も継続して行っていく予定である。

また、今年度は旅行会社主催による事前指導を計3回行い、渡航に向けた準備を整えた。3回目の「ホームステイワークショップ」は保護者も一緒に参加してもらい、現地での生活への理解を深める機会となった。今後は事前指導を校内で組織化・運営していくことが課題として挙げられる。

V-(ii)-2	留学生の受け入れ	
2023. 10. 13(金) ~2023. 10. 27(金)	拠点校	
2023. 11. 26(日)~2024. 3. 16(土)		

昨年までの、文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」で本校では5年間で15カ国・40名の留学生を受け入れた。目的である「日本とアジアの高校ネットワークの構築、互いの国に精通したリーダーの育成」の実現につながる活動をもとに、本年度は新たに、アジア諸国を中心にG7メンバー国からの高校生の架け橋となる人材の育成に資する取組を目的とした事業「アジア高校生架け橋プロジェクト+」として、10月13日より2週間、タイから9名、11月26日より4か国（韓国・スリランカ・ネパール・モンゴル）から4名を受け入れ、帰国までの期間を、通学をしながら寮生活を体験した。

タイからの9名は、短期ではあるが、高校1年の中高一貫クラスに5名、高校1年のGIクラスに4名所属し、学校授業や清掃等クラスの活動に参加、クラス以外にも中学生とのスポーツ交流や、マシンを使って、あかちゃん甚平製作などを行った。

4か国からの4名は、前半を高校2年のGIクラス、後半を高校1年のGIクラスに所属した。

所属したクラスでは、生徒と同様の授業を受け、週1コマの日本語レッスン、理科実験、調理実習、書道や華道・茶道、浴衣製作等多くのことに参加した。この活動は留学生にとって日本の文化や日本での習慣等の体験になり、日本文化についてより深い理解につながった。さらに関わった生徒にとっても英語でのコミュニケーションや様々な国の文化等を知ることができ、双方にとって異文化を共有するよい機会にもなった。

この4名は、冬期休暇中には、全校生徒からステイ先を募集し各家庭で、冬休み(12月20日~2024年1月5日)の間ホームステイを体験した。年末年始には各家庭で餅つきや初詣など伝統的な行事を体験し、たくさんの日本の文化にふれることができた。また留学生は自国の料理を作ってステイ先にふるまうなど、双方にとって異文化交流をするよい機会となった。

互いの国に精通したリーダー、架け橋となる人材の育成に資する取組を目的とした事業の実現につながる有意義な活動となった。

1. 概要

アジア高校生架け橋プロジェクト+の留学生受け入れ

[日程]①令和5年10月13日(金)~令和5年10月27日(金)

※タイ：9名

②令和5年11月26日(日)~令和6年3月16日(土)

※韓国・スリランカ・ネパール・モンゴル：4名

[受け入れ人数]13名

[地域]タイ・韓国・スリランカ・ネパール・モンゴル

[対象]①高校1年中高一貫クラスに5名、高校1年GIクラスに4名

②11月28日~高校2年GIクラスに、2月5日~高校1年GIクラスに4名

2. 実践の詳細

(1) 主な活動実績と内容

- ① 10/16(月) 職員朝礼にて紹介・挨拶、配属クラスにて授業参加開始
- ② 10/21(土) 中学生とスポーツ交流
- ③ 10/26(木) 職員朝礼にてお礼の挨拶
- ④ 11/27(月) 朝礼にて紹介挨拶
- ⑤ 11/28(火) 配属クラスにて授業参加開始
- ⑥ 11/29(水)～3/13(水) 日本語レッスン(週1コマ実施)

日常会話を中心に週1コマの日本語レッスン開始。授業に加えて、ホームワークとして問題集や漢字の書き取りに毎日取り組んだ。また、ホームステイで印象に残った事をまとめ日本語で発表する機会を設け、日本語が少しでも身につくよう指導した。その結果、多くの留学生が簡単な日本語でのコミュニケーションができるようになるなど、日本語の上達につながった。

- ⑦ 12月1日(金)～3月2日(金) 書道(週2コマ実施)

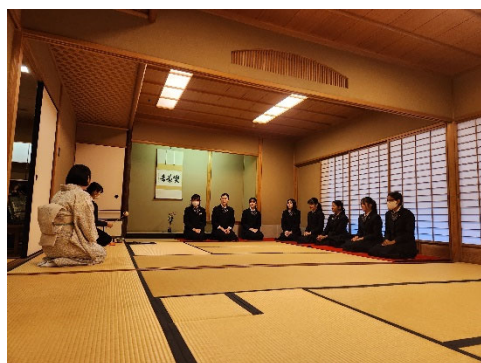
書道クラスの生徒と一緒に、掛け軸製作をおこなった。



- ⑧ 12/16(土) 高校2年クラスマッチ
- ⑨ 3/15(金) 職員朝礼にてお礼の挨拶

⑩ 茶道・華道体験

本校の授業で取り入れている茶道・華道など日本の伝統文化を体験。茶道では、表千家茶道部の部活動の時間に入り、顧問の指導で、和室の作法・お茶のたて方を学び、華道では、草月流の部活動の時間に、顧問の指導で作品を完成させた。



⑪調理実習

配属クラスと一緒に実習を行った。クリスマスケーキは、生地を焼くところまでは全生徒同じ行程で仕上げたが、最後の飾りつけは各自で考えた。ミートローフは、味が薄かったようで、各自スパイスを利かせた味にして食していた。どちらも意欲的に参加していた。



⑫浴衣製作・着付け体験

生地選びから裁断、縫製まで、留学生ひとりひとりで実施。初めてミシンを使う留学生も多く、戸惑いもあったが次第に慣れ全員が完成させた。また、完成した浴衣で、着付け、帯結び等の練習を行い、ほとんどの留学生が一人で着ることができるようになった。留学生にとって日本文化への興味関心が深まるよい機会となった。



(2) 活動実績

① 2023年10月13日(金)～2023年10月27日(金)

	月		火		水		木		金		土	
	月	1-4	1-3	1-4	1-3	1-4	1-3	1-4	1-3	1-4	1-3	1-4
1	HR	HR	生物	公共	英同	歴史	地理	数学	公共	地理	㊤ スポーツ 交流会	
2	GI探	GI探	地理	体育	言文	情報	現国	英同	体育	物理		
3	物理	現国	家庭	物理	情報	英同	言文	言文	数学	体育		
4	歴史	公共		英同	物理	数学	公共	現国	言文	数学		
5	被服 (甚平作成)		被服 (甚平作成)		被服 (甚平作成)		被服 (甚平作成)		被服 (甚平作成)			
6												
7												

2023年11月28日(火)～2024年2月1日(木)							2024年2月5日(月)～2024年3月15日(金)					
	月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土
1	L.H.R	英コ	日本語レッスン	英コ	世界史	総探	L.H.R	公共	日本語	数学	地理	総合探求
2	音楽	情報	国論	数学	書道		GI探求	体育	情報	英語(論表)	書道	
3	化学	家庭 (浴衣製作)	化学	世史		数学	現国	物理基礎	コミュ英	言語文化	英語(論表)	
4	数学		数学	英語	保健		公共	英語(論表)	数学	現国		数学
5	国論	英探	英コ	体育	英コ	数学	数学	保健	美術	生物基礎	家庭 (浴衣製作)	
6	道徳	GI探	世史	国論	数学		コミュ英	言語文化		地理		
7	世界史		英表	数学	体育		生物基礎	数学	言語文化	歴史	コミュ英	

※留学生と拠点校生徒との協働活動や学校行事への参加の詳細については、「V-1. 探究的な学び」を参照。

3. 転入生の受け入れ

拠点校では連携校である信男教育学園上海文来高校(中華人民共和国)より、平成30年度より転入生を受け入れている。昨年度受け入れた1名が、今年度3月3日に高校を卒業した。

V-(ii)-3	夏季海外研修合同説明会	
2023. 4. 28(金) 16:30~17:30	拠点校視聴覚室	

夏季海外研修は全校生徒を対象として、夏休み期間を利用し、課題解決型の探究的な学びや英語能力向上のための研修プログラムを提供した。旅行会社と拠点校の教育開発部および海外交流アドバイザーの両者間で予めプランを選定し、説明会では各社 10 分程度で保護者・生徒にプレゼンテーションを行った。以下は、研修プログラムの概要とした。

旅行会社	プラン名	地域	主要目的	日数
A 社	韓国異文化スタディーツアー	韓国	探究フィールドワーク	5 泊 6 日
	セブ島サマーチャレンジ	フィリピン	英会話力向上	14 泊 15 日
B 社	GLOBAL STUDY TOUR IN HAWAII	ハワイ	探究フィールドワーク	6 泊 8 日
	九州大学グローバル講師同行 調査研究を学ぶ in バンコク	タイ	探究フィールドワーク	4 泊 5 日

実施においては、最少催行人数に満たずにやむを得ず実施中止となったプログラムもあり、最終的には 3 名が B 社のハワイ研修に参加した。次年度以降も継続する予定であるが、より多くの生徒に研修の機会を提供できるよう、募集から運営の見直しを図る必要がある。

V-(iii)-1	「食のサミット」の開催
2023.12.14(木)～12.15(金)	拠点校 講堂・視聴覚室・大会議室・ オンライン (ZOOM)

今年度も「食のサミット」を拠点校にて開催した。今回は昨年度と同じく、国内連携校3校（中村学園三陽高等学校、京都先端科学大学附属高等学校、高知国際高等学校）が対面で、海外連携校2校（モンゴル：General Secondary School #84、ウズベキスタン：Academic Lyceum of Westminster University in Tashkent）がオンラインでの参加となった。なお、「食のサミット」は例年3月に実施していたが、本年度はWWL 報告会と入れ替える形で12月の実施に日程を変更している。その背景としては、本イベントはWWL 事業としての最も大きな活動の一つであり、今後の生徒達の活動となるアクションプランを決定する場でもある。それらの活動の進捗や成果をWWL 報告会で発表するため、サミットを前倒しにする形とした。

1. 「食のサミット」の目的と位置づけ

各国からの代表者とともに地球規模の課題「食」に関する解決策を議論し、結果をまとめ提言書を作成する。提言書を後日、国連WFP協会へ提出することで取り組み成果を世界へ発信する。

本校WWL 事業で最大の行事であり、国内外の中高生による「食」に関する課題解決策の策定と提言の機会とする。使用言語はすべて英語とする。（後半のGIクラス以外のディスカッションは日本語）

2. 日程

- ・食のサミット1日目（ステージ発表・サミット）：令和5年12月14日（木）10:00～16:00
- ・食のサミット2日目（共同宣言）：令和5年12月15日（金）10:00～11:00

3. テーマ

「食と健康 — 生涯を通じて現代における食と健康の課題に取り組む」

(Addressing today' s food and health challenges through the lifespan.)

4. 参加チーム

- ・食のサミット1日目（ステージ発表・サミット）
拠点校、中村学園三陽高等学校、京都先端科学大学附属高等学校、高知国際高等学校、
モンゴル84th 学校 (General Secondary School #84)、
ウズベキスタン ライシーアム高校 (Academic Lyceum of Westminster University in Tashkent)
※ 各学校から代表1チーム、計6チーム
- ・食のサミット2日目（共同宣言）
拠点校、中村学園三陽高等学校、京都先端科学大学附属高等学校、高知国際高等学校

5. サミットのスケジュール

時刻	内容〔場所〕	
1日目：12月14日（木） ※参加者：中学、高校1・2・3年本選出場チーム		
8:30	国内連携校チーム到着 各チームスタンバイ〔講堂〕 ※海外連携校（モンゴル・ウズベキスタン）は ZOOM での参加	
9:50	講堂準備完了	
10:00	「食」のサミット開会 《オープニング》	
10:15	①校長挨拶 ②生徒会長挨拶 ③来賓紹介 ④注意事項など	
	《代表チームプレゼン》	
10:20	○前半グループ3チーム（京都先端科学大附・ウズベキスタン・本校） 学校の紹介（1分）+主張プレゼン（4分）×3チーム	
10:35	休憩	
10:45	後半グループ3チーム（中村学園三陽・モンゴル・高知国際） 学校の紹介（1分）+主張プレゼン（4分）×3チーム	
11:00	休憩・移動	
	代表チーム (GIクラス代表・WWL連携校)	ディスカッション (高1・高2 全クラス)
11:20	※代表チームは視聴覚室に移動 ○視聴覚室の準備 食のサミット代表会議	11:20 ※生徒は割り振られた教室に移動 教室移動完了 ディスカッション活動
12:00	昼食〔カフェテリア〕・昼休み	※GI1年生が司会 ○アイスブレイク ○ディスカッション・意見交換
13:00	○全体会 → 分科会 → 全体会	○グループのまとめ・発表 (12:20分ころ終了)
16:00	サミット終了 国内連携校で宣言書作成	12:30 各自の教室に戻りHR・放課
16:00	リハーサル〔講堂〕	
17:00	リハーサル終了 連携校 解散	※ GI 1年生とGI 2年制の情報交換 (放課後のHR前に実施) ※ GI 2年制はディスカッションの内容を まとめ、翌日の「振り返り」の準備を行 う。

2日目：12月15日（金） ※参加者：中学、高校1・2・3年、本選出場チーム、	
9:00	国内連携校チーム到着後、スタンバイ〔講堂〕
9:50	スタンバイ完了
10:00	<u>《オープニング》</u> ○司会よりアナウンス、内容説明、注意事項など
10:05	<u>《アジア架け橋留学生の発表》</u>
10:25	<u>《ディスカッションの振り返り》</u>
10:35	本校チーム・国内連携校の代表者による提言内容の説明
10:40	<u>《共同宣言》</u>
10:45	<u>《フィナーレ》</u> ① 講評（国連WFP協会） ②修了証授与 ③ 閉会宣言
11:00	<u>「食」のサミット閉会</u> 閉会后、一般生徒は教室に戻りLHR。（事後アンケートに回答）
12:20	放課
▼ 代表チーム・GIクラスのみ ▼	
12:30	<u>昼食・フェアウェルパーティー（国内連携校・GIクラス）</u> 〔大会議室〕 フェアウェルパーティー終了、見送り

6. 参加者数

拠点校生徒 1058名（高校1・2・3年生、中学生）、教職員 80名、
 連携校 21名（国内 生徒15名・引率4名、海外 生徒6名）、来賓 10名
 計 1169名 ※ オンラインでの参加を含む

7. 食のサミットの記録

(1) オープニング 【食のサミット1日目】

2年GIクラスの司会のアナウンスにより、講堂でのステージ発表が始まり、オープニングでは、学校長挨拶、水仙会（生徒会）会長挨拶、来賓紹介が行われた。昨年度に引き続き、海外連携校はオンラインでの参加となるため、通信トラブルの発生を想定し臨機応変に対応できるようリハーサルで準備を行っている。本年度は開始時点で大きなトラブルも無く、順調に会を始めることができた。



食のサミット オープニング

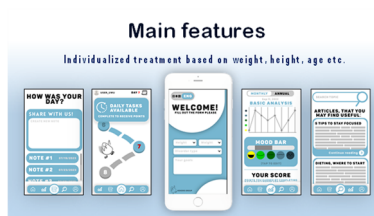
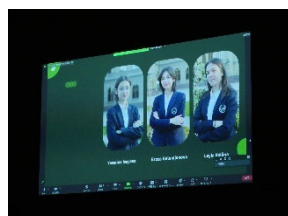
(2) 代表チームによる解決策の発表（ステージ発表） 【食のサミット1日目】

国内外の各校代表6チームが、食のサミットのテーマにもとづき、課題とその解決策に関する提言を発表6分間で行った。前半の発表は、京都先端科学大学附属高校・ウズベキスタン・本校の3チーム、後半は中村学園三陽高校・モンゴル・高知国際高等学校の3チームが、熱のこもったプレゼンテーションを行った。各チームのテーマおよびトピックスは次の表の通りである。

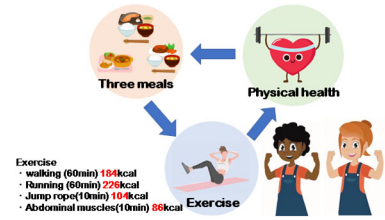
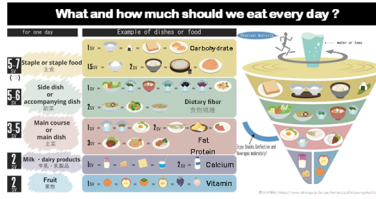
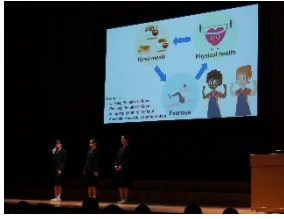
No.	学校名（国名）	人数	テーマ	トピックス
1	京都先端科学大学附属高校	3	共同食(コミュニティダイニング)を通しての世代間コミュニケーション	高齢者の孤食
2	Academic Lyceum of Westminster Intl. Univ. in Tashkent (ウズベキスタン)	3	青少年や子供たちの摂食障害の関連性と、テクノロジーや社会的影響力を利用した問題解決の方法	児童・青少年の摂食障害の問題
3	中村学園女子高校	3	私たちの食生活と栄養問題	ダイエットと栄養問題
4	中村学園三陽高校	6	今後10年の食の変化を予測した新ビジネス	デジタル技術を使った未来の健康サービス
5	General Secondary School #84 (モンゴル)	3	Lost in the fog	メンタルヘルスと特別支援を必要とする子ども達の現状
2	高知国際高校	3	今日の非常食に対する日本人の関心及び、課題解決に向けた対応策の提示	非常食を使ったアレンジメニュー



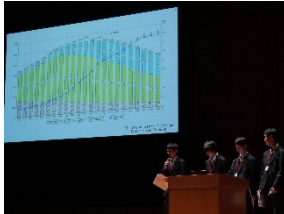
京都先端科学大学附属高等学校チーム



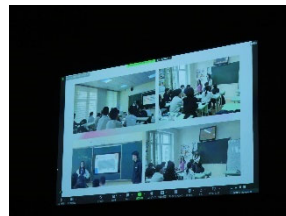
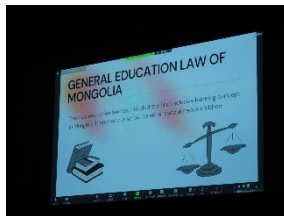
ウズベキスタンチーム（オンライン）



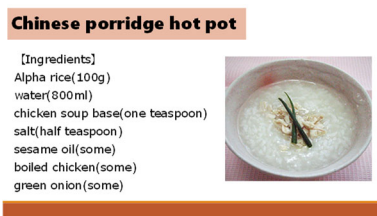
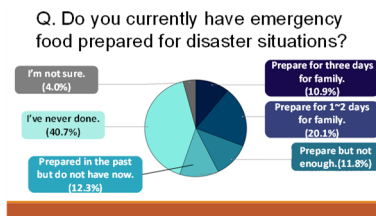
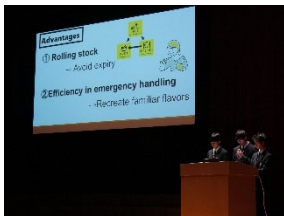
中村学園女子高等学校チーム



中村学園三陽高等学校チーム



モンゴルチーム (オンライン)



高知国際高等学校チーム

(3) サミット 【食のサミット1日目】

第1日目前半のステージ発表を終えて後、午後は国内外の各校代表チームがハイブリット形式で会議を行った。この会議の目的は、食のサミットのテーマ「食と健康 - 生涯を通じて現代における食と健康の課題に取り組む」に基づいて各チームで出し合った課題と、その解決に向けたアクションプランを宣言書として取りまとめることである。ここで作成された宣言書は、翌日のサミットにおいて代表生徒がステージでWFP協会に提出し、参加者全員に向けて共同宣言を読み上げることになっている。

オープニング・アイスブレイク・グループ討論 (意見交換)

対面参加チームである本校と中村学園三陽高校、京都先端科学大学附属高校、高知国際高校の4チームは視聴覚室に集合し対面で参加。海外連携校2チームはZOOMでの遠隔参加となっている。今回は代表メンバー間での挨拶も兼ね、アイスブレイクから開始した。続いてのグループ討議については、まず始めに各チームのメンバー混成で5つのグループを作り、互いの課題と解決策について意見交換

を行った。事前に行ったアイスブレイクの効果もあってか、比較的スムーズにコミュニケーションを取ることができていたようである。なお、オンラインで海外連携校も参加のため、会の進行は全て以後のみで行われている。

宣言書（アクションプラン）の作成

本年度は、「食と健康」に関する諸問題を考え、その解決策として「各校においてこれから一年間で行う活動」を「アクションプラン」としてまとめ、宣言書とする方針で議論を行った。約3時間に渡る議論の末、全体で行う活動の方針と各校で行う活動（アクションプラン）を明文化し、それを宣言書の完成として活動を終了した。今回の反省点としては、海外連携校に向けたオンライン配信について不十分な点が多々あり、海外とのコミュニケーションをスムーズに行うことができなかった点が挙げられる。今後、オンライン配信のための人材育成や設備投資も大きな課題として考えなければならぬ。



サミットにおける宣言書の作成（食のサミット1日目午後）

全校ディスカッション

GIクラス以外の生徒もサミットへの関心を高め、食の問題に真剣に向き合う場を作りたいという考えから、本年度は全校でディスカッション活動を実施した。今年度は高1・高2すべての生徒を対象に、クラスの枠組みを超えたランダムな4～5名グループで食と健康についての意見交換や、諸問題の解決策についてディスカッションを行った。ディスカッションの詳細なテーマはクラス毎に事前に割り振りを行っており、「子ども（の食と健康）」「成人（の食と健康）」「高齢者（の食と健康）」の3つのカテゴリに分け、全17教室、114グループ（1グループあたり4名～5名）で一斉にディスカッションを行っている。この活動でのファシリテーターはGIクラスの1年生が担当し、司会や会の進行を行った。ディスカッションはワークシートに沿って実施され、最終的にグループ内でまとめた解決策の案が1枚のプリントに仕上がる仕組みとなっている。各グループで使用したワークシートは回収され、翌日に控える食のサミット2日目（共同宣言）の場にてGIクラスの生徒による振り返り発表を行った。



全校ディスカッション（食のサミット1日目午後）

(4) 共同宣言・フィナーレ 【食のサミット2日目】

本校、中村学園三陽高校、京都先端科学大学附属高校、高知国際高校から各1名、計4名の代表生徒が、前日のサミットにおいて議論し、今後の活動として決めたアクションプランの内容を英語読み上げて宣言した。その後、宣言書を国連 WFP 協会事務局長青木様に提出し、本サミットの講評をいただいた。



共同宣言（食のサミット2日目）

(5) 閉会行事（修了証授与）

司会が学校名と名前をアナウンスし、各校代表チームの1人ひとりに、学校長より労いの言葉とサミットの修了証（Certificate）の授与があった。その後、司会者による閉会宣言で食のサミット2023は幕を閉じた。



閉会行事（食のサミット2日目）

8. アンケート結果と担当者の考察

サミットの前後に全校生徒へのアンケート調査を行った。結果は次の表の通りである。いずれも肯定的な回答の割合(%)を記した。中学・高1・高2・高3を対象としている。

	日本国内の「食」に関する課題について								海外の「食」に関する課題について							
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後		
	日本には「食」に関する課題がある	日本には「食」に関する課題がある	私は、日本の「食」に関する課題解決に興味がある	私は、日本の「食」に関する課題解決に興味を持った	日本の「食」に関する課題を解決するために、私たちができることがあると思う	日本の「食」に関する課題を解決するために、私たちができることがあると思う	日本の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う	日本の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う	海外には「食」に関する課題がある	海外には「食」に関する課題がある	私は、海外の「食」に関する課題解決に興味がある	私は、海外の「食」に関する課題解決に興味を持った	海外の「食」に関する課題を解決するために、私たちができることがあると思う	海外の「食」に関する課題を解決するために、私たちができることがあると思う	海外の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う	海外の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う
中学	91.7%	95.0%	55.0%	76.7%	91.7%	93.3%	43.3%	58.3%	91.7%	100.0%	61.7%	75.0%	58.3%	90.0%	13.3%	31.7%
1年GI	89.5%	100.0%	63.2%	81.5%	89.5%	96.3%	44.7%	48.1%	89.5%	92.6%	71.1%	85.2%	65.8%	85.2%	15.8%	25.9%
1年その他	89.2%	97.2%	66.9%	86.7%	93.6%	96.4%	39.8%	61.7%	91.6%	96.8%	64.1%	82.7%	72.5%	82.7%	14.3%	35.1%
2年GI	100.0%	100.0%	76.9%	94.7%	100.0%	100.0%	69.2%	100.0%	100.0%	94.7%	84.6%	78.9%	100.0%	89.5%	38.5%	52.6%
2年その他	94.5%	97.5%	74.7%	88.9%	93.3%	98.0%	53.4%	69.3%	96.4%	98.0%	73.5%	83.6%	75.5%	89.8%	30.8%	49.2%
3年GI	84.0%	94.7%	88.0%	100.0%	100.0%	100.0%	84.0%	89.5%	100.0%	100.0%	96.0%	100.0%	96.0%	94.7%	56.0%	63.2%
3年その他	93.5%	93.9%	73.4%	90.8%	93.5%	96.3%	69.0%	83.4%	91.3%	98.2%	73.9%	85.9%	81.0%	87.1%	44.6%	62.0%

	生徒の興味・関心について				提携校との連携について				満足度調査					
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事後	事後		
	現在、海外への関心がある	海外の連携の発表を聞いて、海外への興味・関心が増した	英語や探究の授業が好きだ	海外の連携の発表を聞いて、英語や探究の学習意欲が増した	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<現在>必要であると思う	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<現在>必要であると思う	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<将来>必要であると思う	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<将来>必要であると思う	国内の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	国内の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	海外の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	海外の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	食のサミット(ステージ)発表やディスカッション)は有意義な時間だったと思う	食のサミット(ステージ)発表やディスカッション)は有意義な時間だったと思う
中学	63.3%	76.7%	61.7%	63.3%	96.7%	98.3%	95.0%	100.0%	66.7%	78.3%	65.0%	76.3%	95.0%	91.7%
1年GI	92.1%	96.3%	84.2%	88.9%	92.1%	88.9%	94.7%	96.3%	89.5%	88.9%	94.7%	88.9%	92.6%	81.5%
1年その他	64.9%	73.7%	50.2%	57.7%	94.8%	98.0%	97.2%	98.4%	56.6%	75.8%	61.0%	72.2%	91.1%	91.1%
2年GI	84.6%	73.7%	53.8%	52.6%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	76.9%	94.7%	69.2%	78.9%	89.5%	84.2%
2年その他	62.1%	72.5%	44.3%	54.7%	92.1%	94.7%	93.3%	95.9%	53.0%	67.6%	53.4%	64.8%	85.7%	84.0%
3年GI	88.0%	94.7%	72.0%	63.2%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	64.0%	94.7%	76.0%	89.5%	94.4%	94.7%
3年その他	67.9%	73.0%	49.5%	61.3%	92.4%	93.9%	91.8%	96.3%	54.9%	64.4%	54.3%	65.6%	83.4%	77.9%

〔考察〕

- (1) 「日本国内の『食』に関する課題について」の項目の中では、「私は、日本の「食」に関する課題解決に興味を持った」・「日本の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う」の項目が全学年 かつ GI・その他のクラス両方で大きく肯定的な回答の割合が上昇している。
- (2) 「海外の『食』に関する課題について」の項目の中では、「私は、海外の「食」に関する課題解決に興味を持った」・「海外の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う」の項目が全学年 かつ GI・その他のクラス両方で大きく肯定的な回答の割合が上昇している。また、中学生においては「海外の「食」に関する課題を解決するために、私たちができることがあると思う」の項目が非常に大きく上昇している。
- (3) 「生徒の興味・関心について」の項目の中では、「多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<将来>必要であると思う」の項目が全学年 かつ GI・その他のクラス両方で肯定的な回答の割合が上昇している。
- (4) 「提携校との連携」の項目の中では、「国内の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う」・「海外の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う」の項目が全学年 かつ

GI・その他のクラス両方で肯定的な回答の割合上昇している。中でも特に GI クラス 2 年と GI クラス 3 年の伸びが非常に大きい。

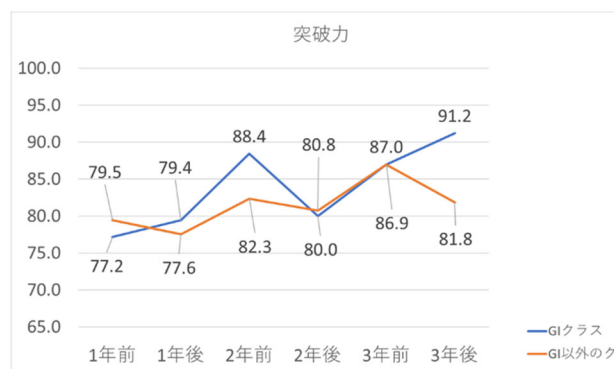
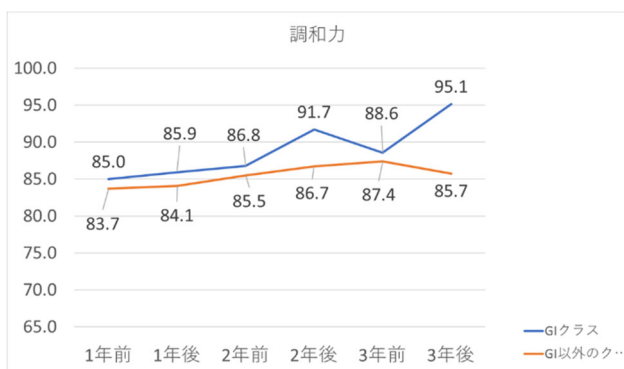
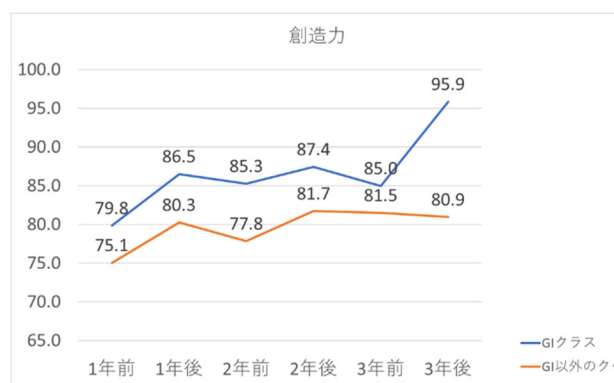
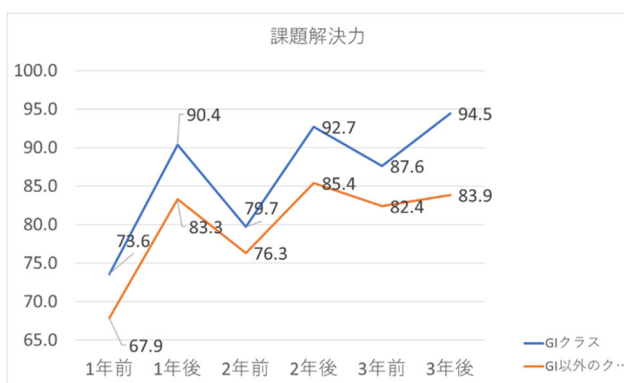
(5)「満足度調査」の項目は事後アンケートのみの回答であったが、「食のサミット(ステージ発表やディスカッション)は有意義な時間だったと思う」・「食のサミット(ステージ発表やディスカッション)で印象に残った発表やキーワードがある」の項目において、その他のクラスより GI クラスの方が肯定的な割合が高い傾向にある。

- ・①・②からわかることは、食のサミットを実施したことで、学校全体として国内外の「食」に関する課題に関心を持つことができたということである。GI クラスはもとより、それ以外の生徒にも関心を持たせることができたことはサミット実施のねらいはひとつ達成できたといえる。また、中学生が特に肯定の伸び率が高く、今回取り上げた食と健康は、中等教育の早期から取り扱うテーマとしても適切であったと考えられる。
- ・③からは、海外の連携校の参加が、異文化理解に大きく影響を与えているということが分かる。
- ・④については「1年GI」と「2年GI・3年GI」で結果が異なっている点が興味深い。昨年度の「食のサミット」を知る2年GIは、学校生活全般でも指導的な役割を担い、活躍できる場面も増えていることから外部との連携活動に積極的なのだろう。それに対して、高1生は今回の「食のサミット」がはじめてで、まだまだ学校生活では指導を受ける場面の方が多い。積極的に外部との活動に参加したいというよりは、尻込みし、消極的な感想を抱く生徒が多かったのかもしれない。
- ・⑤については、GIクラスではないその他クラスにとって、活動の機会が物足りなかったことが窺える。WWL事業の中心となるGIクラスだけでなく、その他のクラスにももっと活躍の機会を与えていくことが、今後の課題といえる。
- ・アンケート全体から総括すると、GIクラスが「食のサミット」に対して初めから積極的な姿勢・肯定的な印象を持っていることはいうまでもないが、他クラスの生徒もサミットを通じて、食の課題や語学学習に積極的・肯定的になったことはサミットの成果といってよいであろう。学年で見るときに、高1生についてはこちらの満足した成果は得られていない。高1生にもっと探究や発表の機会を与えることで、積極的なイベント参加の姿勢を促すことが今後の課題である。

VI-1	検証委員会	
2024. 2. 28 (水) 16:00~17:00		オンライン

検証委員会は、WWL 事業で得られた様々なデータに基づき事業効果の検証を行う委員会である。今年度は WWL 事業 3 年間の事業効果検証アンケートの比較を中心に今後の教育活動に必要な問題を議論した。

本校では年 2 回 32 問からなる事業効果アンケートをとり、項目を独自に分析し、WWL 事業の中心である GI クラスとそうでない他クラスについて「課題解決力」「創造力」「調和力」「突破力」の変化を見てきた。今年度卒業する高 3 生の 3 年間の成長を観測・比較したものが、以下の 4 つのグラフである。



(※グラフ中の「1年前」は1年生の前期、「1年後」は1年生の後期をあらわしている。2年、3年も同様である)

以下が検証した結果である。

- ①「課題解決力」は各学年年度が上がるにつれ、課題が難しくなるため、前半は数値が必ず下がる。いずれの学年でも GI クラスの方が上昇率が高く、探究活動の質・量と比例しているのではないかと考えられる。
- ②「創造力」に関しても探究活動の多さが GI クラスの数値の高さに影響していると考えられる。高 3 の後半に高い上昇を見せるのは論文（探究成果物）を作成したことと関係していると考えられる。
- ③「調和力」に関しては高 2 の後半で GI クラスの伸びが目立つ。これは「食のサミット」や学外の発表会にグループで参加した結果、チームワークが必要な場面が多かったからだと推測できる。

④「突破力」に関しては高2の前半で大きく上昇しているが、これは1年生3学期のカナダへのターム留学が要因だと考えられる。

以上の4点をふまえ、WWL事業で準備した様々な活動とそのカリキュラムがイノベーターに必要なだと拠点校が設定した4つの能力に結びついているとすることができるのではないだろうか。

今後はさらにこれらの能力を向上していくための工夫が必要となる。検証委員からは、

- ・人生観を変えるような強烈な経験（留学や海外での挑戦など）
- ・何をもって失敗か成功かを再定義し、「失敗に肯定的」な雰囲気づくり
- ・議論することの楽しさ

といった改良点のアドバイスを受けた。

来年度以降の活動に活かしていきたい。

VI-2	第1回運営指導委員会
2023.9.8(金)15:00~17:00	拠点校：大会議室

1. 日時：2023年9月8日(金)15:00~17:00

2. 場所：拠点校(大会議室)

3. 参加者：

[運営指導委員]

岩本 仁 氏 (学校法人福岡成蹊学園 理事長)

小野 博 氏 (グローバル人材育成教育学会 名誉会長)

高橋 信命 氏 (福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局私学振興課 参事補佐)

藤 眞臣 氏 (NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡 専務理事)

[オブザーバー]

今長谷 大助 氏 (SG インキュベート株式会社 代表取締役社長)

岩本 新治 氏 (株式会社久原本家グループ本社 経営管理本部 経営企画部)

※代表取締役社長 河 邊 哲 司 氏代理ご参加

副島 雄児 氏 (九州大学 名誉教授)

米濱 和英 氏 (株式会社リンガーハット 名誉会長)

[管理機関(中村学園)]

中村 紘右 (WWL 管理機関長 / 理事長)

松本 公典 (経営企画室 室長)

伊東 正子 (経営企画室)

[拠点校(中村学園女子高等学校)]

石丸 篤志 (WWL 実行委員長 / 校長)

朝野 保彦 (教頭)

堤 明雄 (教頭)

吉川 正治 (事務長)

西尾 正 (事務長補佐)

西岡 隆行 (教育開発部長)

4. 会次第：

- (1). 開会挨拶
- (2). WWL 拠点校実行委員長挨拶(校長 石丸)
- (3). 運営指導委員紹介
- (4). 令和5年度スケジュール及び事業運営について(教育開発部長 西岡)
- (5). GI クラス探究活動見学
- (6). 次年度以降の自走化に向けた課題(教育開発部長 西岡)
- (7). 審議及び質疑応答
- (8). WWL 管理機関長挨拶(理事長 中村)

5. 委員からのご意見

- ・昨年度 GI1 期生が卒業したため、今後卒業生の追跡調査やヒアリングを行い、3年間の活動がどのように影響しているかを検証することが必要である。
- ・海外大学進学への機会を広げていくことも望ましい。
- ・学校のグローバル化を推進する上では教職員の国際化を図ることが大切である。自分が経験したことがないことは、当然生徒にも勧められない。研修の機会等を設けることもよい。
- ・海外では、大学へ行くことが目的というよりは「社会で何をしたいか」に目を向ける傾向がある。将来に対する具体的なビジョンをつくるような活動を今後も継続していただきたい。
- ・企業では品質不良によるリコールの問題等が生じているが、技術・ノウハウ以上にフィロソフィーが大切であり、物事の善悪を学ぶ必要がある。人間教育を根幹に、引き続き事業を継続していただきたい。アントレプレナーシップ講座を高校生で経験できることは貴重な機会である。
- ・企業コラボは現在クラス単位で行っているが、生徒の興味・関心に応じて少数や個人で行うのもいい方法のように思う。クラスの中で意欲の高い生徒とそうでない生徒の差が生じる懸念もあり、意識が低い生徒をどのように引っ張っていくかが課題である。

VI-3	第2回運営指導委員会
2024. 3. 8(金) 15:20～16:30	拠点校：大会議室

1. 日時：2024年3月8日(金) 15:20～16:30

2. 場所：拠点校(大会議室)

3. 参加者：

[運営指導委員]

岩本 仁 氏 (学校法人福岡成蹊学園 理事長)

小野 博 氏 (グローバル人材育成教育学会 名誉会長)

高橋 信命 氏 (福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局私学振興課 参事補佐)

[オブザーバー]

今長谷 大助 氏 (SG インキュベート株式会社 代表取締役社長)

岩本 新治 氏 (株式会社久原本家グループ本社 経営管理本部 経営企画部)

※代表取締役社長 河邊 哲 司 氏代理ご参加

[管理機関(中村学園)]

中村 紘右 (WWL 管理機関長 / 理事長)

松本 公典 (経営企画室 室長)

伊東 正子 (経営企画室)

[拠点校(中村学園女子高等学校)]

石丸 篤志 (WWL 実行委員長 / 校長)

朝野 保彦 (教頭)

堤 明雄 (教頭)

吉川 正治 (事務長)

西尾 正 (事務長補佐)

西岡 隆行 (教育開発部長)

4. 会次第：

(1). 開会挨拶

(2) WWL 拠点校実行委員長挨拶(校長 石丸)

(3) 運営指導委員長挨拶(福岡成蹊学園 理事長 岩本 仁 氏)

(4) WWL 事業総括及び次年度以降の自走化について(教育開発部長 西岡)

(5) 質疑応答

(6) WWL 管理機関長挨拶(理事長 中村)

5. 委員からのご意見

- 2015 年度～2019 年度スーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定期間を経て、WWL 事業終了までの約 10 年間で学校が変化した印象をもっている。一般的に学校は新しいことに対して後ろ向きになりがちだが、様々なことにチャレンジしてきた結果が卒業生の姿(進路等)に繋がっている。今後自走化していく上で、教職員のグローバル化を図ることも大切であり、他国の教育制度に触れたり研修の機会を設けて教職員全体の意識を高めることも必要である。
- 留学(希望制)については、留学に行っていない生徒に対するフォローをどのように行っていくか検討する必要がある。留学に行っていない生徒の中には、経済的な理由で留学を希望しないというよりは、海外に関心はあるが留学は大学に入ってからでもよいと考えている生徒も多数いる。他生徒が留学に行っている間、オンライン等を活用し海外の連携校と交流をしたり、留学生との交流機会を深める等の更なる工夫も検討することがよい。
- 2 か月間のターム留学で英語力の向上が図れるのか。短期間の留学では、多文化理解・受容力等の姿勢は身につくが、英語運用能力が身に着くまでには時間を要する。
- アンケート結果やアセスメント、進路結果を通し、目指す人材像の目標に対して概ね狙い通りに進んでいる印象を受ける。県主催の海外派遣事業等も実施しているので、ぜひ参加いただきたい。
- 高校時代に様々な経験を通して得られる気づきや、世の中をみながら自己を見つめる時間、自分を表現することを許してもらえる環境があることは素晴らしい。自分とは何か?自分は何になりたいたのか?などのモチベーションがある故の学力の向上であることを、卒業生の姿を通して感じた。

VI-4	カリキュラム検討委員会
2023. 6. 26(月)・2024. 2. 20 (火)・2024. 2. 26 (月)	拠点校：会議室、オンライン

昨年度にひきつづき、カリキュラム検討委員会は九州大学の小島健太郎氏、タイガーモブ株式会社の中村寛大氏の2名をカリキュラムアドバイザーとし、実行委員長である拠点校の校長、教頭、教務部長、教育開発部長で構成している。拠点校で実施しているカリキュラムの進捗状況の確認と改善・修正を定期的に行い、アドバイザー両名から適宜、指導と助言をいただいた。

今年度は6月26日の第1回を皮切りに、2月26日の最終回までの年3回を対面・オンラインで開催した。各回の審議・報告事項は次の通りである。

回	開催日	審議・報告事項	参加者
1	2023. 6. 26 (月)	令和5年度の教育活動の予定と実施にあたって注力すべきポイント	小島氏・中村氏 他3名
2	2024. 2. 20 (火)	令和6年度以降のWWL事業・GIクラスの活動と改善すべき点	小島氏他3名
3	2024. 2. 26 (月)	令和6年度以降のWWL事業・GIクラスの活動と改善すべき点	中村氏他2名

小島氏からは高大接続事業や探究成果物・論文作成の指導、中村氏からは海外交流や他校の探究実践例を中心に、貴重な助言と指摘を受けた。広く探究活動について、以下のような知見を得た。

- ・高校は大人の社会とは違い「安心して失敗できる場所」という認識を持つこと。
- ・(小中学校を経て) 他者から評価されることに生徒は慣れていないが、「自分が自分を」評価することの大切さに気づく時期に高校生はあつて欲しいということ。
- ・「自己理解を深める」「自分の好きなものをつきつめる」探究活動が増えているが、事前に「心理的安全性」がないとかえって委縮する。事後のアンケート等を利用して、一人一人のフォローを大切にしている指導体制が必要である。
- ・視察や講演など先進的な取り組みの情報を集めても教員には広まらない(ショーケース化)。活動の意義を納得してもらえように対話の機会や自ら気づいてもらえる機会が必要である。
- ・テーマが大きいイベントや活動は壮大すぎて生徒には負えない。自由度が高いのはいいが、マイルステップ(教員が準備した、目標に向かうため取り組みやすいお題)を積み重ねていく工夫が必要である。
- ・クリティカルシンキングの必要性が叫ばれている。探究活動だけではなく、あらゆる教育活動の場面で学ぶ機会が増えたらよい。ペアワークや簡単なスピーチといったところから、まずは「批判する(される)」ことへの抵抗感をなくしていけばよいのではないだろうか。

いずれの項目にしても、教育活動を担う学校と教員、そして生徒がどういった姿勢で取り組むか、また取り組むように仕向けていくかという教育の体制に関わるものである。探究活動や一部のクラスの指導だけではなく、組織の運営方法の抜本的な見直しや教育目標の更新と共通認識の促進といった意識改革が必要であるといえる。

VI-5	指導指標の測定
年3回(学期末)	拠点校

1. 目的

教師自身に指導実態の自己評価を行わせることで授業改善を意識させ、学校全体としてアクティブ・ラーニング型授業の導入を積極的にすすめることを目的としている。

2. アンケート結果

令和5年度 指導指標測定結果

測定教員数：71名

No.	指標項目	1 学期		2 学期		3 学期	
		教員の割合%	昨年度との差	教員の割合%	昨年度との差	教員の割合%	昨年度との差
1	ほぼ毎時間、生徒が考える時間を少しでもとっている。	100	+3	100	+1	98	±0
2	ほぼ毎時間、生徒が発表する機会をとっている。	84	+1	86	+1	82	-3
3	これまでに一人では解決できない発問を投げかけ、その問題解決のためにペアワークやグループワークなどをする時間をとったことがある。	78	+9	86	+9	75	+5
4	これまでに生徒どうして教え合う時間をとったことがある。	73	+9	73	±0	76	+9
5	生徒がテーマや課題に基づき、それを調べたり考察したりするような活動を行ったことがある。または、そのような宿題を課したことがある。	70	+17	86	+28	65	+9
6	学期中には、これまでの教科内外で学んだ知識を関連づけた学習内容を扱うことで、生徒により深い理解を促すような授業を行ったことがある。	59	+6	61	±0	71	+13
7	学期中には、情報を精査して新たな考えを形成させるなど、批判的思考力を身につけさせることをねらいとした授業を行ったことがある。	48	+9	39	+6	49	+3
8	学期中には、問題を見出して課題解決を考えさせる授業を行ったことがある。	59	+6	59	±0	59	+2
9	学期中には、生徒の思いや考えをもとに創造し表現する活動を取り入れた授業を行ったことがある。	52	+1	59	+4	53	-1
10	「生徒が学びの主人公」であることを常に念頭におき、日々の授業を改善しようとする意欲を持ち続けているか。	100	±0	98	-1	100	+2

11	授業や生徒指導、生徒会活動、クラブ活動などで「生徒が学びの主人公」であることを具体化するための実践を行ったか。	88	+9	86	±0	90	+7
----	---	----	----	----	----	----	----

《No. 9 の具体例》

- ・ 創作料理の調理実習
- ・ SDGs をテーマにした寸劇をする
- ・ 創作ダンスの授業において、気になるテーマを設定しそれに基づいてダンスを創作させ、最後の授業で発表の場を設けた
- ・ ポスターなどの作品制作
- ・ 評論文を題材に絵を描かせた
- ・ 自由英作文とその交換採点

3. 考察

とくに数値が大きく上昇したのはNo. 5 の項目で、No. 3・4・6・7 も数値の上昇が著しかった。国語や地歴などは教科名も変わり、これまでの従来型の授業から「探究」に重きを置く、課題を発見したり、思考力・判断力・表現力をはかる機会が増えてきた。自ずと授業での問いかけや課題の与え方に変化が生まれたことが要因であると考えられる。またペアワークの頻度も増加していることが要因とも考えられる。アクティブ・ラーニングや対話型の授業展開が浸透してきたことを示しているのではないだろうか。SGH、WWL と指導指標を行ってきたが、数値を見る限り、アクティブ・ラーニングや探究活動が現場で実践されている機会が増えている。今後さらなる教員の授業力や技術の研鑽に組織的に取り組んでいきたい。

令和 5 年度 WWL 関連年間行事一覧

日程	内容	対象	実施形態
4 月			
15 日	グローバル講演「SDGs 達成のために必要なグローバルスタイルとは？」 講師：福岡教育大学 教授 石丸 哲史 氏	高校 1 年生	対面
21 日	夏季海外研修説明会	中学生・高校生希望者	オンライン
28 日	夏季海外研修説明会	中学生・高校生希望者	対面
6 月			
16 日	ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ(KCC)説明会	中学生・高校生希望者	対面
26 日	カリキュラム検討委員会	拠点校、カリキュラム 検討委員	対面
7 月			
1 日	Nakajo-Times Global (5 号) 発行	—	—
1 日	第一回 GI 留学説明会	GI1 年生希望者・ 保護者	対面
7 日	論文指導	GI3 年生	対面
28 日	GI プレゼンテーション	GI3 年生	対面
8 月			
1 日	第二回 GI 留学説明会	GI1 年生希望者・ 保護者	対面
2 日	立命館アジア太平洋大学説明会	中学生・高校生希望者	オンライン
19 日～26 日	留学支援金選考(一次選考)	GI1 年生希望者	(書類選考)
9 月			
8 日	第一回運営指導委員会	管理機関、拠点校、 運営指導委員	対面
11 日	留学支援金選考(二次選考)	GI1 年生一次選考通過 者	対面
12 日・13 日	GI フィールドワーク Basic 「グローバルキャンパス」 (事業協働機関：立命館アジア太平洋大学)	高校 1 年生	対面
10 月			
14 日～26 日	AFS タイ留学生(9 名)短期留学プログラム受入れ	高校 1 年生クラス配属	—
19 日～24 日	GI フィールドワーク Advance 「マレーシア・シンガポール研修」(事業協働機関:University of Technology, Malaysia)	GI2 年生	—
11 月			
26 日	アジア高校生架け橋プロジェクト+留学生(4 カ国 4 名)福岡到着(~2024 年 3 月 16 日)	GI1・2 年生クラス配属	—
12 月			
7 日	第 1 回アントレプレナーシップ講座	GI1 年生	対面

	「起業、ベンチャーキャピタルについて」 「身近な課題について」 講師：株式会社 FVentures 代表取締役 両角 将太 氏 (事業協働機関：SG インキュベート株式会社)		
14 日	食のサミット (事業協働機関：国連 WFP)	高校全学年、連携校	ハイブリッド
15 日	食のサミット共同宣言 (事業協働機関：国連 WFP)	高校全学年、連携校	ハイブリッド
1 月			
23 日	京都先端科学大学附属高等学校グローバル・シミュレーション・ゲーミング(GSG)参加 (連携校：京都先端科学大学附属高等学校)	GI2 年生	対面
25 日	第 2 回アントレプレナーシップ講座 「中村学園版 Toryumon(模擬ピッチコンテスト)」 講師：株式会社 FVentures 代表取締役 両角 将太 氏 (事業協働機関：SG インキュベート株式会社)	GI1 年生	対面
2 月			
1 日	GI 留学出発(カナダ・トロント近郊) (～2024 年 4 月 2 日帰国予定)	GI1 年生希望者	—
20 日	カリキュラム検討委員会	拠点校、カリキュラム 検討委員	オンライン
26 日	カリキュラム検討委員会	拠点校、カリキュラム 検討委員	オンライン
28 日	検証委員会	拠点校、検証委員	オンライン
3 月			
1 日	Nakajo-Times Global (6 号) 発行	—	—
8 日	WWL 報告会	高校 1・2 年生、連携校	ハイブリッド
8 日	第 2 回運営指導委員会	管理機関、拠点校、 運営指導委員	対面
9 日	高知県立高知国際高等学校探究成果報告会参加 (連携校：高知県立高知国際高等学校)	GI1 年生	対面
12 日	AL ネットワーク連絡会(国内)	拠点校、国内連携校	オンライン
13 日	AL ネットワーク連絡会(海外)	拠点校、海外連携校	オンライン
16 日	アジア高校生架け橋プロジェクト+留学生 帰国の途へ	留学生	—



Nakajo-Times Global

Nakamura Gakuen Girls' Senior High School

6号

2024
SPRING

発行日:2024年3月1日

pick up
1

広がる世界、広がる笑顔!
高校1年学年行事

「グローバルキャンパス」

高校1年生がグローバルキャンパスに参加しました。生徒たちはAPUの留学生との交流で英語でのコミュニケーションを体験。多様性の受容と自主性が芽生えました!2日間の交流は生徒たちにとって楽しくも貴重な経験となったようです。



pick up
2

マレーシア・シンガポール探訪!
G12年生の海外研修

「GIフィールドワーク」

G12年生がマレーシア・シンガポールの海外フィールドワークに参加しました。マレーシア文化や料理を楽しみ、WWL事業協同機関のマレーシア工科大学ではSDGsに関する英語での活動やVRラボ体験にも参加しました。マラッカの世界遺産を探索し、シンガポールでは生徒が計画したフィールドワークを行いました。



pick up
3

未来の起業家を育てる!G11・2年生

「アントレプレナーシップ講座」

G11年生がアントレプレナーシップ講座に参加しました。起業家精神を学び、グローバル・イノベーターに必要な企画力や創造力、調和力を身につけます。今年はWWL事業協同機関SGインキュベート代表取締役の今長谷大助氏など4名の講師が講演・ワークショップを実施しました。生徒は日常の課題からグループでアイデアを出し合い、起業の可能性を学びました。



pick up
4

食テーマの高大連携プロジェクト!G12・3年生

「GIプレゼンテーション」

九州大学や中村学園大学などから7名の先生方をお招きして、G13年生の論文発表会が行われました。食をテーマに論文を作成し、先生方の研究者の視点からのアドバイスで視野を広げました。GI最後のイベントを終え、満足と成長を胸に新たなステージへと飛び立ちます。



pick up
5

食と健康の課題に挑戦!

「食のサミット」

12月に開催された「食のサミット2023」は、海外連携校を含めた6校が参加しました。テーマは「Addressing today's food and health challenges through the lifespan」。全校で生徒同士が協力し「食と健康年表」を作成したり、各校が食と健康に関する解決策を提言したりと、生徒が国際的な視点で問題解決に挑み、食と健康に関するアイデアを共有しました。



What is WWL ?

文部科学省支援事業「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」では、国内外の各種学校・企業・国際機関等と協働してイノベティブなグローバル人材の育成を目指すカリキュラム開発を行います。本校は、2020年度より福岡初となるカリキュラム開発拠点校に指定されました。



異文化理解・交流のチャンス!

「留学生来日」

今年10月、AFSの短期留学プログラムによりタイから留学生9名を迎えました。約2週間、高校1年生のクラスに所属し留学生を送りました。特別レッスンでは小さな基平を作成したり、茶道部に参加し日本の文化を体験したりしながら本校生徒との交流を深めました。

また、2018年度～2022年度に実施された文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」の後継事業として、本年度より「アジア高校生架け橋プロジェクト+（プラス）」が開始。1期生として4カ国（韓国、スリランカ、ネパール、モンゴル）4名の留学生が来ました。11月～3月の間、本校生徒との協働学習や各行事を通じて異文化理解・交流を図りました。



世界へ視野を広げよう!

「GI留学成果報告会」

本校では、GIクラス1年生希望者を対象に海外ターム留学（2月初旬～4月初旬）を実施しています。帰国後（2年次）は留学成果報告会を実施し、留学前に設定した課題に対する現地調査の報告を行います。今年度報告会にはGI1年生も参加し、終了後はブースを設けて質問ができるようにしました。そして報告会に参加した1年生が、2月にカナダへ出発しました!



※留学支援金制度: 本学園では「併設校留学支援制度」を設けており、選考に通過した生徒に留学支援金が付与されます。

12月 九州大学主催アカデミックフェスティバル2023

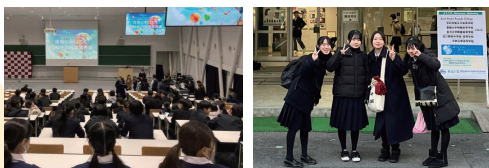
「世界に羽ばたく 高校生の成果発表会」 (オーディエンス賞受賞)

1月 WWL連携校 / 京都先端科学大学附属高等学校主催

「GSG(グローバル・ シミュレーション・ゲーミング)」

GIクラスは、WWL連携校や事業協働機関のイベントにも積極的に参加をします。

各校の代表生徒が集い、国際会議やプレゼンテーションを通して日頃の成果を発揮しました!



 **中村学園女子高等学校**

中村学園女子  <http://www.nakamura-njh.ed.jp>

〒814-0103 福岡市城南区鳥飼7丁目10番38号
TEL 092-831-0981 FAX 092-831-0985
E-mail: info@njh.ed.jp

中村学園女子高等学校
instagram



GIクラス
instagram

